山形県埋蔵文化財センター調査報告書第109集

山形元屋敷遺跡

発掘調査報告書

２００２

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

山形元屋敷遺跡

やまがたもとやしき

発掘調査報告書

平成14年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

古墳時代の土器

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、山形元屋敷遺跡の調査成果をまとめたものです。

山形元屋敷遺跡は、山形県の県庁所在地である山形市の南端部にあります。平成12年度に新たに発見され、遺跡として登録されました。

この度、花川住宅宅地関連河川整備促進事業に伴い、工事に先立って、発掘調査が行われることになりました。

調査では、古墳時代の竪穴住居のほか、平安時代の掘立柱建物も検出されました。また、現在の花川の旧河道も検出され、古墳時代の土器をはじめとして、多くの遺物が出土しました。特に古墳時代初頭の土器群は県内でも発見例が少ないものであり、貴重な資料を得たといえます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成14年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　　木　村　宰

例　　言

1　本書は、花川住宅宅地関連河川整備促進事業に係る「山形元屋敷遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は山形県村山総合支庁建設部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名	山形元屋敷遺跡	
遺跡番号	平成12年度新規登録	
所　在　地	山形県山形市大字片谷地字元屋敷	
受託期間	平成13年４月１日～平成14年３月31日	
現地調査	平成13年６月11日～８月24日	
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター	
調査組織	理　事　長	木村　宰
	専務理事	沓澤　晋作
	事務局長	長岡　徳高
	調査第四課長	渋谷　孝雄
	主任調査研究員	斉藤　主税
調査担当者	調査研究員	水戸部秀樹（調査主任）
	調　査　員	渋谷　純子

5　本書の作成・執筆は、水戸部秀樹（Ⅰ～Ⅳ・Ⅶ）、渋谷純子（Ⅴ）が担当した。また、「Ⅵ　自然科学的分析」についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

6　委託業務は下記のとおりである。

空中写真撮影	日本特殊撮影株式会社
樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
遺物実測図作成	有限会社アルケー・リサーチ

7　出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

8　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言いただいた。

山形県村山総合支庁建設部、村山教育事務所、山形市教育委員会、岩崎卓也、田島明人、真保昌弘　（順不同、敬称略）

凡　　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

　　ＳＴ…竪穴住居　　ＳＢ…掘立柱建物　ＳＫ…土坑

　　ＳＤ…溝跡　　ＳＧ…川跡　　ＳＰ…ピット

　　ＳＸ…性格不明遺構　ＲＰ…登録土器　　ＲＱ…登録石器　　ＲＷ…登録木製品

2　遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。

3　遺構図に付す座標値は平面直角座標系第Ｘ系により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を示す。

4　遺構実測図は１/40～１/300の縮図で採録し、各々スケールを付した。

5　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。

6　遺物実測図・拓本図は１/１～１/５で採録し、各挿図にスケールを付した。

7　遺構実測図中の遺物実測図は１/８で採録した。

8　遺物実測図中の土器について、土師器などは断面を白抜き、須恵器は断面を黒ベタで表示した。

9　遺物観察表中において、括弧内の数値は図上復元による推計値を示している。

10　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。

11　「第２図　山形盆地南半の地形分類図」は『土地分類基本調査　山形』を基に小林圭一が作成したものを使用した。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯……　1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……　3
Ⅲ　遺跡の概観……　6
Ⅳ　遺構……　7
Ⅴ　遺物……　11
Ⅵ　自然科学的分析……　19
Ⅶ　調査のまとめ……　21

遺物観察表……　24
遺構実測図……　36
遺物実測図……　47
報告書抄録……　64

表

表１　土師器分類表　……　12
表２　樹種同定結果　……　20
表３　土器観察表　……　24
表４　石器・石製品・礫観察表　……　34
表５　木製品観察表　……　34

挿　図

第１図　遺跡概要図　……　1
第２図　山形盆地南半の地形分類図　……　4
第３図　遺跡位置図　……　5
第４図　基本層序柱状図　……　6
第５図　土師器分類図（１）……　13
第６図　土師器分類図（２）……　14
第７図　川跡ＳＧ１土層断面図　……　36
第８図　調査区全体図、川跡ＳＧ１土層断面図　……　37
第９図　川跡ＳＧ１土層断面図　……　39
第10図　竪穴住居ＳＴ69　……　40
第11図　竪穴住居ＳＴ83・90　……　41
第12図　竪穴住居ＳＴ77、溝ＳＤ109、掘立柱建物ＳＢ102・103 ……　42
第13図　竪穴住居ＳＴ77、掘立柱建物ＳＢ102・103　……　43
第14図　掘立柱建物ＳＢ101、柵列ＳＡ96・107　……　44
第15図　掘立柱建物ＳＢ101 ……　45
第16図　溝ＳＤ61、土坑ＳＫ７　……　46

第17図　古墳時代の須恵器、土師器（甕）…… 47
第18図　甕　…… 48
第19図　甕　…… 49
第20図　甕、壺　…… 50
第21図　壺　…… 51
第22図　壺、甕壺類の底部　…… 52
第23図　甕壺類の底部　…… 53
第24図　甕壺類の底部、台付甕、坏　…… 54
第25図　鉢、甑、高坏　…… 55
第26図　高坏、器台　…… 56
第27図　丸底壺、小型土器、手づくね土器　…… 57
第28図　平安時代の須恵器（坏）…… 58
第29図　高台付坏、蓋、甕、壺、水瓶　…… 59
第30図　平安時代の土師器（甕）、赤焼土器（高台付坏）…… 60
第31図　赤焼土器（坏）、縄文土器、陶器 …… 61
第32図　勾玉形石製模造品、石器、礫　…… 62
第33図　柱材、礎板、杭　…… 63

図　版

巻頭図版　古墳時代の土器
図版１　調査区全景
図版２～５　竪穴住居
図版６～９　掘立柱建物、柵列、溝
図版10～12　川跡ＳＧ１
図版13　瓽
図版14・15　甕
図版16・17　壺
図版18　甕壺類の底部
図版19　甕壺類の底部、台付甕、杯
図版20　鉢、甑、高坏
図版21　高坏
図版22　器台、丸底壺
図版23　小型土器、手づくね土器
図版24　奈良・平安時代の土器、坏・ヘラ書き
図版25　坏、高台付坏、壺、蓋、水瓶
図版26　その他の須恵器、土師器（甕）
図版27　赤焼き土器、縄文土器、石器、礫
図版28　勾玉形石製模造品、柱材、礎板、杭
図版29　木材１
図版30　木材２

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

今回の発掘調査は、山形県村山総合支庁建設部による花川住宅宅地関連河川整備促進事業に伴う調査である。山形元屋敷遺跡は平成12年度に発見され新規登録された。事業の予定地内に遺跡が含まれるため、遺跡の遺存状態を確認することを目的として、平成12年５月・10月に教育庁社会教育課文化財保護室により、試掘調査が行われた。その結果、良好な状態で遺跡が遺存していることが明らかとなり、事業開始前に遺跡を記録保存するための緊急発掘調査が必要となった。特に試掘トレンチ№12からは下図の土師器の甕などが出土している。

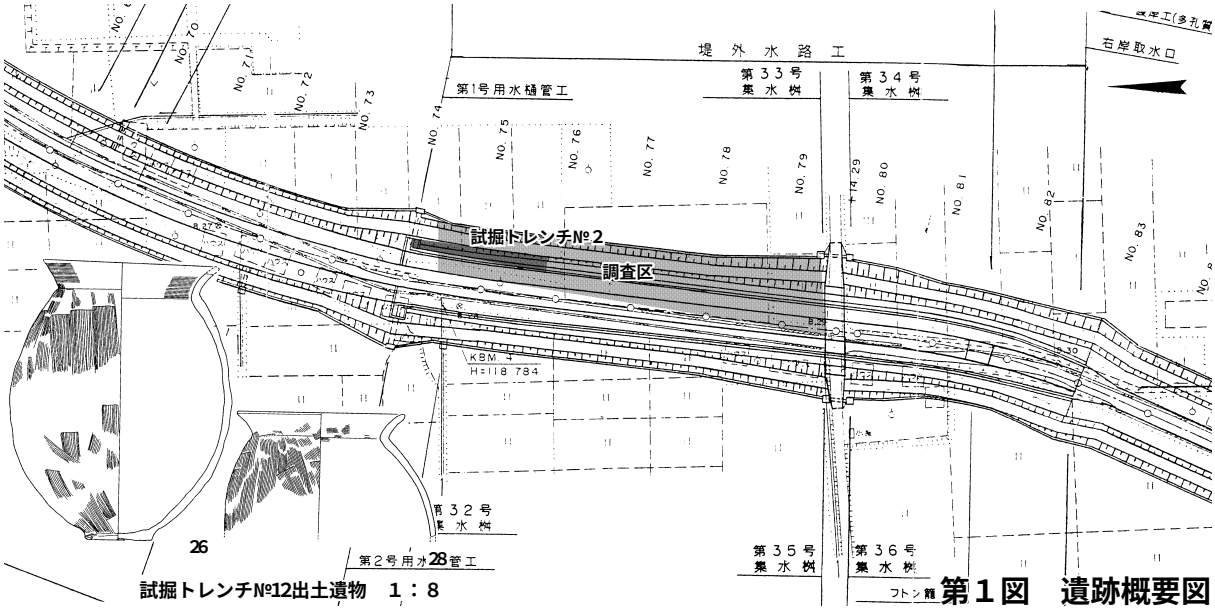
関係機関との協議の結果、調査対象面積は2,000㎡、調査期間は平成13年６月11日から８月10日となった。なお、調査は最終的に８月24日まで延長された。

平成13年４月２日に県村山総合支庁建設部長と県埋蔵文化財センター理事長の間で「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結し、発掘調査が開始された。

2　調査の経過と方法

平成13年６月８日、山形県村山総合支庁会議室において、山形元屋敷遺跡発掘調査事前打ち合わせ会を開催し、発掘調査に至る経過報告・調査機関・調査体制・調査の方法・安全対策などを確認した。以下に大まかな発掘調査の経過を記す。

平成13年６月11日に現地において調査に係る諸準備を行った。本調査は６月18日から開始した。最初に重機による表土除去を行い、これに並行して遺構検出、グリッド杭の敷設などの作業を行った。



第１図　遺跡概要図

グリッドは平面直角座標系第Ｘ系のＸ軸・Ｙ軸に沿った方向で設定した。グリッドの間隔は２m四方とした。グリッドの名称とした数字は、西から東へ大きくなる数字と南から北へ大きくなる数字を、それぞれ座標軸のＹ軸とＸ軸に沿わせた。その数字の組合せを、Ｘ軸とＹ軸の交点の第１象眼となる２m方眼のグリッド名とした。

調査区は、花川の護岸工事、水田による削平を受け部分的に撹乱されていたが、試掘調査の成果どおり、調査区南半を中心に良好な状態で遺存していた。特に遺跡の西に隣接する花川の旧流路（川跡ＳＧ１）からは多数の土器が出土した。調査で出土した遺物の多くはこの川跡からのものである。

その後、遺構検出、遺構精査、そして遺構断面図・遺構平面図の作成、遺構断面・遺構の完掘状況・遺物出土状況の写真撮影などの記録作業を進め、８月20日にラジコンヘリを用いた業務委託による空中写真撮影を行った。遺物の出土地点の記録については、遺構から出土したものは遺構とグリッドと層位により、遺構外から出土したものはグリッドと層位によった。

８月３日には発掘調査説明会を開催し、報道機関も含めおよそ70名の参加があった。

発掘調査は順調に進められたが、調査区内の盛土が予想以上に厚く盛土の除去に手間取ったこと、遺構面が古墳時代・平安時代の２面検出されたことで、当初予定した調査期間内では終了することが困難となったため、担当者間で協議の上、調査期間を８月24日まで延長した。

８月24日に調査を終了し、現場を引き渡した。その後、発掘調査報告書作成のため整理作業を開始した。

川跡ＳＧ１

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

山形元屋敷遺跡（１）の所在している山形市は、山形県の中央、山形盆地の南西部に位置する。東部は奥羽山脈が南北に連なり、その南半は蔵王火山帯に属する。これらの山地に源を発する馬見ヶ崎川・滑川・高瀬川・紅葉川などが北西流し、平地で扇状地を形成している。西部では上山市から流入する須川が、西部の山地から流下する小河川を併せ北流する。山形元屋敷遺跡の西隣を流れる花川もこれらの小河川の一つである。須川はその後白川・立谷川と合流し、最上川に注ぐ。また、須川には蔵王火山から強酸性の金山川・蔵王川・酢川などが流入するため、灌漑用水には不適とされ、市西部の農地も馬見ヶ崎川の用水堰から取水することが多かった。気候は内陸型気候で、年間平均最高気温と最低気温との差が約10度と大きく、年間降水量（降雪量も含めて）も1,000㎜程度である。

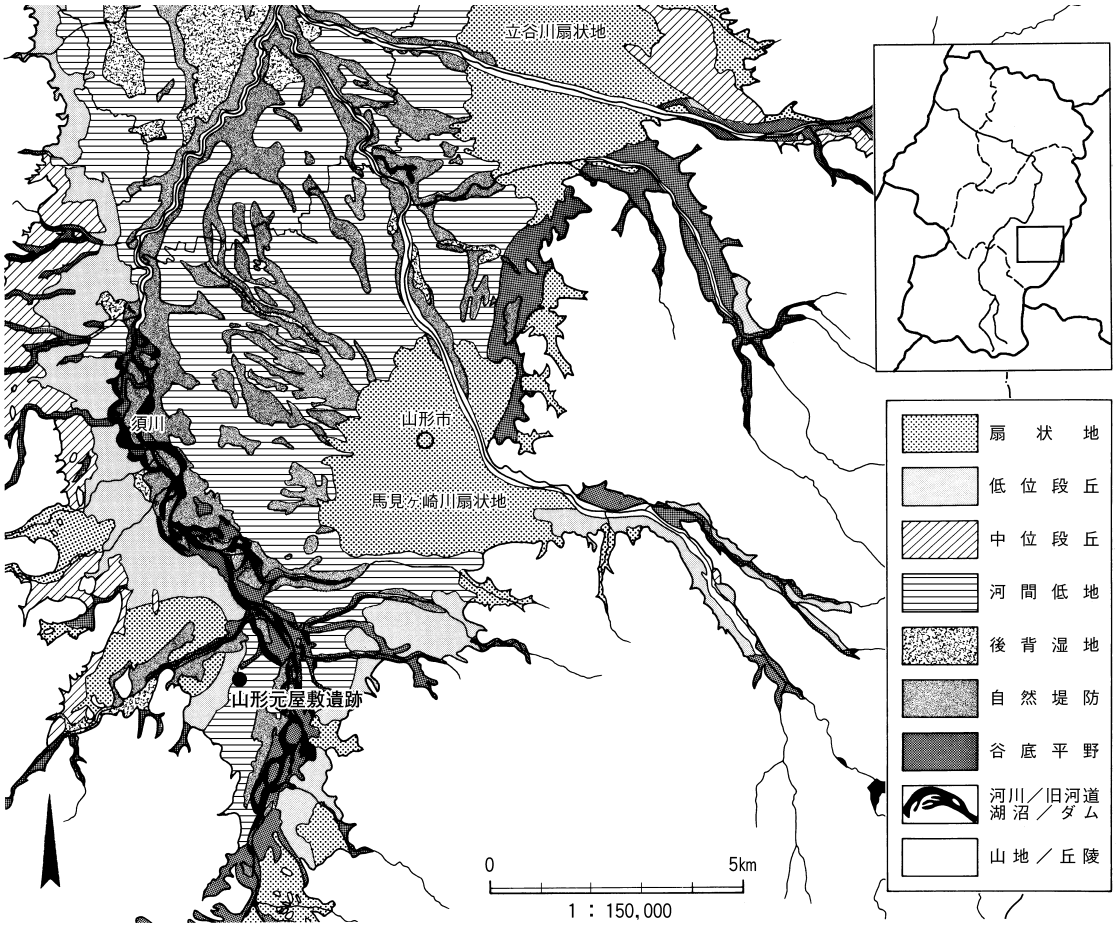
山形元屋敷遺跡は地形分類では河間低地に、地形区分では金井低地に位置する。西側には須川氾濫源が、東側にはその須川により沖積世に開析された山辺段丘が見られる。また、遺跡南側には蔵王火山泥流による久保手丘陵がある。これら須川左岸地域一帯は遺跡の密集地帯であり、遺跡の時代・種別もそれぞれの地形に応じて多様である。すなわち、山形元屋敷遺跡の所在する金井低地から東の山辺段丘、本沢川扇状地にかけては、古墳時代を中心として縄文時代から平安時代の集落遺跡が多く見られ、また同じく山辺段丘上で本遺跡の北西の菅沢、柏倉付近にも菅沢古墳群などの遺跡が知られている。他にも久保手丘陵にはオサヤズ窯跡（73）をはじめとした奈良時代から平安時代の窯跡群がある。一方須川右岸地帯は、左岸地帯に比べ遺跡の密度は明らかに低い。これは前述のとおり蔵王火山からの強酸性の河川が多く、灌漑には適さないこともその理由の一つと考えられる。

２　歴史的環境

周辺に見られる遺跡では、旧石器時代では久保手丘陵に八ヶ森遺跡（74）・二ツ石遺跡（76）の分布が確認されている。縄文時代ではやはり久保手丘陵に石原坂Ａ遺跡（80）など、そして山辺段丘上には特に多くの集落遺跡が確認されている。百々山遺跡（62）は縄文時代中期の遺跡で、大木７ｂ式の土器が出土している。二位田遺跡（34）からは縄文時代中期末の大木10式の土器が発掘調査で出土している（佐藤ほか1976）。

須川左岸は弥生時代の遺跡が多いことでも知られている。須川左岸には山形盆地の南西に位置する白鷹丘陵に源を発する本沢川など幾筋もの小河川が扇状地を形成している。山辺段丘でも須川氾濫源と本沢川扇状地に挟まれた一帯に沢田遺跡（42）・石田前Ｙ遺跡（49）・花川遺跡（53）など弥生時代後期の遺跡が多い。低地に囲まれた段丘上に位置しており、稲作が開始された頃の集落と水田の立地条件を反映しているものと考えられてい

※　遺跡名の後の括弧内の数字は「第３図　遺跡位置図」内の番号に対応する。



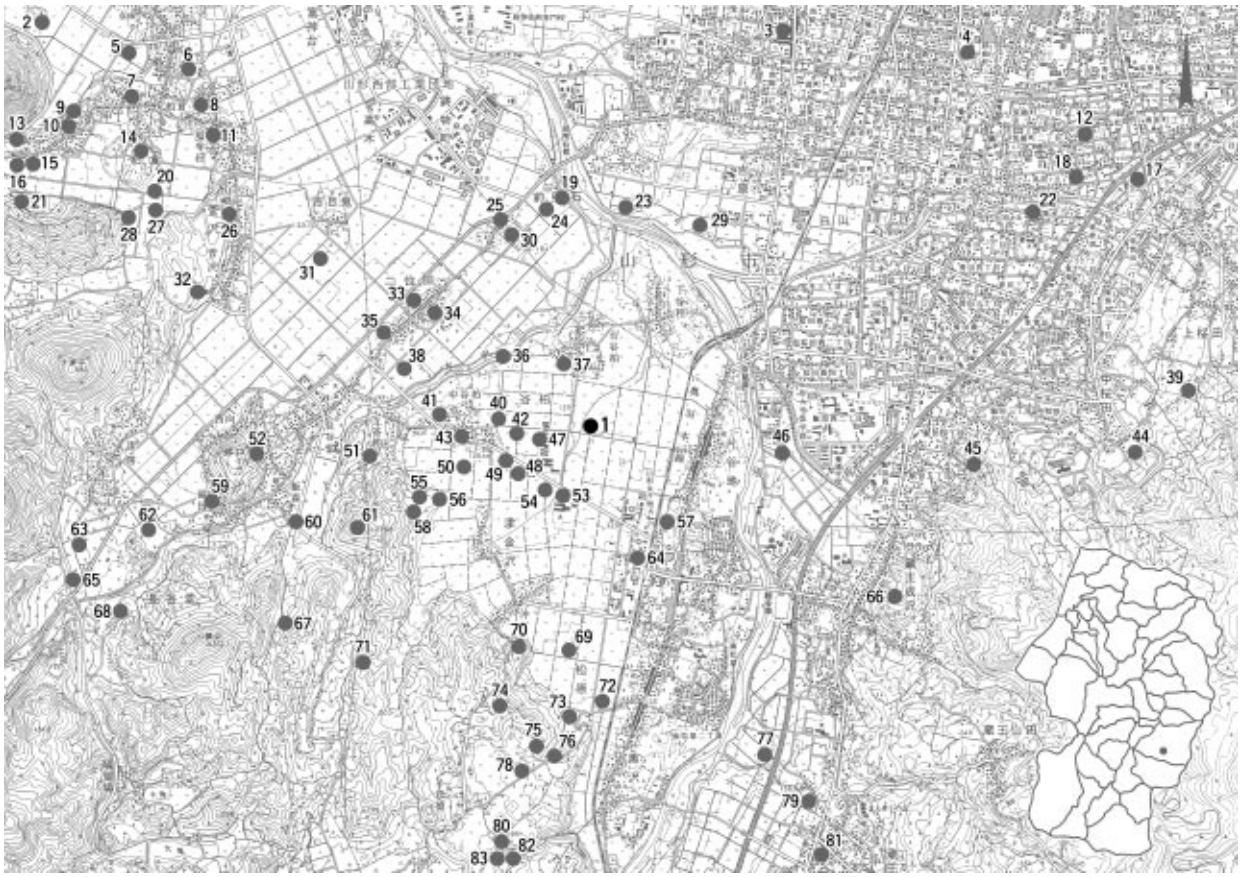
第２図　山形盆地南半の地形分類図

る（佐藤・加藤1982）。また二位田遺跡でも弥生時代後期の桜井式に併行する土器の出土が報告されている。

やがて時代が下り、それまでまばらに分布していた弥生時代の遺跡周辺に古墳時代の集落遺跡が急増し、さらにその分布範囲を広げていく。山形元屋敷遺跡で出土した古式土師器には、そのなかでも最も古い段階に位置づけられる土器群がある。

５世紀中頃に築造されたと考えられている菅沢２号墳（26）からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪・器財埴輪を中心とする豊富な形象埴輪が出土している。山形盆地内では、古墳は限られた地域にごく少数が築造されているだけだったが、菅沢２号墳が築造される頃から盆地内の各地にその分布を拡大し、数も大幅に増加していった。報告書（藤沢1991）では、その背景に畿内政権の介在を想定し、大きく拡大した古墳築造可能な階層を取り込む形で畿内王権を中心とする勢力が、地方経営を拡大していったとしている。また出土したこれら畿内の特徴を色濃く残した埴輪は、菅沢２号墳の被葬者が畿内を中心とする先進地域の勢力と結びついた結果、もたらされたものとしている。

奈良時代から平安時代の遺跡も、近年調査された石田遺跡（50）など数多く確認されている。倉庫跡と考えられる総柱の掘立柱建物・柵列・区画溝などが検出され、官衙的な性格を持ち、周辺地域のなかでも中心的な遺跡と考えられている（山口・吉田2000）。



本図は国土地理院発行の２万５千分の１地形図「山形南部」を複製・加筆し、２分の１に縮小したものである。

第３図　遺跡位置図（１：50,000）

番号	遺跡名	種別	時代
1	山形元屋敷	集落跡	古墳・奈良・平安
2	門伝日光山	散布地	縄文
3	南館	館	
4	山形西高敷地内	集落跡	縄文・弥生
5	大之越古墳	古墳	古墳
6	塩辛田	集落跡	奈良～平安・鎌倉
7	柏倉・八幡	散布地	縄文
8	宿	散布地	縄文
9	柏倉中丁	集落跡	縄文
10	柏倉館		
11	館	城館跡・散布地	縄文・室町
12	荒楯	館	
13	窪	祭祀跡	縄文
14	中林古墳群	古墳	古墳
15	十二目田Ｂ	集落跡	縄文
16	十二目田Ａ	散布地	縄文
17	永大ハウス裏	包含地	縄文
18	松見町	集落跡	縄文
19	鏡ヶ渕	集落跡	奈良・平安
20	坊屋敷	集落跡	縄文・古墳
21	三月田	集落跡	縄文
22	青田	集落跡	古墳～奈良
23	吉原館ノ内	城館跡	中世
24	落合	集落跡	古墳・奈良・平安
25	上り亀下り亀古墳	古墳	古墳
26	菅沢古墳群	古墳	古墳
27	金池	集落跡	縄文・平安
28	大清水	集落跡	縄文・平安
29	若宮館	館	
30	前明石古墳群	集落跡	平安
31	百目鬼	集落跡	平安
32	菅沢山本陣跡	城砦	
33	寺裏	集落跡	古墳～平安
34	二位田	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安
35	川落	集落跡	古墳
36	本沢川	集落跡	縄文
37	念力寺南	集落跡	縄文
38	萩原	集落跡	古墳～平安
39	木戸	遺物包蔵地	縄文
40	前田	集落跡	縄文
41	喜平田	集落跡	縄文
42	沢田	集落跡	弥生～平安
43	谷柏Ｊ	集落跡	縄文・平安
44	中桜田	集落跡	縄文
45	飯田館	楯	
46	泉出城	館	
47	谷柏	集落跡	古墳～平安
48	石田前	集落跡	古墳
49	石田前Ｙ	散布地	弥生
50	石田	包蔵地	奈良・平安
51	薬師様古墳	古墳	古墳
52	長谷堂城	館城	
53	花川	集落跡	弥生・古墳
54	毘沙門	集落跡	古墳
55	谷柏古墳群	古墳	古墳
56	高崎	集落跡	奈良
57	片谷地	集落跡	平安
58	谷柏館		
59	谷地前	集落跡	縄文
60	飯ノ森	散布地	縄文
61	古峯山	経塚	平安
62	百々山	集落跡	縄文・平安
63	漆坊	散布地	平安
64	横手区	集落跡	縄文・古墳～鎌倉・室町
65	筏山	集落跡	縄文・弥生
66	成沢城	城館跡	
67	風路野	散布地	縄文
68	風穴	洞穴	縄文～江戸
69	六壇	集落跡	鎌倉
70	天神山	山岳祭祀跡	古墳
71	能野堂	窯跡	平安
72	松原	包蔵地	平安
73	オサヤズ窯跡	包蔵地	縄文・奈良・平安
74	八ヶ森	散布地	旧石器
75	八ヶ森南	散布地	縄文
76	二ツ石	散布地	旧石器
77	戸苅田	集落跡	縄文
78	オミロク火葬墓群	墳墓	古代・中世
79	鳴沢川	集落跡	縄文
80	石原坂Ａ	散布地	縄文・平安
81	藤木	集落跡	縄文
82	長者屋敷	窯跡	平安
83	小松原窯跡	生産跡	平安

Ⅲ　遺跡の概観

１　基本層序

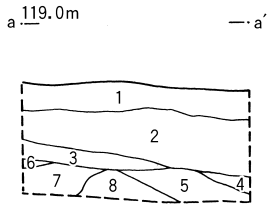
遺跡の現況は北半が水田で南半が畑地であった。そのため北半の水田部分は大きく削平されており、遺構・遺物とも少なかった。すぐ西隣を花川が北流しており、その護岸工事のため撹乱されている部分も多かった。表層地質図では砂・泥などの未固結堆積物地帯であることが示されている。沖積世において須川により開析された低地であることがその要因である。また、調査区内には花川の旧流路も検出されており、須川に注ぐ小河川である花川が幾度も流れを変え、洪水層や腐植質層・砂層・礫層を形成しながら間断なく流れ続けていた痕跡が明瞭となった。

基本層序は第３図に調査区東壁と南壁の断面図の中から一部を抜粋し柱状図として図示した。東壁ａ－ａ’の２・３層は水田の旧耕土であろう。以下の層はやはり、須川の開析低地であることを示すものである。南壁ｂ－ｂ’の２・３層は花川の護岸工事によるもので、以下の層は東壁ａ－ａ’と同様である。

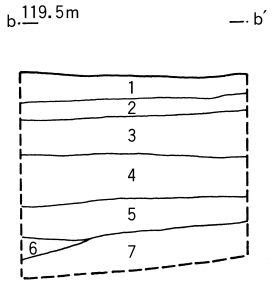
２　遺構と遺物の分布

遺構は少ないが竪穴住居・掘立柱建物・柵列・川跡・溝・土坑・ピットなどが調査区南半を中心に検出された。遺構の一部は耕作による削平だけでなく、花川の護岸工事などにより失われている。遺構の検出状況から、遺跡はさらに東へ広がることが明らかとなった。

遺物は主に竪穴住居、土坑、川跡から出土している。特に川跡からは遺物総数52箱のほとんどが出土している。出土している遺物は古墳時代初頭から中期の土師器、８世紀末から10世紀初頭の土師器・須恵器が主である。また掘立柱建物の柱穴からは良好な遺存状態の柱材も検出された。花川上流から流れ込んだと考えられるローリングを強く受けた縄文時代の遺物も数点出土している。



東壁　ａ－ａ’
1 耕土
2 10ＹＲ2/3　黒褐 シルト 旧耕土
3 10ＹＲ2/2　黒褐 シルト 旧耕土
4 10ＹＲ1.7/1 黒　粘質土 10ＹＲ4/1 粘質土を含む
5 5Y4/1　灰　砂質土
6 2.5Y4/1　黄灰 砂　礫を多く含む
7 7.5Y5/1　灰　砂　礫を少し含む
8 5Y4/1　灰　砂質土 礫を多く含む



南壁ｂ－ｂ’
1 耕土
2 10ＹＲ2/3 黒褐 シルト 10ＹＲ5/6 粘土を含む　盛土
3 10ＹＲ3/1 黒褐 シルト 10ＹＲ5/1 砂質土・10ＹＲ2/1 粘質土を含む 盛土
4 10ＹＲ2/1 黒　粘質土
5 10ＹＲ2/1 黒　粘質土 10ＹＲ4/1 粘質土を少し含む
6 10ＹＲ2/1 黒　粘質土 10ＹＲ3/1 砂質土を含む
7 10ＹＲ2/1 黒　粘質土 径約10㎝の礫を含む

第４図　基本層序柱状図（１：50）

Ⅳ　遺　構

１　竪穴住居

ＳＴ69（第10図）

遺構が密集している調査区南半、23‐28グリッド付近に位置する。南北長は7.25m、東側は調査区壁に接しており、調査区内では最大で3.25mまでを検出した。主軸方位はＮ２°Ｅ（北で東に２°振れる、以下このように略す）を測る。平面図は床面上での完掘状況を掲載した。

カマドは西壁中央部に設けられており、カマド内とみられる箇所には天井部が崩落したとみられる土層（ｂ－ｂ’の１・２層）が堆積している。またその中央部には土師器の甕がほぼ二個体分（第20図29、第24図75・76）出土しているが、カマドで使用された可能性のあるものと考えられる。

ｂ－ｂ’の３層はカマド使用時に堆積したものと考えられ、炭化物と焼土が含まれている。その中央部に礫が、下半部を埋設された状態で検出されており、土師器の甕29・75・76の直下であることも併せて考慮すれば、支脚として使用された可能性もある。カマドの袖部には両側ともに構築材として用いられたと考えられる土器が出土した。

柱穴はＳＰ94・92、他に床面上で検出したピットＳＰ81は深さが５㎝の浅い遺構であるが、土師器の杯87がほぼ完形で出土した。

住居の掘形は壁際が中央部より低く掘り込まれ、特にカマド部分については大きく掘り込まれている。

遺物は前述した土師器のほかには甕の破片が覆土中より少量出土している。

ＳＴ77（第12・13図）

23‐33グリッド付近に位置する。東壁部分は撹乱により遺存していない部分があるが、調査区内でほぼ全容が確認された。南北6.78m、東西は東壁が遺存しないため正確に計測することはできないが、７m前後と見られる。平面図は床面上での完掘状況である。

カマドは東壁の撹乱部分に設けられていた可能性は否定できないが、遺存していた住居内では検出されなかった。柱穴は４基、それぞれ四隅に柱穴ＳＰ93・91・88・87が床面上で検出された。

掘形は断面図に示したように壁際が中央より深く掘り込まれていることがａ－ａ’の断面図で確認できる。３層が竪穴住居の覆土、４層上面を床面として捉えた。４・６層を掘形としたが、その間に５層の溝ＳＤ109が入る。つまり、竪穴住居の掘形の下層に対して掘り込まれた溝ＳＤ109が、掘形の上層の土に覆われているのである。溝の埋土は粒の大きさの揃わない砂であり、人為的に埋められたと考えられる。平面図では住居の中央付近にＬ字形に配置されており、またその方向も住居の向きに揃っており溝ＳＤ109と竪穴住居ＳＴ77の密接な関連性を示す。住居を作るために地面を掘り込み、床面を構築するまで

の間に、意図的に砂を埋めるための溝を掘ったと解釈できる。生活を営んだ床面上ではなく、地下に砂を埋めた溝を構築することにどのような目的があったかは不明である。

遺物は少ないが、覆土中から小型土器138、壺甕類の底部81、柱穴ＳＰ88から同じく小型土器137が出土している。方位の振れはN23°Ｅである。

ＳＴ83（第11図）

21‐27グリッド付近に位置する。南北長は3.75m、西半部は削平されており検出されなかった。東半部においても床面は検出されず、わずかに掘形が残るのみである。掘形の壁際部分は一段低く掘り込まれており、伴う遺構はピットＳＰ84があるが、位置的にも柱穴とは考えられず、住居の掘形の一部とすべきであろう。掘形からは土師器の杯88が、ピットＳＰ84からは土師器の甕31が出土している。方位の振れはN12°Wである。

ＳＴ90（第11図）

22‐26グリッド付近に位置する。本来は竪穴住居であったと考えられるが、やはり削平を受けているため、掘形の底面付近が溝状に残るのみである。ＳＴ83と重複しているが、前後関係は不明である。また、本来の遺構の規模が遺存していればＳＴ69とも重複していたと考えられる。遺物は出土していない。

２　掘立柱建物

ＳＢ101（第14、15図）

20‐29グリッドから22‐33グリッドに位置する桁行４間、梁間２間の南北棟の掘立柱建物。南北8.3m、東西5.2m、柱間寸法はややばらつきがあるが、桁行は７尺、梁間は8.7尺前後である。柱穴にはすべて柱痕が確認され、ＳＰ30とＳＰ12を除いたすべての柱穴で柱材、あるいは礎板を検出した。ＳＰ13では礎板と柱材が併せて検出され、ＳＰ36では礎板のみ検出されている。柱穴の規模は大きいものでは１辺の長さが84㎝を測るものもある。柱材の径ではＳＰ14から検出された柱材215が25㎝を測り、最大のものである。建物の方位の振れはＮ７°４′42″Wである。

ＳＢ102（第12、13図）

23‐30グリッドから東壁にかけて検出された東西棟と考えられる建物で、桁行は２間以上、梁間３間である。ただし、北側柱列の西から３基目の柱穴は検出されなかった。東西3.4m以上、南北５m、柱間寸法はばらつきが大きいが、平均すると桁行、梁間ともそれぞれ5.5尺となる。柱痕はすべての柱穴で確認されたが、柱材の残るものはなかった。建物の方位の振れはＥ６°９′27″Ｓである。

ＳＢ103（第12、13図）

21‐31グリッドから23‐33グリッドに位置する桁行２間、梁間２間の南北棟の建物で、規模は南北4.5m、東西2.9mである。柱間寸法はやはりばらつきを持つが、平均すると桁行7.5尺、梁間５尺となる。柱穴の断面を確認したものについてはすべて柱痕を検出したが、柱材が遺存するものはなかった。柱穴の底面の高さは、各側柱列の中央に位置する柱

穴が他の２基より低くなる特徴を持つ。建物の方位の振れはＮ３°30′50″Ｅである。

３　柵　列

ＳＡ96（第14図）

21‐30グリッドから21‐33グリッドに位置する南北に４間、長さ6.25mの柵列である。柱穴の規模は小さく、長軸で16cmから35cm程である。柱間寸法は一定ではなく、平均で5.２尺となる。柵列の方位の振れはN13°51′31″Wである。

ＳＡ107（第14図）

21‐31グリッドから21‐32グリッドに位置する南北に２間、長さ３mの柵列である。ＳＰ56の掘形が他に比して深いが、断面図に見られる柱痕の底面の標高はＳＰ100の底面の標高とほぼ同じである。方位の振れはＮ６°25′８″Ｅである。

４　溝

ＳＤ61（第14図）

24‐33グリッド付近に位置する幅20cmの円形に巡る溝である。その直径は3.6mを測る。検出面からの深さは2.5cmから８cmと浅い。重複するＳＴ77の覆土上で検出されたのでＳＴ77よりは新しい。さらに重複するピットが４基検出されたが、南西隅のものは撹乱であり、南東隅のものも浅い。北西隅と北東隅のピットはＳＤ61の覆土を切っており、溝が廃絶された後に掘り込まれたものである。ゆえに、ＳＤ61と直接関連するものとは考えられない。遺物は出土しておらず、時期、性格ともに不明である。

５　土　坑

ＳＫ７（第16図）

22‐28グリッド付近に位置する、不定形の浅い土坑であるが、出土する遺物は他の遺構とは様相を異にし、底部切り離し技法がヘラ切り技法の須恵器の杯148・149など、比較的時期の古い遺物が一括で出土している。

６　川　跡

ＳＧ１（第７、８、９図）

調査区の西隣を北流する現行の花川の旧流路である。調査ではかつての花川から護岸工事の施された現在の花川に至るまでの流路の変遷が明らかとなった。調査の対象としたのは、その多くの流路の中でも遺物を含み古代以前に属するものとした。

調査区南西隅は削平を受け、ＳＧ１は検出できないが、17‐18グリッドから検出され始める。流路は大きく東に蛇行し、その後西へ流れを変え調査区西壁に接する。断面図ｃ－ｃ’・ｄ－ｄ’がここまでの箇所にあたる。出土する遺物から、古代までの遺物が出土する層を上層、古墳時代初頭から後半の遺物が出土する層を下層と分層する。上層はＳＧ１

の東端に沿うように検出されている。

調査区西壁20‐36グリッドからＳＧ１は再び調査区内で検出される。ただし、検出されるのは流路の右岸のみであり、左岸は調査区外に延びさらに西へ続くものと考えられるため、流路の幅は明らかでない。ここまで流路は西へ大きく蛇行しており、ＳＴ67・ＳＢ101を始めとする遺構群が流路の右岸に築かれている。これらの遺構群から北ではＳＧ１以外の遺構はほとんど検出されなくなり、調査区北半のほとんどがＳＧ１の中となる。

断面図ｅ－ｅ’では上層と下層の間に、洪水が起原と考えられる遺物を含まない砂層が検出された。下層の遺物はここまでは出土するが、21‐41グリッド以北では出土しないため、再び下層の遺物が出土し始める26‐46グリッドまで上層のみの調査とした。第４図調査区全体図にも古代の遺物を含む上層のみの完掘状況を図示している。

断面図ｆ－ｆ’の４層が上層で、６層が下層である。間の５層はやはり洪水による層で、荒砂と礫層が交互に堆積し、遺物を含まない。大きく６層を切り取っており、これにより多くの遺物が下流に流されたとみて良いだろう。

26‐46グリッド以北は削平を受けていることもあり、上層は検出されない。出土する遺物も古墳時代のものに限られる。断面図ｇ－ｇ’の１層・３層・９層は植物遺体を多く含んだ層であり、流れが淀んだ箇所であることを示している。

断面図ｈ－ｈ’では４層・５層を下層として認識した。層は薄く幅も狭く、遺物の量も少なくなるが、さらに北の断面図ｉ－ｉ’の２層・４層では再び遺物が多く出土する。しかし、これより北では断面図ｊ－ｊ’の３層で若干出土するのみで、遺物の出土はほぼ見られなくなり、これ以上ＳＧ１を掘り下げることはせず範囲を確認するにとどめた。第４図では点線でその範囲のみを示した。

調査区内ではＳＧ１が西へ蛇行したその内側のみに竪穴住居や掘立柱建物などの遺構が見られ、その一帯を除いてはほぼすべてがＳＧ１ということになる。古代までの遺物が出土する層を上層、古墳時代の遺物が出土する層を下層としたが、どちらもほぼ同じ流路を形成している。また、竪穴住居や掘立柱建物などの遺構群も古墳時代、古代と同じ箇所に重複して築かれている。これらの遺構の覆土には水成堆積による埋没があったことも確認できなかったし、河川によって破壊された形跡もない。断面図ｇ－ｇ’では流れが停滞し淀んでいることも確認された。

つまり、古墳時代から古代までのＳＧ１の流路は幾度かの洪水は見られるが、大きく流路を変えることもなく安定した流れを保ち、近隣の集落に利用されていたことが推察される。竪穴住居、掘立柱建物がＳＧ１の直前に築かれており、両者が重複しないこともその証左となるものと考えられる。

Ⅴ　遺　物

山形元屋敷遺跡の出土遺物には、須恵器・土師器・陶器などの土器、柱材・礎板・杭などの木製品、石製模造品・凹石などがある。また、土師器のなかには、ロクロで成形された、いわゆる「赤焼土器」と呼ばれるものも含まれる。これらの出土遺物のうちもっとも数の多いものは土師器であり、なかでも古墳時代のものと考えられる土師器が多量に出土している。

１　土　器

ⅰ　古墳時代の須恵器

須恵器は１～３の３点があり、すべて川跡ＳＧ１からの出土である。１・２が瑳、３が壺口縁部と考えられる。１は口縁端部を欠くがほぼ完形で、下層から出土している。体部下半にはケズリ調整が施される。体部の孔は焼成前に外側から内側に向かってあけられている。５世紀中頃（ＴＫ216併行期）のものと考えられる。２は口縁部から頸部にかけての形状が１に類似するが、頸部に波状の櫛描文がみられる。１とほぼ同時期のものと考えられる。３は焼成・胎土が１・２に類似するが、詳細は不明である。

ⅱ　古墳時代の土師器

川跡ＳＧ１から、古墳時代の４世紀初頭から５世紀後半までの時期幅がみられる土師器が大量に出土した。しかし、全体の形状が分かるものが非常に少ない。そのため、これらの遺物の概要をつかむために、古墳時代の土師器について分類を行った。分類は器種をアルファベットの大文字、器形を数字、細部の特徴をアルファベットの小文字で表す。なお、分層的に捉握が行えなかったこともあり、編年には至らなかった。

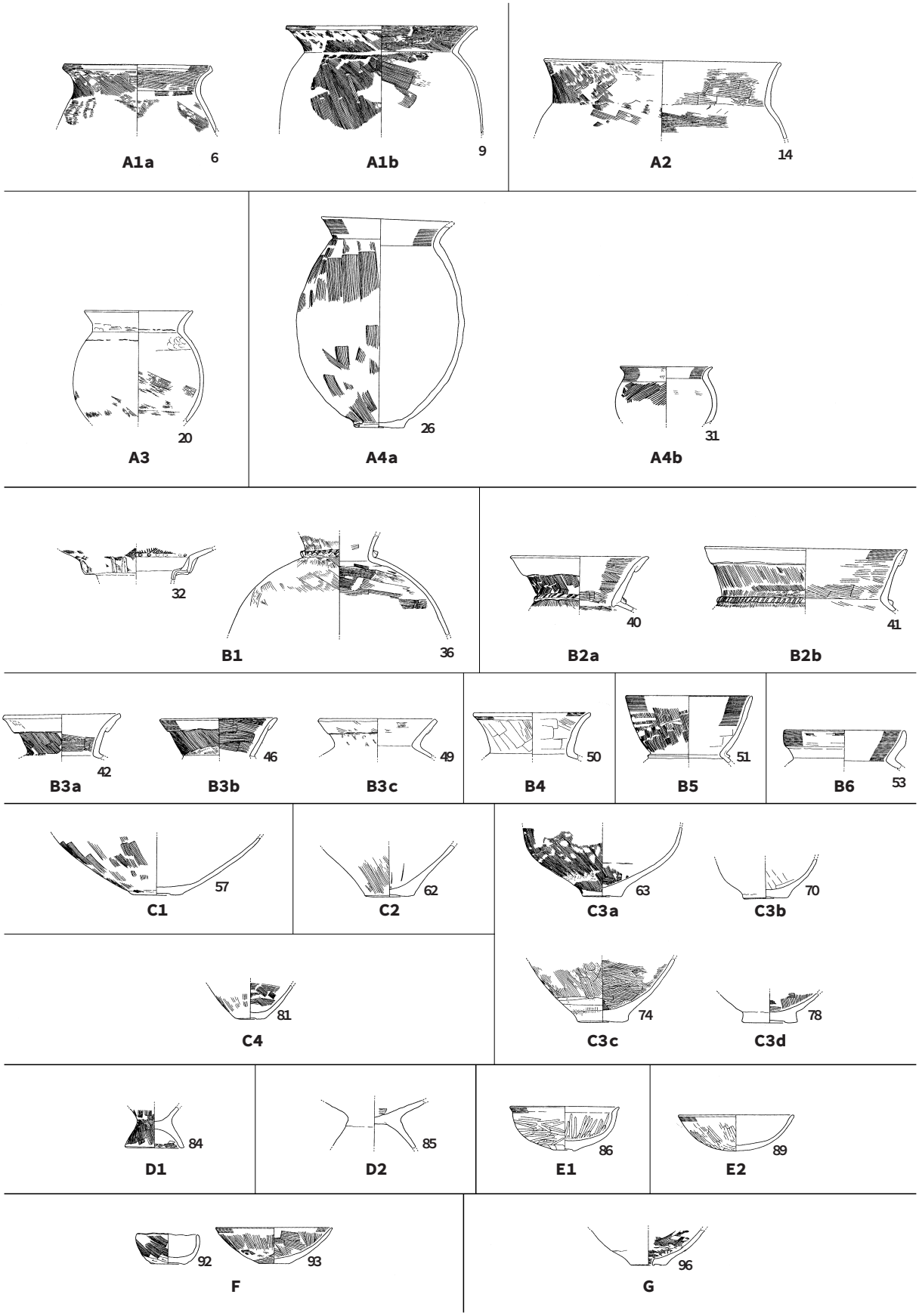
出土した古墳時代の土師器の器種は、Ａ甕・Ｂ壺・Ｃ甕壺類(底部)・Ｄ台付甕・Ｅ坏・Ｆ鉢・Ｇ甑・Ｈ高坏・Ｉ器台・Ｊ丸底壺・Ｋ小型土器・Ｌ手づくね土器などである。このうちＡ～Ｃに分類した甕壺類は最も出土数が多かったが、完形もしくは完形に近い形まで復元できたものが少なかったため、上半部と下半部に大きく分け、Ａ・Ｂは主に口縁部に着目して分類を行い、Ｃは底部形態から分類を行った。Ｃについては甕壺のいずれであるか判断が困難であったため甕壺類底部として扱い分類した。Ａ～Ｌのそれぞれの分類の詳細は、表１および第５・６図のとおりである。

Ａ甕

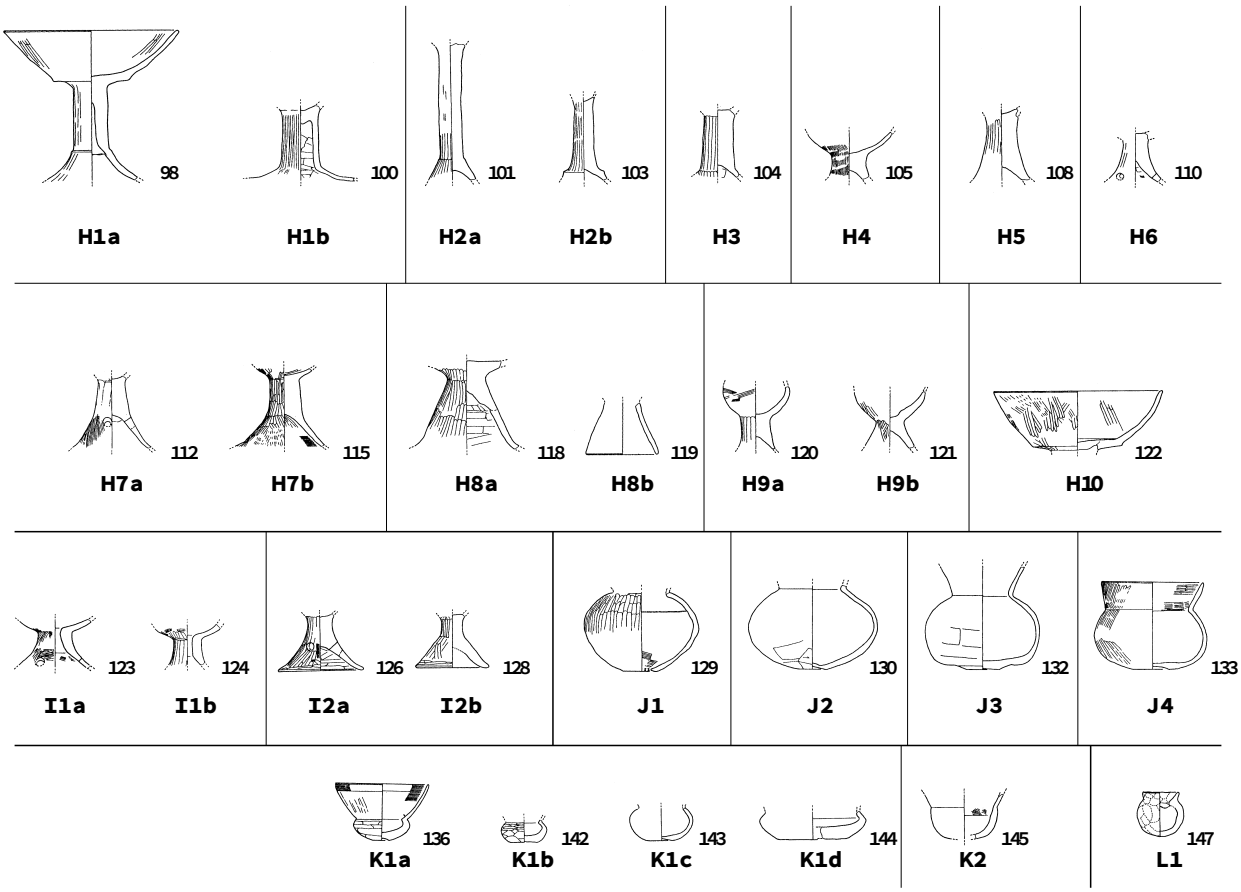
最も出土数の多い器種である。28点を図示した。口縁部の形態からＡ１～Ａ４に細分される。Ａ１については口縁端、Ａ４については体部の形状からそれぞれさらにａ・ｂに細分した。図示した遺物は４～６をＡ１ａ、７～９をＡ１ｂ、10～15をＡ２、16～21をＡ３、22～30をＡ４ａ、31をＡ４ｂに分類した。Ａ１・Ａ２に分類される甕は、ともに４世紀前

表１　土師器分類表

器種（部位）	分類		形　態
A　甕（口縁部）	1	a	薄手で、口縁端が内側に屈曲する。
		b	薄手で、口縁端を面取する。
	2		薄手で、口縁部が長く伸び、屈曲する
	3		厚手で、口縁部が「く」の字型に屈曲する。球胴形の体部を持つ。
	4	a	厚手で、口縁部が「く」の字型に屈曲する。長胴形の体部を持つ。
		b	厚手で、口縁部が「く」の字型に屈曲する。長胴形で、肩部の張る体部を持つ。
B　壺（口縁部）	1		有段口縁を持ち、頸部が直線的に伸びる。
	2	a	折返し口縁で折返し部が広く、頸部に突帯を持つ。
		b	折返し口縁で折返し部が広く、頸部に突帯を持つ。口径・頸部径が大きい。
	3	a	折返し口縁で、広く厚い折返し部を持つ。
		b	折返し口縁で、狭く厚い折返し部を持つ。
		c	折返し口縁で、広く薄い複合部を持つ。
	4		単純口縁で緩やかに外反し、長く伸びる。
	5		緩やかに内湾し、長く伸びる。頸部に突帯を持つ。
	6		内湾する短い口縁を持つ。
C　壺甕類（底部）	1		リング状に突出する底部をもち、胴部が張る。
	2		底部を平らに切り離す。
	3	a	突出する小型の底部を持ち、胴部が張る。
		b	突出する底部を持つ。ａに比べ立ち上がりが詰まる。
		c	突出する底部を持つ。卵形の胴部を持つ。
		d	高く突出する底部を持つ。
	4		小型で厚い台形の底部を持つ。
D　台付甕	1		小型で、ハケメ調整が施される。
	2		大型で、明確な調整が施されない。
E　坏	1		口唇部が外側に屈曲する。
	2		口唇部が直線的に立ち上がる。
F　鉢			大型のものと小型のものがある。１点ずつの出土である。
G　甑			破片のみの出土である。単孔を持つ底部、取手の付く体部、口縁部などの破片がある。
H　高坏	1	a	脚部中空で坏部と裾部の境界に段を持つ。
		b	脚部中空で坏部と裾部の境界に段を持たない。
	2	a	中実の長い脚部を持つ。裾部との境界の上に段を持つ。
		b	中実の長い脚部を持つ。裾部との境界の下に段を持つ。
	3		脚部中実部が短い。Ｈ２類に比べ径が大きい。
	4		脚部中実部が非常に短い。
	5		脚部中実部が下に向かって太くなる。
	6		脚部中実部が短く、裾部の内側えぐりが鋭い。裾部に３つの透かし孔が開く。
	7	a	脚部中実部が短く、裾部の内側えぐりが比較的緩やかである。裾部が大きく開く。透かし孔を持つ。
		b	脚部中実部が短く、裾部の内側えぐりが比較的緩やかである。裾部が大きく開く。透かし孔を持たない。
	8	a	大型で坏部直下から脚部が「ハ」の字型に開く。端部が外反する。
		b	比較的小型で坏部直下から脚部が「ハ」の字型に開く。端部が外反しない。
	9	a	小型で丸みの強い坏部を持つ。直線的な脚部中実部を持つ。
		b	小型で丸みの強い坏部を持つ。脚部中実部が非常に短い。
	10		坏部のみの出土である。形はＨ１に似るが、内面に稜を持つ。
I　器台	1	a	受部から脚部に至る孔を持つ。裾部に透かし孔を持つ。
		b	受部から脚部に至る孔を持つ。裾部に透かし孔を持たない。
	2	a	短い中実部を持つ。裾部は大きく広がり、端部が外反する。透かし孔を持つ。
		b	短い中実部を持つ。裾部は大きく広がり、端部が外反する。透かし孔を持たない。
J　丸底壺	1		体部の最大径が体部中央より上にある。くぼみ底を持つ。
	2		体部の最大径が体部中央にある。くぼみ底を持つ。
	3		他に比べて体部が深い。平底を持つ。
	4		他に比べて頸部の径が大きい。くぼみ底を持つ。
K　小型土器	1	a	壺型で、体部の最大径が体部中央より上にある。径の小さい底部を持つ。
		b	壺型で、体部の最大径が体部中央よりやや上にある。径の大きい底部を持つ。
		c	壺型で、体部の最大径がほぼ体部中央にある。径の小さいくぼみ底を持つ。
		d	壺型で、体部が浅く、大型で、最大径が体部中央より上にある。径の大きい底部を持つ。
	2		鉢形で深い体部を持つ。
L　手づくね土器			小型の壺型土器１点のみの出土である。


A1a
6
A1b
9
A2
14
A3
20
A4a
26
A4b
31
32
B1
36
B2a
40
B2b
41
B3a
42
B3b
46
B3c
49
B4
50
B5
51
B6
53
C1
57
C2
62
C3a
63
C3b
70
C4
81
C3c
74
C3d
78
D1
84
D2
85
E1
86
E2
89
92
93
F
96
G

第５図　土師器分類図（１）



第６図　土師器分類図（２）

半代のものと考えられ、薄手で堅い焼成が特徴的で、丁寧なハケメ調整が施される。Ａ３・Ａ４に分類される甕は、５世紀代のものと考えられるが、Ａ１・Ａ２に比べ厚手ではあるが脆く、体部の形態などからＡ３がＡ４よりも古いと考えられる。特徴的なものとしては、口縁端部が上方につまみ上げられた４～６がある。Ａ１ａに分類した４～６の口縁端部にみられるつまみ上げは、畿内にみられる庄内大和形甕の口縁部に類似しており、何らかの形で影響を受けていることも考えられる。

Ｂ壺

口縁部の形態、頸部の立ち上がりからＢ１～６に細分し、Ｂ２・Ｂ３についてはさらに細分した。時期については各分類の中で時期幅があると考えられるが、Ｂ６に分類した口縁部が内湾するものは、５世紀代にみられる形態である。Ｂ４・Ｂ５はそれぞれ１点のみの出土である。Ｂ５は丸底壺の口縁部と考えられ、頸部に突帯を持つ。図示したものは、32～56の25点である。32～38をＢ１、39・40をＢ２ａ、41をＢ２ｂ、42～45をＢ３ａ、46～48をＢ３ｂ、49をＢ３ｃ、50をＢ４、51をＢ５、52～56をＢ６に分類した。特徴的なものとしては、口縁部内側に櫛描きを持つ32・37がある。これらは東海系のいわゆるパレス壺の影響を受けていると考えられ、４世紀初頭の年代が考えられる。32はさらに口縁部外面に棒状浮文・円盤状浮文もみられる。36の頸部にみられる刻みの付いた突帯も、同様に

パレス壺の影響を受けている可能性がある。また、Ｂ類全体に見られる特徴としては、折返し口縁を持つものが多いことがあげられる。これらをＢ２・Ｂ３に分類した。Ｂ２に分類される一群は、ほぼ同じ時期のものと考えられる。Ｂ３は折返し部の形状からａ・ｂ・ｃに細分され、胎土・焼成などからも時期幅があると考えられる。

Ｃ甕壺類（底部）

底部については壺・甕の特定が困難であるため、Ｃ甕壺類（底部）として一括した。中央部が窪む平底の底部を持つものが多く見られる。底部形態からＣ１～４に分け、Ｃ３についてはそれぞれの特徴によってさらに細別した。Ｃ１・Ｃ３ａ・Ｃ３ｂは薄手で堅く焼成されており、調整も丁寧である。ともに４世紀代のものと考えられ、焼成・胎土が近いことから、Ａ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２に組み合う底部と推測できるが、完形で出土しているものがないため確定することができなかった。Ｃ１・Ｃ３ａよりも新しいＣ２・Ｃ３ｃ・Ｃ３ｄは５世紀代のものと判別できるが、体部の形状や調整などから、Ｃ２がより古いものと考えられる。Ｃ３ｃ・Ｃ３ｄはＡ３・Ａ４に焼成・胎土が非常に類似しており、組み合うものと考えられる。Ｃ４は甕類の底部と思われるが、点数が少なく、焼成・胎土等が類似する口縁部・体部なども出土していないため、詳細は不明である。57～81の25点を図示、57～59をＣ１、60～62をＣ２、63～68をＣ３ａ、69・70をＣ３ｂ、71～76をＣ３ｃ、77・78をＣ３ｄ、79～81をＣ４にそれぞれ分類した。

Ｄ台付甕

台付甕は、４世紀代に多くみられる器種であるが、いずれも台部のみの出土であり、詳細は不明である。出土した４点すべてを図示した。小型で丁寧なつくりのものをＤ１、大型粗製のものをＤ２とし、82～84をＤ１、85をＤ２に分類した。

Ｅ坏

坏は、底部の形態などにも差異があるが、ここでは、口唇部の形態に注目してＥ１・Ｅ２に細分した。86～91の６点を図示、86～88をＥ１、89・90をＥ２に分類した。91は底部のみのため、細分は行わなかった。底部は丸底のもの、くぼみ底のもの、窪んだ六角形のものがある。いずれも５世紀後半代のものと考えられる。

Ｆ鉢

92・93の２点を鉢とし、Ｆに分類した。92は小型で、体部には粗いハケメ調整を施し、底部近くはケズリで調整している。93は口縁部がわずかに残る。甕壺類の底部に類似するが、より丁寧なハケメ調整が施されている。

Ｇ甑

破片のみの出土であるため、細別は行わず大別のみにとどめた。94～97の４点を図示した。94は口縁部破片で、内外面がハケメ調整されている。95は取手の付く甑の体部と考えられるが、取手部分は抜け落ちている。外面で縦方向に、内面では横方向のハケメ調整が認められる。96・97は甑底部の破片である。単孔を持ち、内部をハケメで調整している。４点とも胎土・焼成などが異なり、時期差があると考えられる。

Ｈ高坏

主に脚部の形態に注目してＨ１～10に細分した。このうちＨ６・Ｈ７が最も古く、４世紀初頭のものと考えられる。以下、Ｈ４・Ｈ５が４世紀前半、Ｈ１ａ・Ｈ２ａ・Ｈ２ｂ・Ｈ３が４世紀末から５世紀初頭、Ｈ１ｂが５世紀前半、Ｈ９ａ・H10が５世紀中頃のものと考える。Ｈ１ａとＨ２ａ・Ｈ２ｂには時期的に大きな差はないが、Ｈ１ａが先行すると考えられる。Ｈ８ａ・Ｈ８ｂ・Ｈ９ｂについては類例に乏しく、年代は決定できなかった。あるいは器台の可能性もある。25点を図示した。98・99をＨ１ａ、100をＨ１ｂ、101・102をＨ２ａ、103をＨ２ｂ、104をＨ３、105・106をＨ４、107～109をＨ５、110をＨ６、111・112をＨ７ａ、113～115をＨ７ｂ、116をＨ７、117・118をＨ８ａ、119をＨ８ｂ、120をＨ９ａ、121をＨ９ｂ、122をH10に分類した。120・121は高坏としてＨ９に分類したが、器台の可能性もある。高坏は川跡ＳＧ１の岸に当たる20‐37グリッド付近から、まとめて廃棄されたと考えられる状態で出土している。ここから出土した高坏はＨ１・Ｈ７に分類されるもので、少なくとも二時期にわたって廃棄されたと考えられる。

Ｉ器台

受部から脚部にかけて貫通する穴の有無でＩ１・Ｉ２に分類し、透かし孔の有無でそれぞれａ・ｂに細分した。器台は、古い段階のものに大型で透かし孔が多く、調整の丁寧なものが多いとされる。出土したものはいずれも小型であり、透かし孔は３孔か無孔であることから、器台としては比較的新しく、４世紀後半のものと考えられる。また、Ｉ２のように受部から脚部に抜ける貫通孔が見られない器台も、４世紀後半には増える傾向にある。123～128の６点を図示した。123をＩ１ａ、124・125をＩ１ｂ、126をＩ２ａ、127・128をＩ２ｂに分類した。

Ｊ丸底壺

底部の形態と、体部の最大径の位置に注目してＪ１～４に細分した。時期については詳細は不明である。129～135の７点を図示し、129をＪ１、130・131をＪ２、132をＪ３、133をＪ４に分類した。134・135に関しては底部のみであるため、細別は行わず、大別にとどめた。時期には幅があるようである。133は赤彩されており、古い段階のものの可能性がある。

Ｋ小型土器

壺形と鉢形Ｋ１・２に分け、壺形については最大径の位置でさらに細別した。器台と組み合わせて使用されたと考えられるもので、４世紀代のものと考えられる。136～146の11点を図示した。136～141をＫ１ａ、142をＫ１ｂ、143をＫ１ｃ、144をＫ１ｄ、145・146をＫ２に分類した。140は赤彩されている。

Ｌ手づくね土器

147の１点のみの出土であるため、大別のみとした。体部には指頭痕がみられ、体部を指押しで丸く作り出した後、粘土を足して口縁部を作っている。

iii　平安時代の須恵器

平安時代のものと考えられる須恵器は、遺跡全体から出土している。これらは、坏・高台付坏・蓋・甕類・水瓶などの器種が認められた。

坏は148～164の16点を図示した。148・149はともに土坑ＳＫ７から出土している。ほぼ同形で底径が大きく、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。８世紀末～９世紀初頭のものと考えられる。底部が回転ヘラ切り技法で切り離されているものはこの２点のみである。150～164はいずれも形状が類似しており同時代のものと考えられる。底径が小さく、底部が回転糸切り技法で切り離されていることから、９世紀第３～第４四半期のものと考えられる。150・151にはヘラ書きが施されている。151は体部内側に文字と思われるヘラ書きが施され、「□人」と読めるが、□部分は読解できない。150は底部に「×」と推測されるヘラ書きがみられる。

高台付坏は165～167の３点を図示した。いずれも底部を回転糸切り技法で切り離しており、９世紀半ば以降のものと考えられる。

蓋は168～172の５点を図示した。168・169が比較的古く８世紀末、170～172は９世紀第３四半期のものと考えられる。

このほかの須恵器は177を除き、細片である。173～182の10点を図示した。173～179が甕、180・181が壺、182が水瓶と考えられる。甕には大型のものと小型のものが見られる。水瓶182は８世紀末～９世紀初頭のものと考えられる。出土したものは体部破片のみで、斜め上方に向かう穿孔が見られる。孔は焼成前に外側から内側に向かって開けられており、体部に穴を開けた後注ぎ口を貼り付けている。

iv　平安時代の土師器

甕・高台付坏・坏が出土した。土師器には非ロクロ成形のものと、ロクロを用い須恵器とほぼ同じ技法で成形された、いわゆる「赤焼土器」と呼ばれる一群がある。183～206の24点を図示した。183～193が非ロクロ成形の土師器で、194～206が「赤焼土器」の範疇で理解されるものである。

甕類はすべて非ロクロ成形の土師器である。183～193の11点を図示した。183のように小型で胴部の短いものと、190～192のように長胴のものがある。190～192は同じグリッドから出土しており、胎土・焼成がともに類似することから、同一個体とも考えられる。甕底部には網代痕をもつものが多く見られ、ほかに187のように木葉痕を持つものも見られた。また、183のように内面に黒色処理を施す甕もみられる。

高台付坏はすべて破片である。194～196の３点を図示した。194・195は内面に黒色処理が施されている。

坏は197～206の10点を図示した。底部の切り離しは、回転糸切り技法による。体部の形状などから10世紀初頭頃のものと考えられる。

ｖ　そのほかの遺物

縄文土器

207は大木８ａ式と考えられる縄文土器。口縁部の破片が１点のみ川跡ＳＧ１から出土している。強くローリングを受け、磨耗している。

陶器

208は肥前陶器の皿でＳＴ69に重複する落ち込み状の遺構であるＳＸ10からの出土である。残存部は底部のみで、内外面に灰釉が施されるが、外面下半は無釉である。畳付には糸切り痕が残る。目跡は確認できないが、胎土目段階（16世紀末から17世紀初頭）のものと考えられる（九州近世陶磁器学会2000）。

209は志野の菊皿で盛土からの出土である。内外面に長石釉が施されるが、底部は無釉である。見込に円垂ピンの痕跡が残る。17世紀前半のものと考えられる（瀬戸市史編纂委員会1998）。

210は肥前陶器の擂鉢、やはり盛土からの出土である。内面に９条１単位の卸目が施され、底部切り離し技法は回転糸切り技法による。底部の脇には指頭痕が見られ、内面には灰釉の釉滴が見られる。17世紀前半のものと考えられる（九州近世陶磁器学会2000）。

石製模造品

211は勾玉形の石製模造品で、石材は粘板岩、上部に裏面からの穿孔が施されている。また、背部に溝状の加工が施される。

凹石

214の凹石は表面に２ヶ所、裏面に３ヶ所の凹みがある。強くローリングを受けている。

礫

212は川跡ＳＧ１から出土した擦痕を持つ礫である。表裏面とも幅1.5から２㎝の擦痕が幾条も確認される。213は竪穴住居ＳＴ69に設けられたカマド内から出土した礫である。出土状況を観察すると、カマドを構築した際に同時に埋め込まれたものであり、強く被熱しているため、支脚としての機能を負っていたものと考えられる。

柱材・礎板

215は掘立柱建物ＳＢ101の柱穴ＳＰ14の柱材で、遺存していた柱材の中でも最も径が大きく25㎝を測る。幅1.5㎝から２㎝の工具による加工痕も認められる。

216は同じくＳＢ101の柱穴ＳＰ13から出土した柱材。218・219・220は同じ柱穴から出土した礎板で、216の下に敷かれている状態で出土した。217も同じくＳＢ101の柱穴ＳＰ52から出土した柱材。

杭

221と222は川跡ＳＧ１の古墳時代の遺物を包含する下層から出土した、杭と見られる木製品である。末端部が斜めに切断され、切断面には炭化した箇所が見られる。

Ⅵ　自然科学的分析

山形元屋敷遺跡から出土した木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

山形元屋敷本遺跡は、須川の支流である花川東岸（右岸）の沖積地に位置する。地形的には、本沢川が形成した扇状地の扇央部付近に立地する。本遺跡では、発掘調査により古墳時代および平安時代の遺構・遺物が検出されている。また、沖積地に位置するため、掘立柱建物跡の柱穴内には礎板や柱材が残存しているものも見られた。

本報告では、平安時代の掘立柱建物跡などの柱穴内から出土した柱材・礎板および古墳時代の河道から出土した木製品の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

１　試料

試料は、柱穴内から出土した柱材・礎板や河道から出土した木製品など23点である。

２　方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

３　結果（図版29・30）

樹種同定結果を表２に示す。木材は、針葉樹２種類（マツ属複維管束亜属・スギ）、広葉樹２種類（コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）　　マツ科

軸方向組織は仮道管を主とする。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状で、１分野に１個。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、１～15細胞高。

・スギ（Cryptomeria japonica（L. f. ）D. Don）　　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）ブナ科

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外小道管は漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は１～４列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

４　考察

掘立柱建物跡の柱穴内から出土した柱材と礎板は、１点がクリに同定された他は、全てコナラ節であり、柱と礎板で種類構成に差異は認められない。このことから、柱材や礎板には、コナラ節を主とした用材選択が行われていたことが推定される。

山形県内では、これまでにも奈良・平安時代の掘立柱建物跡の柱材の樹種同定が行われている（阿部1994、パリノ・サーヴェイ株式会社1996：未公表資料）。それらの結果を見ると、クリとコナラ節が利用されている点では、今回の結果と一致するが、クリの利用が圧倒的に多く、種類構成比では異なっている。材質的に見ると、コナラ節・クリ共に重硬で強度が高いが、耐朽性はクリ材の方が優れている。これまでの結果でクリが多い背景には、強度と共に耐朽性等の材質が考慮された結果と考えられる。これらの事例と比較すると、今回の結果は用材選択が異なっていた可能性がある。この背景には、建物の用途や機能、建築方法、周辺植生など様々な要因が考えられる。今後、隣接する地域で掘立柱建物が検出され、柱材などが出土した場合には樹種同定を行い、今回と同様の傾向が見られるのか確認したい。

一方、旧河川等から出土した木製品は、いずれも用途が不明である。複維管束亜属３点、スギ１点が認められた。いずれも針葉樹材が利用されており、加工が容易な木材を選択したことが推定される。山形県内では、同時期の木製品の樹種を明らかにした例が少ないため、現時点では製品と樹種との関係は不明な点が多い。今後、さらに多くの木製品について樹種同定を行い、用材選択の実態を明らかにしたい。

表２　樹種同定結果

遺構名	出土地点	挿図番号	登録番号	種類	樹種
掘立柱建物ＳＢ101	ＳＰ13	216	RW78	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		219	RW79	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		220	RW80	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		218	RW81	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	ＳＰ23		RW75	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	ＳＰ30		RW73	不明材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			RW74	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	ＳＰ33		RW70	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	ＳＰ34		RW76	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	ＳＰ35		RW82	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			RW83	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			RW84	礎板	クリ
		217	RW85	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	ＳＰ36		RW92	礎板	コナラ属コナラ亜属コナラ節
			RW87	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	ＳＰ37		RW88	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	ＳＰ42		RW89	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	ＳＰ14	215	RW77	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
柱穴ＳＰ52	ＳＰ52		RW86	柱材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
川跡ＳＧ１	下層 26-48G	222	RW162	不明材	マツ属複維管束亜属
	下層 26-48G	221	RW163	不明材	マツ属複維管束亜属
	下層 27-46G		RW164	不明材	マツ属複維管束亜属
	下層 28-51G		RW165	不明材	スギ

Ⅶ　調査のまとめ

山形元屋敷遺跡の調査の成果としては平安時代の掘立柱建物群の検出、古墳時代の集落の検出、花川の旧流路を検出したことなどが挙げられる。特に古墳時代の出土遺物に関しては土師器の壺32など県内でも他に類例を見ない遺物が出土した。この壺を含め、古墳時代初頭に位置付けられる土器群は、県内での出土例は稀少である。

１　古墳時代

竪穴住居ＳＴ69からは５世紀代と考えられる29・75・76などの甕・甕壺類（底部）がカマド内から出土している。また、床面上で検出されたピットＳＰ81からは土師器の坏87がほぼ完形で出土した。ゆえにＳＴ69の時期は５世紀後半と考えられる。また、ＳＴ83は堀形のみだが、同じく５世紀後半の坏88が出土しており、両者は同じ時期の住居として理解できる。住居の方位の振れはＳＴ69がＮ２°Ｅ、ＳＴ83がN12°Wであり大きな違いはない。ＳＴ90も掘形のみ検出された竪穴住居と考えられる遺構である。遺物は出土していないが、方位はＳＴ69・ＳＴ83と大差なく同じ時期の遺構と見て良いだろう。ただし、両者とは重複関係にあるため同時には存在しない。

ＳＴ77からは出土した遺物は少ないが、４世紀代のものと考えられる小型土器137・138が覆土と柱穴ＳＰ88から出土している。ほかには時期の判明する遺物はなく、住居の年代も４世紀としておく。住居は東壁付近が撹乱のため失われており確実ではないが、住居が４世紀代であれば、５世紀後半から各地に普及するとされるカマドもまだ存在していなかったと言える。方位の振れもN23°Eであり、ＳＴ69などの５世紀後半の住居群とは異なる。

ＳＴ77の北西に隣接する川跡ＳＧ１下層の20‐37グリッドとその周辺のグリッドからは４世紀代の遺物が多く出土している。また、高杯がまとまって出土しており、川にまつわる祭祀を行った可能性がある。このように住居と川は密接な関係を示している。

「Ⅴ　遺構」の段でも述べたが、ＳＴ77の掘形には他に見られない特徴がある。すなわち、床面を作るため掘形を埋め戻す途中の面に、溝を掘り砂を埋めるのである。暗渠排水のためとも推定されるが、排水する先はない。どのような性格と目的をもつものかは不明であり、今後の類例の増加を待って検討を要するものである。

出土した遺物から、本遺跡では４世紀初頭から集落が営まれ始めたことがわかる。ＳＴ77は４世紀のどの時期の住居か特定しえないが、調査区東側に広がる集落の本体では、より明確な４世紀初頭の集落が検出されるはずである。ＳＴ69などの５世紀後半の住居にも同じことが言える。川沿いの集落の末端部のみの調査であるため全容はつかめないが、川に捨てられた遺物の種類、量などからは、４世紀初頭から５世紀後半まで内容は均一ではないが、継続した集落が存在したことが明らかとなった。

本遺跡の周辺は沢田遺跡・石田前Ｙ遺跡・花川遺跡・二位田遺跡など弥生時代の遺跡が

多いことで知られているが、弥生時代から古墳時代への移行期の様相を示す遺跡は未だ確認されていない。川跡ＳＧ１出土の壺32・37は口縁部内側に櫛描文が施されており、東海系のいわゆるパレス壺の影響を受けていると考えられる。また、32の口縁部外面には棒状浮文・円盤状浮文、36の頸部には刻みが施された突帯が貼り付けられており、やはりパレス壺の影響が認められる。ほかにも甕４～６（Ａ１ａ類）の口縁部に見られるつまみ上げは、畿内の庄内大和形甕の口縁部に類似している。これらの土器は山形盆地南部の古墳時代開始期の状況を考える上で非常に重要な資料である。

２　平安時代

ＳＫ７およびＳＧ１上層から８世紀末から９世紀初頭の底部切り離しが回転ヘラ切り技法による坏などが出土しているが、ほかの遺物は９世紀半ば以降、10世紀初頭までのものである。

掘立柱建物はその主軸の方位から大きく二時期に分けられる。主軸が北で西に振れるＳＢ101およびＳＡ96と、主軸が北で東に振れるＳＢ102・ＳＢ103・ＳＡ107である。さらに、ＳＢ101とＳＡ96は重複しているので二つの時期に分かれる。同じく、ＳＢ102とＳＢ103は位置が近すぎるため同時に存在したとは考えられないため、これも二つの時期に分けられる。つまり、これら掘立柱建物と柵列は４時期の変遷が認められることになる。しかし、時期の判明する遺物が出土しているのはＳＢ101の柱穴ＳＰ35のみである。いわゆる「赤焼土器」とされるロクロ成形による土師器の坏205が出土しており、10世紀初頭のものと考えられる。ＳＢ101の上限として捉えられるが、ほかに時期の下る遺物は、土器などを廃棄したと見られる川跡ＳＧ１を含めて調査の中では出土しておらず、ＳＢ101の時期を10世紀初頭として考えて良いだろう。ＳＡ96はＳＢ101と主軸の振れが近く時期も近いと考えられるが、重複しているため同時には存在しない。また、切り合い関係が見られず、遺物も時期を判別できるものが出土していないため前後関係は不明である。

ではＳＢ102をはじめとした主軸が北で東に振れる遺構群であるが、これらからも良好な遺物の出土はない上に、明確に前後関係を示すような切り合い関係もなく時期は判然としない。ＳＧ１をはじめとした周辺の遺構からは遺物は８世紀末から９世紀初頭のもの、９世紀第３四半期から第４四半期、そして10世紀初頭のものが見られることからそのいずれかに該当するはずである。これら時期不明の遺構群なども調査区東側に続く遺跡本体部分の調査により判明できるだろう。今後の課題として残る。

次にこれら平安時代の遺構群の性格についてであるが、それを示すような遺物は出土しておらず、これも今後の課題として残さざるを得ない。唯一の文字資料であるヘラ書きを持つ須恵器の坏151も「□人」とまでしか判読できない。ただし、水瓶182のような仏具が出土しており興味深いが、小破片でありこれも遺跡の性格付けには至らない。遺構群の位置は非常に川に近く、川と何らかの関係を持つことも想定できる。

３　今後の課題

先にも今後の課題として挙げたものはあるが、最後にもう一度まとめる。川跡ＳＧ１から出土した古墳時代初頭の土器群についてである。これらの遺物がいったいどこからもたらされたものか、そして弥生時代から古墳時代へどのように移行して行くのかという問題である。周辺には弥生時代の遺跡が多い上に、本遺跡のように古墳時代初頭の遺跡もあり、この問題を研究する絶好のフィールドと言える。

引用文献

佐藤鎮雄ほか　1976　「二位田遺跡」『山形県文化財発掘調査報告書－昭和48・49年度山形県営農林事業関係遺跡－』（山形県埋蔵文化財報告書第６集）山形県教育委員会

佐藤禎宏・加藤稔　1982　「第３節　低湿地の開発」『山形県史　第一巻　原始・古代・中世編』山形県

藤沢敦　1991　「第５章　考察」『菅沢２号墳」山形市教育委員会　ｐ.170～ｐ.200

山口博之・吉田江美子　2000　『石田遺跡　第３次発掘調査説明資料』財団法人山形県埋蔵文化財センター

九州近世陶磁器学会　2000　『九州陶磁の編年　－九州近世陶磁学会10周年記念－』

瀬戸市史編纂委員会　1998　『瀬戸市史　陶磁史篇　六』

パリノ・サーヴェイ（株）　1996　「自然科学分析」『宮ノ下遺跡発掘調査報告書』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第32集）ｐ.69‐79　財団法人山形県埋蔵文化財センター

阿部明彦　1994　「木原遺跡第２次発掘調査報告書」（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第８集）ｐ.37　財団法人山形県埋蔵文化財センター

参考文献

阿部明彦・水戸弘美　1999　「山形県の古代土器編年」『第25回古代城衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会

須賀井新人ほか　1994　『今塚遺跡』（山形県埋蔵文化財センター調査報告書第７集）財団法人山形県埋蔵文化財センター

青木勘時　1992　「大和における庄内併行期の甕の諸相」『庄内式土器研究Ⅲ－庄内式併行期の土器生産とその移動－』庄内式土器研究会

赤塚次郎　1995　「壺を加飾する」『考古学フォーラム７』考古学フォーラム

浅井和宏　1987　「パレス・スタイル壺小考」『マージナル№７』愛知考古学談話会

辻　秀人　1994　「東北南部における古墳出現期の土器編年－その１会津盆地－」『東北学院大学論集　歴史学・地理学第26号』東北学院大学学術研究所

辻　秀人　1995　「東北南部における古墳出現期の土器編年－その２－」『東北学院大学論集　歴史学・地理学第27号』東北学院大学学術研究所

田嶋明人　1986　「考察－漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター

田辺昭三　1981　『須恵器大成』角川書店

坂野和信　1999　「東日本における古墳時代中期の土器（１）－土器の系譜と交流関係－」『東国土器研究５号』東国土器研究会

表３　土器観察表

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径	底径（㎜）	器高	残存状況	調整（外面）
1	須恵器	甕		ＳＧ1 20-21Ｇ 下層				口縁端部のみ欠損	ロクロ・ケズリ
2	須恵器	甕		ＳＧ1 22-38Ｇ	(90)			口縁部破片	ロクロ
3	須恵器	壺		ＳＧ1	(110)			口縁部破片	ロクロ
4	土師器	甕	A1ａ	ＳＧ1 20-37Ｇ 下層	(198)			口縁部	口縁端部ナデ　ハケメ・ナデ
5	土師器	甕	A1ａ	ＳＧ1 19-23Ｇ 下層	136			口縁部	口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ
6	土師器	甕	A1ａ	ＳＧ1 19-25Ｇ 下層	200			口縁部	ヨコナデ・ハケメ
7	土師器	甕	A1ｂ	ＳＧ1 18-25Ｇ 下層	(160)			口縁部破片	ハケメ・ナデ
8	土師器	甕	A1ｂ	ＳＧ1 16-27Ｇ 下層	(140)			口縁部破片	口縁端部ヨコナデ 口縁部・体部ハケメ・ナデ
9	土師器	甕	A1ｂ	ＳＧ1 20-37Ｇ	(264)			口縁部破片	ハケメ
10	土師器	甕	A2	ＳＧ1 22-37Ｇ 下層	(180)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ　体部ハケメ
11	土師器	甕	A2	ＳＧ1 19-24Ｇ 下層	(200)			口縁部破片	ハケメ・ナデ
12	土師器	甕	A2	ＳＧ1 19-26Ｇ 下層	(160)			口縁部破片	口縁端部ヨコナデ 口縁下部・体部ハケメ
13	土師器	甕	A2	17-27Ｇ	(194)			口縁部	口縁端部ヨコナデ　ハケメ
14	土師器	甕	A2	ＳＧ1 21-38Ｇ 下層	(328)			頸部破片	ヨコナデ・ハケメ
15	土師器	甕	A2	ＳＧ1 下層 18-20Ｇ	(192)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ
16	土師器	甕	A3	21-37Ｇ 遺物包含層	(210)			口縁部破片	口縁部ヨコナデ　体部ハケメ
17	土師器	甕	A3	22-37Ｇ 遺物包含層	(184)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ　体部ハケメ
18	土師器	甕	A3	ＳＴ69 23-29Ｇ	(188)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ
19	土師器	甕	A3	ＳＧ1 19-24Ｇ 下層	(140)			口縁部破片	ハケメ・ヨコナデ
20	土師器	甕	A3	ＳＧ1 18-20Ｇ 下層	(150)			口縁部から体部破片	ハケメ
21	土師器	甕	A3	ＳＧ1 17-27Ｇ 下層				体部破片	ハケメ
22	土師器	甕	A4ａ	ＳＸ64 30-52Ｇ	(190)			口縁部破片	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ・ナデ
23	土師器	甕	A4ａ	ＳＴ69 23-38Ｇ	(138)			口縁部から頸部	ケズリ・ミガキ
24	土師器	甕	A4ａ	ＳＧ1 18-24Ｇ 下層	(178)			底部のみ欠損	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ・ナデ
25	土師器	甕	A4ａ	ＳＧ1 16-26Ｇ 下層	(206)			口縁部破片	口縁部ヨコナデ　体部ハケメ
26	土師器	甕	A4ａ	試掘トレンチ№12 ＳＤ12		70		口縁端部のみ欠損	口縁部ヨコナデ　体部ハケメ
27	土師器	甕	A4ａ	ＳＧ1 下層	(178)			口縁部から体部破片	口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ハケメ
28	土師器	甕	A4ａ	試掘トレンチ№12 ＳＤ12	175			上半部	口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ハケメ
29	土師器	甕	A4ａ	ＳＴ69 23-28Ｇ	217			口縁部破片	口縁部ヨコナデ　体部ハケメ
30	土師器	甕	A4ａ	ＳＧ1 18-24Ｇ 下層	190			上半部	口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ハケメ
31	土師器	甕	A4ｂ	ＳＰ84 21-27Ｇ	(128)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ　体部ハケメ
32	土師器	壺	B1	ＳＧ1 19-23・19-25Ｇ 下層				口縁部破片	ハケメ
33	土師器	壺	B1	ＳＧ1 18-27Ｇ 下層	(140)			口縁部破片	ハケメ
34	土師器	壺	B1	ＳＰ68				頸部破片	ハケメ
35	土師器	壺	B1	ＳＧ1 22-38Ｇ 下層	(340)			口縁部破片	
36	土師器	壺	B1	ＳＧ1 21-37Ｇ 下層				頸部から体部破片	ハケメ
37	土師器	壺	B1	ＳＧ1 20-23Ｇ 上層				口縁部破片	ハケメ

調整(内面)	底部	胎土	焼成	色調	備考
	丸底	細砂混	硬	灰	
ロクロ		細砂混	硬	灰	
ロクロ		細砂混	硬	灰	
ハケメ・ナデ		細砂混	良	にぶい褐	
口縁端部ヨコナデ　口縁部ハケメ		細砂混	良	褐色	
口縁端部ヨコナデ　ハケメ		細砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ・ナデ		細砂混	良	にぶい褐	
口縁部ハケメ・ナデ　体部ハケメ・ナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ		粗砂混	良	にぶい黄橙	
口縁部ヨコナデ　体部ハケメ		細砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ・ナデ		細砂混	良	にぶい黄褐	
口縁部ハケメ・ヨコナデ　体部ナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	
口縁端部ヨコナデ　ハケメ		細砂混	良	浅黄橙	
ハケメ		粗砂混	良	にぶい黄橙	
口縁部ヨコナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	
口縁部ヨコナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	
口縁部ヨコナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	
口縁部ヨコナデ		粗砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ		細砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ		細砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ		粗砂混	良	浅黄橙	
口縁部ヨコナデ　体部ナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	内外面摩滅・剥離
口縁部ミガキ　体部ナデ		緻密	不良	灰白	
口縁部ヨコナデ　体部ナデ		粗砂混	良	にぶい黄褐	
口縁部ヨコナデ		粗砂混	良	にぶい黄橙	
口縁部ヨコナデ	平底	粗砂混	良	にぶい黄褐	試掘調査資料
口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ヘラナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	
口縁部ハケメ・ヨコナデ 体部ナデ		粗砂混	良	にぶい黄橙	試掘調査資料
口縁端部ヨコナデ　口縁部ハケメ・ナデ 体部ナデ		粗砂混	良	にぶい黄橙	
口縁部ハケメ・ナデ　体部ナデ		粗砂混	良	にぶい褐	
口縁部ヨコナデ　体部ハケメ		細砂混	良	にぶい橙	
		細砂混	良	にぶい黄橙	口縁部装飾(棒状・円盤状浮文) 内面に櫛描文・竹管文
		緻密	良	橙	
ハケメ		細砂混	良	にぶい橙	頸部突帯
		細砂混	良	褐灰	口縁部装飾(棒状浮文)
ハケメ		粗砂混	良	にぶい黄橙	頸部突帯
		粗砂混	不良	にぶい黄橙	内面に櫛描文

遺物観察表

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径	底径(mm)	器高	残存状況	調整(外面)
38	土師器	壺	B1	SG1 20-22G 下層	170			口縁部から頸部	口縁部ヨコナデ　頸部ハケメ
39	土師器	壺	B2a	SG1 18-25G 下層	170			口縁部	口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ
40	土師器	壺	B2a	SG1 18-27G 下層	192			口縁部	口縁上部ヨコナデ 下部ハケメ
41	土師器	壺	B2b	SG1 21-38G 下層	(280)			口縁部破片	口縁部上部ナデ・下部ハケメ
42	土師器	壺	B3a	SG1 26-48G 下層	160			口縁部	口縁端部ハケメ・ナデ 口縁部ハケメ
43	土師器	壺	B3a	SG1 19-23G 下層	(166)			口縁部破片	ハケメ
44	土師器	壺	B3a	SG1 22-37G 下層	(170)			口縁部破片	ヨコナデ
45	土師器	壺	B3a	SG1 17-27G 下層	(164)			口縁部破片	ハケメ
46	土師器	壺	B3b	SG1 20-22G 下層	164			口縁部	口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ
47	土師器	壺	B3b	SG1 19-25G 下層	(150)			口縁部破片	口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ
48	土師器	壺	B3b	SG1 19-24G 下層	(170)			口縁部破片	口縁端部ヨコナデ 口縁部ハケメ
49	土師器	壺	B3c	SG1 18-25G 下層	(164)			口縁部破片	ハケメ
50	土師器	壺	B4	SG1 20-38G 下層	(160)			口縁部	口唇部ヨコナデ ハケメ・ヘラナデ
51	土師器	壺	B5	SG1 22-38G 下層	(174)			口縁部	上部ヨコナデ　下部ハケメ
52	土師器	壺	B6	SX64 30-54G	(170)			口縁部破片	ヨコナデ
53	土師器	壺	B6	22-37G 遺物包含層	(170)			口縁部破片	ハケメ・ヨコナデ
54	土師器	壺	B6	不明	(140)			口縁部破片	口縁端部ヨコナデ 口縁部ナデ・ミガキ
55	土師器	壺	B6	SG1 22-38G 下層	(140)			口縁部破片	口縁端部ヨコナデ　ハケメ
56	土師器	壺	B6	SX64 30-52G	(154)			頸部破片	
57	土師器	甕壺類	C1	SG1 18-20G 下層		74		底部から体部破片	ハケメ
58	土師器	甕壺類	C1	SG1 19-20G 下層		65		底部から体部破片	ナデ
59	土師器	甕壺類	C1	SG1 19-20G 下層		(70)		下半部	ハケメ
60	土師器	甕壺類	C2	SG1 18-26G 下層		62		底部	体部ヘラナデ　底部ナデ
61	土師器	甕壺類	C2	SG1 19-26G 下層		58		底部	ハケメ・ナデ　底部ハケメ
62	土師器	甕壺類	C2	SG1 20-23G 下層		70		底部	ハケメ
63	土師器	甕壺類	C3a	SG1 20-22G 下層		54		底部から体部	ハケメ
64	土師器	甕壺類	C3a	SG1 20-23G 下層		58		下半部	ハケメ
65	土師器	甕壺類	C3a	SG1 20-23G 下層		64		下半部破片	ハケメ・ナデ
66	土師器	甕壺類	C3a	SG1 20-22G 下層		54		底部	ハケメ
67	土師器	甕壺類	C3a	SG1 21-38G 下層		64		底部から体部	ハケメ
68	土師器	甕壺類	C3a	SG1 20-37G 下層		62		底部から体部破片	体部ハケメ 底部ナデもしくは布痕
69	土師器	甕壺類	C3b	SG1 19-27G 下層		52		底部のみ	ナデ
70	土師器	甕壺類	C3b	ST69 23-28G		62		底部	ケズリ・ナデ
71	土師器	甕壺類	C3c	26-48G 遺物包含層		64			ハケメ
72	土師器	甕壺類	C3c	SG1 21-37G 下層		60		下半部	ヘラナデ
73	土師器	甕壺類	C3c	SG1 20-37G 下層		56		底部	ハケメ・ナデ
74	土師器	甕壺類	C3c	SG1 21-37G 下層		70		底部	ハケメ
75	土師器	甕壺類	C3c	ST69 23-28G		56		底部から体部	ハケメ・ミガキ

調整（内面）	底部	胎土	焼成	色調	備考
口縁部ヨコナデ　頸部ハケメ		細砂混	良	褐灰	
口縁端部ヨコナデ　口縁部ハケメ		細砂混	良	にぶい黄橙	頸部突帯
ハケメ		粗砂混	不良	にぶい黄橙	頸部突帯
口縁端部ヨコナデ　口縁部ハケメ・ナデ		粗砂混	不良	にぶい黄橙	頸部突帯　図上復元
上部ハケメ・ナデ　下部ハケメ		細砂混	良	浅黄橙	
ヨコナデ		細砂混	良	灰黄褐	
ヨコナデ		緻密	良	にぶい黄橙	
ハケメ		粗砂混	不良	浅黄橙	
ハケメ		細砂混	良	褐灰	
口縁端部ヨコナデ　口縁部ハケメ		細砂混	良	褐灰	
ハケメ		細砂混	良	褐灰	
ハケメ		粗砂混	不良	にぶい黄橙	
口唇部ヨコナデ　ハケメ・ヘラナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	
上部ヨコナデ　下部ナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	頸部突帯
ヨコナデ		粗砂混	良	浅黄橙	
ヨコナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	
口縁端部ヨコナデ　口縁部ミガキ		緻密	良	にぶい黄橙	
ハケメ		緻密	良	褐灰	
ミガキ		粗砂混	良	にぶい黄橙	外面赤彩
ナデ	中央の窪む平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ・ナデ	中央の窪む平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ・ヘラナデ	平底	粗砂混	良	にぶい黄褐	
ハケメ	平底	粗砂混	良	褐灰	
ナデ	平底	細砂混	良	浅黄橙	
ナデ	平底	細砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ	木葉痕 中央の窪む平底	細砂混	良	褐灰	
ハケメ	中央の窪む平底	細砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ・ヘラナデ	中央の窪む平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	輪積み痕
ハケメ	中央の窪む平底	細砂混	良	にぶい橙	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ナデ	平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ヘラナデ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ヘラナデ	平底	細砂混	良	浅黄橙	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	不良	にぶい黄橙	
ハケメ	平底	粗砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ミガキ	平底	緻密	良	にぶい黄橙	

遺物観察表

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径	底径(mm)	器高	残存状況	調整(外面)
76	土師器	甕壺類	C3c	ST69 23-28G		76		底部	
77	土師器	甕壺類	C3d	SG1 18-27G 下層		88		底部	ナデ
78	土師器	甕壺類	C3d	SG1 20-23G 下層		77		下半部破片	ナデ
79	土師器	甕壺類	C4	SG1 18-20G 下層		50		底部	ハケメ・ナデ
80	土師器	甕壺類	C4	SG1 19-20G 下層		31.5		底部	ハケメ・ミガキ
81	土師器	甕壺類	C4	ST77 24-30G		40		底部	ハケメ・ナデ
82	土師器	台付甕	D1	SG1 23-38G 下層		(120)		台部破片	ナデ
83	土師器	台付甕	D1	SG1 18-26G 下層		(104)		台部破片	ハケメ
84	土師器	台付甕	D1	SG1 18-26G 下層		82		台部	ハケメ
85	土師器	台付甕	D2	SG1 27-46G 下層				台部破片	摩滅のため不明
86	土師器	坏	E1	SG1 29-45G 下層	152	28	60	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ　体部ナデ ヘラナデ・ヘラミガキ
87	土師器	坏	E1	SP81	(158)		70	ほぼ完形	口縁部ヨコナデ・ミガキ 体部ミガキ　底部ケズリ
88	土師器	坏	E1	ST83 床面				全体の2/3	口縁部ヨコナデ　体部ミガキ 底部ケズリ
89	土師器	坏	E2	SG1 28-46G 下層	(160)		50	全体の2/3	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ・ミガキ
90	土師器	坏	E2	21-32 遺物包含層	(164)	46	67	全体の2/3	摩滅のため不明
91	土師器	坏	E	SG1 22-38G		38		底部	体部ヘラケズリ・ミガキ 底部ハケメ
92	土師器	鉢	F	SG1 18-26G 下層	84	46	42	ほぼ完形	上部2/3ハケメ 下部1/3ナデ
93	土師器	鉢	F	SG1 19-25G 下層	(162)	42	50	全体の2/3	口縁部ヨコナデ 体部・底部ハケメ
94	土師器	甑	G	21-38G 遺物包含層	(23)			口縁部破片	ハケメ
95	土師器	甑	G	SG1 22-28G				体部破片	ハケメ
96	土師器	甑	G	SG1 19-23G 下層		50		底部から体部	ケズリ・ナデ
97	土師器	甑	G	SX64 30-52G		47		底部	ハケメ・ナデ
98	土師器	高坏	H1a	SG1 20-36G 下層	182			裾部欠損	ミガキ
99	土師器	高坏	H1a	SG1 20-37G 下層	170			裾部欠損	ミガキ
100	土師器	高坏	H1b	SG1 17-27G 下層				脚部	ハケメ・ミガキ
101	土師器	高坏	H2a	SG1 21-22G 上層				脚部	ミガキ
102	土師器	高坏	H2a	SG1 26-47G 下層				脚部	ミガキ
103	土師器	高坏	H2b	SG1 18-26G 下層				脚部	ミガキ
104	土師器	高坏	H3	SG1 20-37G 下層				脚部	ミガキ
105	土師器	高坏	H4	SG1 18-26G 下層				坏部下半から脚部	ハケメ
106	土師器	高坏	H4	SG1 20-36G 下層				脚部	ハケメ
107	土師器	高坏	H5	SG1 20-37G 下層				脚部	ミガキ
108	土師器	高坏	H5	SG1 28-52G 下層				脚部	ミガキ
109	土師器	高坏	H5	SG1 19-24G 下層				脚部	ミガキ
110	土師器	高坏	H6	SG1 27-44G 下層				脚部	ミガキ
111	土師器	高坏	H7a	SG1 20-37G		(120)		脚部下半	ハケメ
112	土師器	高坏	H7a	SG1 20-37G 下層				脚部	ケズリ・ハケメ・ミガキ
113	土師器	高坏	H7b	SG1 20-37G 下層				脚部	ミガキ

調整(内面)	底部	胎土	焼成	色調	備考
ヘラナデ	平底	粗砂混	不良	にぶい黄橙	
粗いハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	不良	浅黄橙	
ハケメ	中央の窪む平底	粗砂混	良	灰黄褐	
ヘラナデ	中央の窪む平底	細砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ	平底	細砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ	中央の窪む平底	細砂混	良	灰白	
ハケメ・ナデ		粗砂混	良	浅黄橙	
ハケメ・ナデ		粗砂混	良	浅黄橙	
上部ナデ　下部上半ナデ・下半ハケメ		粗砂混	良	灰黄褐	
上部ハケメ・ナデ　下部ナデ		粗砂混	不良	にぶい黄橙	
ナデ・タテヘラミガキ	くぼみ底	緻密	良	にぶい黄橙	口縁部に輪積み痕残る
口縁部ヨコナデ・ミガキ　体部ミガキ	丸底	緻密	良	にぶい黄橙	
ハケメ・ミガキ	丸底	緻密	良	浅黄橙	
ミガキ	丸底	緻密	良	にぶい黄橙	
摩滅のため不明	くぼみ底	粗砂混	不良	にぶい黄橙	内外面摩滅
ヘラミガキ	くぼみ底	緻密	良	にぶい黄橙	
ナデ	平底	細砂混	良	浅黄橙	
口縁部ヨコナデ　体部ハケメ	平底	細砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ		緻密	不良	にぶい黄橙	内外面摩滅
ハケメ		細砂混	良	にぶい黄橙	取手部分剥落
ハケメ・ナデ	単孔	細砂混	良	にぶい黄橙	
ハケメ・ナデ	単孔	細砂混	良	浅黄橙	
坏部ミガキ　裾部ナデ		細砂混	良	橙	全体摩滅・剥落
坏部ミガキ		細砂混	良	橙	内外面摩滅・剥落
ヘラナデ		緻密	不良	にぶい黄橙	
		緻密	不良	橙	外面摩滅
		細砂混	良	暗灰黄	
		細砂混	良	赤褐	
ナデ		緻密	良	にぶい褐	
ナデ		粗砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ		粗砂混	良	にぶい黄橙	外面赤彩
		粗砂混	良	橙	
ナデ		粗砂混	良	浅黄橙	
ナデ		細砂混	良	にぶい褐	
ナデ		緻密	良	にぶい橙	内外面摩滅　3孔
ナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ		緻密	良	にぶい橙	
坏部ハケメ　脚部ナデ		細砂混	良	にぶい赤褐	赤彩

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径	底径(mm)	器高	残存状況	調整(外面)
114	土師器	高坏	H7b	SG1 20-37G 下層				脚部	タテ・ヨコミガキ
115	土師器	高坏	H7b	SG1 20-37G 下層				脚部	脚部ミガキ 裾部ハケメ・ミガキ
116	土師器	高坏	H7	SG1 17-27G 下層	(156)			坏部破片	ハケメ・ヘラミガキ
117	土師器	高坏	H8a	SG1		(132)		脚部	裾部タテヘラミガキ 裾端部ヨコヘラミガキ
118	土師器	高坏	H8a	SG1				脚部	タテヘラミガキ
119	土師器	高坏	H8b	SG1 20-23G 下層				裾部	ハケメ・ナデ
120	土師器	高坏	H9a	SG1 20-23G 下層				裾部欠損	坏部ハケメ　脚部ミガキ
121	土師器	高坏	H9b	SG1 23-42G				皿端部・裾部欠損	ミガキ
122	土師器	高坏	H10	SG1 16-27・17-27G 下層	178			坏部	ハケメ・ヘラミガキ
123	土師器	器台	I1a	SG1 17-27G 下層				皿端部・裾部欠損	ミガキ
124	土師器	器台	I1b	SG1 20-36G 下層				皿端部・裾部欠損	ハケメ・ヘラミガキ ヘラミガキ
125	土師器	器台	I1b	SG1 19-25G 下層				皿端部・裾部欠損	ミガキ
126	土師器	器台	I2a	SG1 27-47G 下層		(90)		全体の1/2	ヘラミガキ
127	土師器	器台	I2b	SG1 17-26G 下層		68		裾部	ハケメ
128	土師器	器台	I2b	SG1 27-46G 下層		(78)		全体の1/3	ヘラミガキ
129	土師器	丸底壺	J1	SG1 17-27G 下層		36		下半部	ヘラミガキ
130	土師器	丸底壺	J2	SG1 20-37G 下層		30		下半部	ヘラケズリ・ナデ
131	土師器	丸底壺	J2	SG1 18-27G 下層				上半部	ハケメ・ヘラミガキ
132	土師器	丸底壺	J3	SG1 19-26G 下層		36		下半部	ケズリ・ナデ 下部ケズリ・ナデ・ミガキ
133	土師器	丸底壺	J4	SG1 17-26G 下層	(107)	34	92	ほぼ完形	ヘラミガキ
134	土師器	丸底壺	J	17-24G 遺物包含層		30		底部	ハケメ・ミガキ
135	土師器	丸底壺	J	SG1 18-26G 下層		28		下半部	ハケメ・ナデ
136	土師器	小型土器	K1a	SG1 20-21G 下層	98	16	59	ほぼ完形	口縁端部ヨコナデ ケズリ・粗いミガキ
137	土師器	小型土器	K1a	SP88	99	26	57	全体の1/2	ハケメ・ミガキ
138	土師器	小型土器	K1a	ST77 23-30G		20		下半部	ミガキ
139	土師器	小型土器	K1a	SG1 19-25G 下層		22		下半部	摩滅のため不明
140	土師器	小型土器	K1a	SG1 18-20G 下層		(20)		下半部	ナデ・ヘラミガキ
141	土師器	小型土器	K1a	SG1 17-27G 下層		16		下半部	ナデ
142	土師器	小型土器	K1b	SG1 17-27G 下層		29		下半部	ケズリ・ミガキ
143	土師器	小型土器	K1c	SG1 17-27G 下層		26		底部から体部	摩滅のため不明
144	土師器	小型土器	K1d	SG1 16-25G 下層		(72)		下半部破片	
145	土師器	小型土器	K2	SG1 16-25G 下層				全体の1/2	
146	土師器	小型土器	K2	SP14				体部破片	
147	手づくね土器	壺	L	SG1 28-47G	(113)		46	口縁部	
148	須恵器	坏		SK7	148	77	44	口縁部	ロクロ
149	須恵器	坏		SK7	(146)	81	31	全体の1/2	ロクロ
150	須恵器	坏		SG1 22-38G		(60)		底部破片	ロクロ
151	須恵器	坏		SG1 18-24G 下層	(138)	(60)	46	破片	ロクロ

調整（内面）	底部	胎土	焼成	色調	備考
ナデ　裾端部ヨコナデ		緻密	良	にぶい橙	坏部と脚部の継ぎ目が剥離
坏部ミガキ　裾部ナデ　裾端部ヨコナデ		緻密	良	にぶい橙	
ヘラミガキ		緻密	良	にぶい黄橙	内面剥落
指押さえ　ハケメ・ナデ		細砂混	良	にぶい橙	
指押さえ　ナデ		細砂混	良	にぶい橙	
		細砂混	不良	橙	内外面摩滅・剥落
坏部ナデ　脚部ナデ		細砂混	不良	橙	内外面摩滅・剥落
		緻密	不良	橙	
ヘラミガキ		緻密	良	浅黄橙	
皿部ミガキ　脚部ナデ　裾部ハケメ		細砂混	良	浅黄	
摩滅・剥落のため不明		細砂混	良	橙	内面摩滅・剥落
摩滅のため不明		細砂混	不良	橙	内外面摩滅
ナデ		緻密	良	にぶい橙	
		粗砂混	良	にぶい黄橙	
ミガキ		緻密	良	にぶい黄橙	
ナデ　下部ハケメ	くぼみ底	細砂混	不良	明赤褐	外面剥落多　内面に輪積み痕
ナデ	くぼみ底	細砂混	良	橙	
ナデ		緻密	良	にぶい橙	
ナデ	平底	細砂混	堅	にぶい黄橙	
ヘラミガキ	くぼみ底	緻密	良	にぶい黄橙	口縁部内面・外面全体赤彩
ナデ	くぼみ底	細砂混	良	にぶい黄橙	
ナデ	くぼみ底	粗砂混	良	灰白	
口縁端部ヨコナデ　ミガキ	くぼみ底	細砂混	堅	にぶい黄橙	
ハケメ・ミガキ	くぼみ底	緻密	良	にぶい黄橙	
ナデ	平底	緻密	良	橙	
摩滅のため不明	くぼみ底	緻密	良	明赤褐	内外面摩滅
ナデ・ヘラミガキ	平底	緻密	良	にぶい黄橙	内外面摩滅　内外面赤彩
ナデ	くぼみ底	緻密	良	橙	
ナデ	平底	緻密	良	橙	
摩滅のため不明	くぼみ底	緻密	良	橙	内外面摩滅・剥落
	平底	緻密	良	にぶい黄橙	
ハケメ		細砂混	良	橙	
		細砂混	不良	橙	内外面摩滅
	丸底	緻密	不良	灰白	内外面摩滅・剥離
ロクロ	ヘラ切り	粗砂混	良	灰	
ロクロ	ヘラ切り	細砂混	硬	灰	海綿骨針　少
ロクロ	回転糸切り	緻密	硬	灰	底部にヘラ書き
ロクロ	回転糸切り	粗砂混	硬	灰	内面にヘラガキ

遺物観察表

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径	底径(mm)	器高	残存状況	調整(外面)
152	須恵器	坏		ＳＧ1 22-38Ｇ	(148)	(70)	44	破片	ロクロ
153	須恵器	坏		ＳＧ1 22-28Ｇ	(134)	58	45	全体の1/3	ロクロ
154	須恵器	坏		ＳＸ63 21-29Ｇ	(130)	76		全体の1/2	ロクロ
155	須恵器	坏		ＳＧ1 19-22Ｇ 上層	(136)			体部破片	ロクロ
156	須恵器	坏		不明	(118)			体部破片	ロクロ
157	須恵器	坏		ＳＧ1 27-43Ｇ	(140)			体部破片	ロクロ
158	須恵器	坏		ＳＸ4 21-28Ｇ	(140)	(58)	49	全体の1/3	ロクロ
159	須恵器	坏		ＳＧ1 19-22Ｇ 上層	(136)			体部破片	ロクロ
160	須恵器	坏		ＳＧ1 19-24Ｇ 上層	(140)			体部	ロクロ
161	須恵器	坏		ＳＧ1 19-24Ｇ 上層	(140)			体部破片	ロクロ
162	須恵器	坏		ＳＧ1 22-38Ｇ	(140)	60	48	底部から　体部	ロクロ
163	須恵器	坏		ＳＧ1 18-24Ｇ 上層	(138)			体部破片	ロクロ
164	須恵器	坏		18-26Ｇ 遺物包含層	(120)			体部破片	ロクロ
165	須恵器	高台付坏		ＳＧ1 20-20Ｇ 上層	(134)	(82)	70	全体の1/3	ロクロ
166	須恵器	高台付坏		不明		(68)		底部	ロクロ
167	須恵器	高台付坏		撹乱 19-32Ｇ		(90)		底部破片	
168	須恵器	蓋		表採	(160)			口縁部破片	ロクロ
169	須恵器	蓋		ＳＧ1 19-34Ｇ 上層				天井部破片	ロクロ
170	須恵器	蓋		22-33Ｇ 遺物包含層				天井部	ロクロ
171	須恵器	蓋		ＳＧ1 25-42Ｇ	(144)			口縁部破片	ロクロ
172	須恵器	蓋		ＳＸ4 21-29Ｇ	(160)			口縁部破片	ロクロ
173	須恵器	甕		ＳＧ1 21-34Ｇ	(180)			口縁部破片	ロクロ
174	須恵器	甕		ＳＧ1 20-21Ｇ 上層	(188)			口縁部破片	ロクロ
175	須恵器	甕		15-23Ｇ 遺物包含層				口縁部破片	ロクロ
176	須恵器	甕		ＳＰ23 22-31Ｇ				口縁部破片	ロクロ
177	須恵器	甕		ＳＸ4 21-29Ｇ	116	(76)	146	ほぼ完形	ロクロ・ケズリ
178	須恵器	甕		撹乱				体部破片	ロクロ
179	須恵器	甕		15-21Ｇ 遺物包含層		(170)		底部破片	ロクロ・ケズリ・タタキ
180	須恵器	壺		22-30Ｇ 遺物包含層	(116)			口縁部破片	ロクロ
181	須恵器	壺		ＳＧ1 22-38Ｇ	(100)			口縁部破片	ロクロ
182	須恵器	水瓶		ＳＧ1 16-25Ｇ 上層				体部破片	ロクロ
183	土師器	甕		21-34Ｇ 遺物包含層	204	86	156	全体の2/3	ケズリ・ヘラナデ
184	土師器	甕		ＳＫ7 22-27・22-28Ｇ	(119)			口縁部から体部破片	口縁部ヨコナデ 体部ハケメ
185	土師器	甕		ＳＧ1 22-38Ｇ		(70)		底部破片	ハケメ
186	土師器	甕		23-34Ｇ 遺物包含層		(70)		体部破片	摩滅のため不明
187	土師器	甕		ＳＧ1 20-22Ｇ		(70)		底部	ハケメ
188	土師器	甕		ＳＧ1 19-24Ｇ 上層		(90)		体部破片	ハケメ
189	土師器	甕		ＳＧ1 22-38Ｇ		(100)		体部破片	ハケメ

調整（内面）	底部	胎土	焼成	色調	備考
ロクロ	回転糸切り	細砂混	硬	青灰	海綿骨針　多
ロクロ	回転糸切り	粗砂混	硬	灰	海綿骨針　少
ロクロ	回転糸切り	粗砂混	良	灰	海綿骨針　少
ロクロ		粗砂混	良	灰白	
ロクロ		緻密	硬	灰	海綿骨針　少
ロクロ		粗砂混	良	灰	
ロクロ	回転糸切り	細砂混	良	灰	海綿骨針　少
ロクロ		粗砂混	良	灰	海綿骨針　多
ロクロ		粗砂混	不良	灰白	
ロクロ		細砂混	良	灰	海綿骨針　多
ロクロ	回転糸切り	粗砂混	良	灰	海綿骨針　少
ロクロ		粗砂混	不良	灰白	
ロクロ		緻密	硬	灰	
ロクロ	回転糸切り	粗砂混	硬	灰	海綿骨針　少
ロクロ	回転糸切り	細砂混	良	灰	
	回転糸切り	細砂混	硬	灰	海綿骨針　少
ロクロ		緻密	良	灰	
ロクロ		緻密	良	灰	
ロクロ		細砂混	硬	灰	海綿骨針　やや多
ロクロ		緻密	硬	灰	海綿骨針　少
ロクロ		粗砂混	硬	灰	海綿骨針　多
ロクロ		細砂混	良	灰	
ロクロ		細砂混	良	灰白	
ロクロ		粗砂混	良	灰	
ロクロ		細砂混	硬	灰	
ロクロ		粗砂混	硬	灰	海綿骨針　少
ロクロ		粗砂混	良	灰白	
ロクロ		粗砂混	良	灰	
ロクロ		細砂混	硬	灰	
ロクロ		細砂混	硬	灰	海綿骨針　少
ロクロ		緻密	良	灰白	
ミガキ	網代痕	粗砂混	良	浅黄橙	内面黒色処理
口縁部ヨコナデ		粗砂混	良	にぶい黄褐色	
	網代痕	細砂混	良	にぶい橙	内面に輪積み痕
ハケメ	網代痕	細砂混	良	にぶい橙	
	木葉痕	細砂混	良	褐	
	網代痕	細砂混	良	灰黄褐	
ハケメ	網代痕	粗砂混	良	にぶい黄橙	

番号	器種	器形	分類	出土地点	口径	底径(mm)	器高	残存状況	調整(外面)
190	土師器	甕		22-35G 遺物包含層				頸部破片	頸部ヨコナデ 体部ハケメ
191	土師器	甕		21-34G 遺物包含層				体部破片	ハケメ
192	土師器	甕		22-34G 遺物包含層		(60)		底部破片	ハケメ
193	土師器	甕		SK7 22-28G				口縁部破片	
194	土師器	高台付坏		SG1 19-24G 上層		(60)		底部破片	ロクロ
195	土師器	高台付坏		SG1 19-23G 上層		62		底部	ロクロ
196	土師器	高台付坏		22-34G 遺物包含層		(63)		底部	ロクロ
197	土師器	坏		SP20 25-34･26-34G	(140)	54	52	底部から体部破片	ロクロ
198	土師器	坏		SG1 19-23G 上層	124			上部破片	ロクロ
199	土師器	坏		SG1 19-23G 上層	132			上部破片	ロクロ
200	土師器	坏		SG1 19-23G 上層		50		底部から体部	ロクロ
201	土師器	坏		SG1 18-20G 上層		53		全体の1/3	ロクロ
202	土師器	坏		SG1 19-23G 上層		50		底部	ロクロ
203	土師器	坏		22-33G 遺物包含層		(80)		底部破片	ロクロ
204	土師器	坏		SG1 19-25G 上層		(56)		底部	ロクロ
205	土師器	坏		SP35 19-31G		(60)		底部破片	ロクロ
206	土師器	坏		SG1 19-20G 上層		(50)		底部破片	ロクロ
207	縄文土器	深鉢		21-38G 遺物包含層					
208	陶器(肥前)	皿		SX10 23-27G		(43)		底部破片	灰釉　下半部無釉
209	陶器(志野)	菊皿		盛土	(103)	(78)		全体の1/4	長石釉
210	陶器(肥前)	擂鉢		SG1		(84)		底部破片	ロクロ･ナデ

表4　石器・石製品・礫観察表

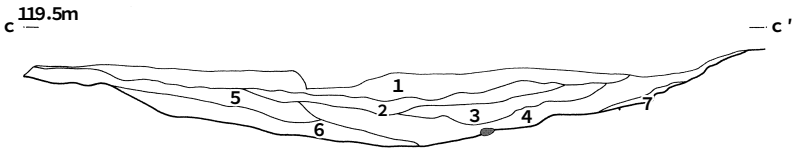
番号	種別	出土地点	長さ	幅(mm)	厚さ	石材	備考
211	勾玉形石製模造品	22-34G 遺物包含層	41.5	2.5	3.5	粘板岩	上部に穿孔、背部に溝
212	礫	SX64 31-54G	33.5	10.6	8.8		周囲に幅1.5～2cmの擦痕
213	礫	ST69 23-28G	15.0	9.5	8.9		カマド内で支脚として利用、強く被熱
214	凹石	SX64 31-54G	12.9	7.1	3.6	砂岩	表2ヶ所、裏3ヶ所の凹部

表5　木製品観察表

番号	種別	出土地点	長さ	幅(mm)	厚さ	樹種	備考
215	柱材	SP14	435	255	216	コナラ属コナラ亜属コナラ節	幅1.5～2cmの工具痕
216	柱材	SP13	131	174	166	コナラ属コナラ亜属コナラ節	218･219･220上に載る
217	柱材	SP52	121	102	64	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
218	礎板	SP13	310	112	65	コナラ属コナラ亜属コナラ節	廃材を分割したものを利用
219	礎板	SP13	328	123	68	コナラ属コナラ亜属コナラ節	廃材を分割したものを利用
220	礎板	SP13	273	80	29	コナラ属コナラ亜属コナラ節	廃材を分割したものを利用
221	杭	SG1 下層 26-48G	440	116	124	マツ属複維管束亜属	下端部が炭化
222	杭	SG1 下層 26-48G	509	110	109	マツ属複維管束亜属	下端部が炭化

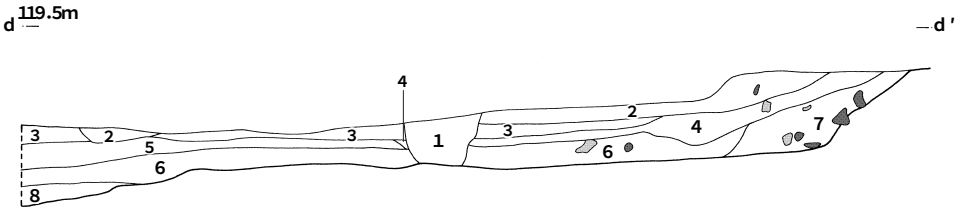
調整（内面）	底部	胎土	焼成	色調	備考
口縁部ハケメ　体部ヘラナデ		細砂混	良	にぶい黄橙	191・192と同一個体の可能性あり
ハケメ		細砂混	良	にぶい黄橙	190・192同一個体の可能性あり
ナデ	網代痕	細砂混	良	にぶい黄橙	190・191と同一個体の可能性あり
		細砂混	不良	にぶい橙	内面に輪積み痕
ロクロ		緻密	不良	にぶい橙	内面黒色処理　内外面摩滅 赤焼土器
ロクロ		緻密	不良	橙	内面黒色処理　内外面摩滅 赤焼土器
ロクロ		細砂混	不良	橙	内外面摩滅　赤焼土器
ロクロ	回転糸切り	細砂混	良	灰白	海綿骨針少　赤焼土器
ロクロ		細砂混	良	にぶい橙	赤焼土器
ロクロ		細砂混	良	にぶい橙	赤焼土器
ロクロ	回転糸切り	細砂混	良	にぶい橙	赤焼土器
ロクロ	回転糸切り	緻密	良	にぶい橙	赤焼土器
ロクロ	回転糸切り	細砂混	良	にぶい橙	赤焼土器
ロクロ		細砂混	良	にぶい赤褐	赤焼土器
ロクロ	回転糸切り	緻密	良	にぶい褐	赤焼土器
ロクロ	回転糸切り	緻密	良	浅黄橙	赤焼土器
ロクロ	回転糸切り	細砂混	良	橙	赤焼土器
					縄文土器
灰釉					畳付に糸切り痕が残る
長石釉	無釉				見込みに円垂ピン痕
9条1単位の卸目	回転糸切り				底部脇に指頭痕　内面に灰釉の釉滴

調査説明会



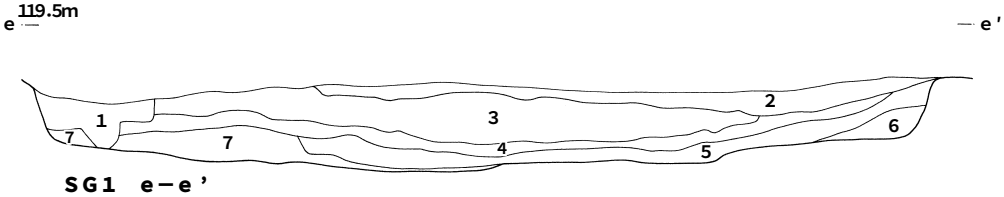
SG1　c－c'

1 10YR2/1　黒　シルト　上層1
2 10YR1.7/1 黒　シルト　上層2
3 10YR2/1　黒　粘質シルト 底部に炭化物を含む　下層
4 10YR2/1　黒　粘質土　下層
5 10YR2/1　黒　砂質土　この層まで遺物を含む 下層
6 10YR4/1　褐灰 粗砂
7 10YR3/2　黒褐 砂質シルト



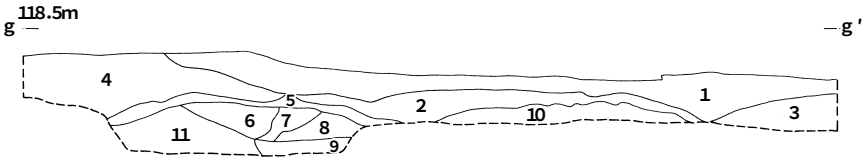
SG1　d－d'

1 土管暗渠埋設土
2 10YR2/1　黒　シルト　上層1
3 10YR1.7/1 黒　シルト　上層2
4 10YR2/1　黒　粘質シルト 底部に炭化物を含む　下層
5 10YR3/2　黒褐 砂質シルト　下層
6 10YR2/1　黒　粘質土　下層
7 10YR3/2　黒褐 砂質シルト この層まで遺物を含む 下層
8 2.5Y4/1　黄灰 砂質シルト



SG1　e－e'

1 撹乱
2 10YR1.7/1 黒　シルト 風化礫を含む　上層
3 砂層　遺物を含まない
4 10YR2/1 黒　粘土　下層
5 10YR5/2 灰黄褐 細砂
6 10YR6/2 灰黄褐 礫層　細砂を含む
7 10YR5/1 褐灰　砂層　礫を含む



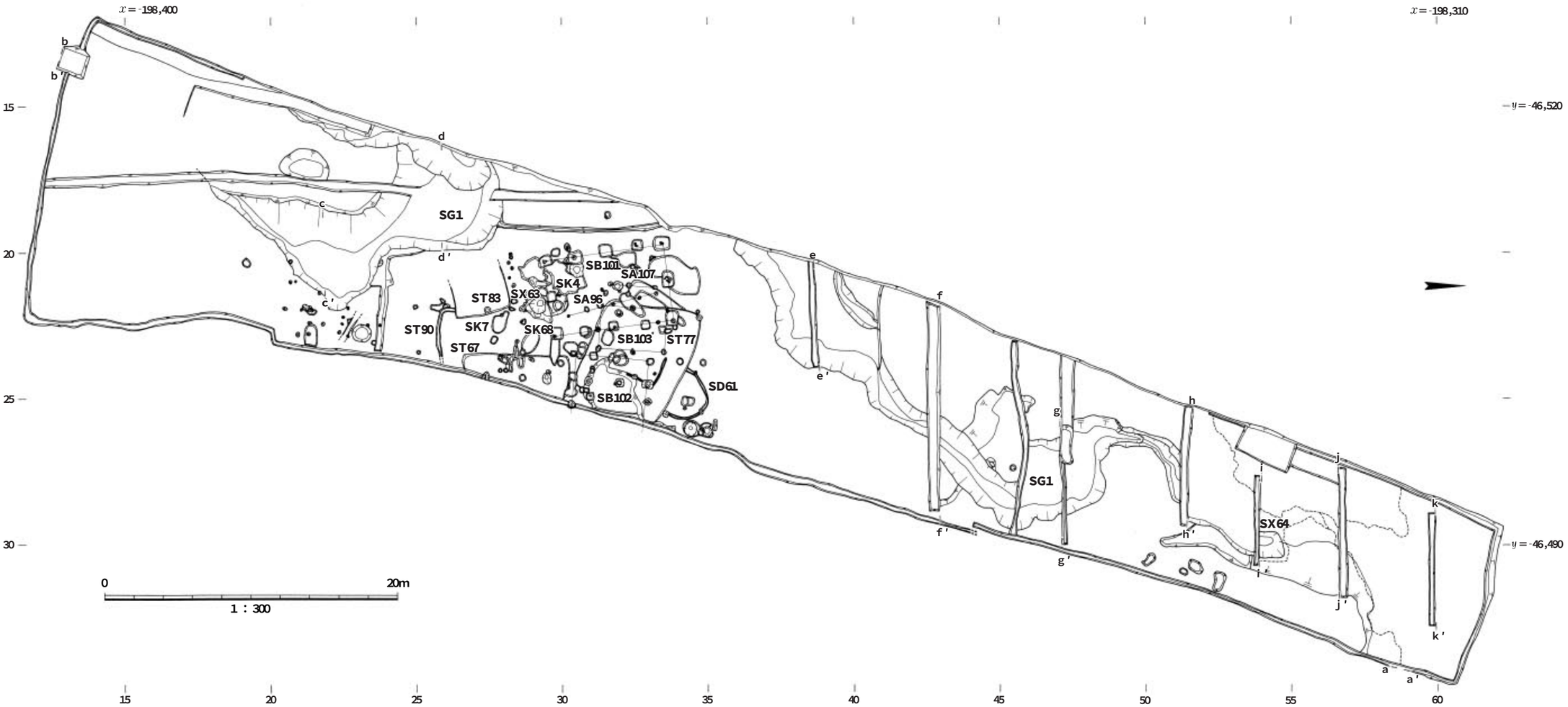
SG1　g－g'

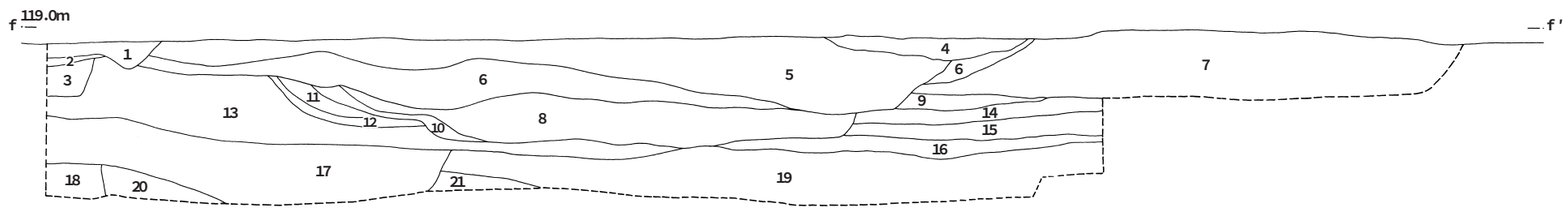
1 N/2　黒　腐葉土 植物遺体を多く含む　下層
2 10YR4/1　褐灰 シルト 荒砂を含む
3 10YR4/1　褐灰 粘土　腐葉土の層を交互に含む
4 荒砂と礫層が交互に堆積
5 10YR3/2　黒褐 粘土
6 荒砂と礫層が交互に堆積
7 10YR3/1　黒褐 粘質土 砂を多く含む
8 10YR2/1　黒　粘質土 砂を多く含む
9 10YR2/3　黒褐 粘土　植物遺体・砂を多く含む
10 荒砂層　礫を含む
11 荒砂と礫層が交互に堆積

土器
石

0　2m
1：60

第７図　川跡ＳＧ１土層断面図

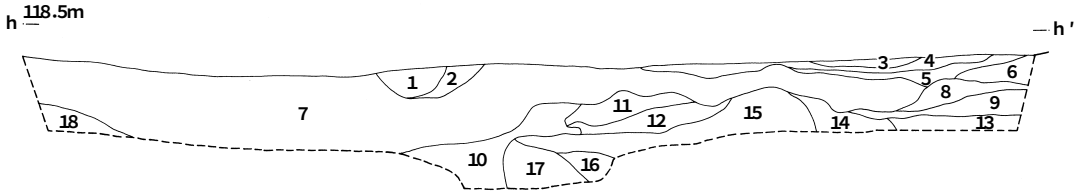




ＳＧ１　ｆ－ｆ'（1：60）

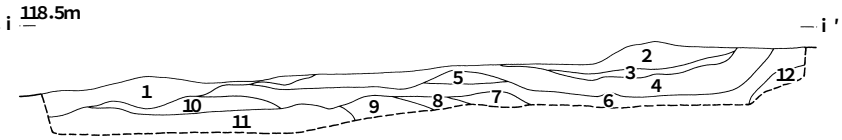
1 撹乱
2 撹乱
3 撹乱
4 10ＹＲ1.7/1 黒　シルト 上層
5 荒砂と礫層が交互に堆積
6 10ＹＲ2/2　黒褐 シルト 下層
7 径約10㎜～100㎜の礫層
8 荒砂と礫層が交互に堆積
9 10ＹＲ4/2 灰黄褐 粘質土
10 荒砂と小礫が交互に堆積
11 荒砂と礫層が交互に堆積
12 10ＹＲ5/2 灰黄褐 砂層　炭化物を少し含む
13 10ＹＲ3/1 黒褐　粘土　遺物を含む
14 10ＹＲ5/2 灰黄褐 粘土
15 2.5ＧＹ4/1 暗オリーブ灰 微砂
16 10ＹＲ3/1　黒褐　粘土
17 荒砂と礫層が交互に堆積
18 荒砂と礫層が交互に堆積
19 10ＹＲ2/3　黒褐　粘土 植物遺体を多く含む
20 10ＹＲ3/1　黒褐　粘土
21 5Y3/1　オリーブ黒　細砂

第８図　調査区全体図（１：300）、川跡ＳＧ１土層断面図（１：60）



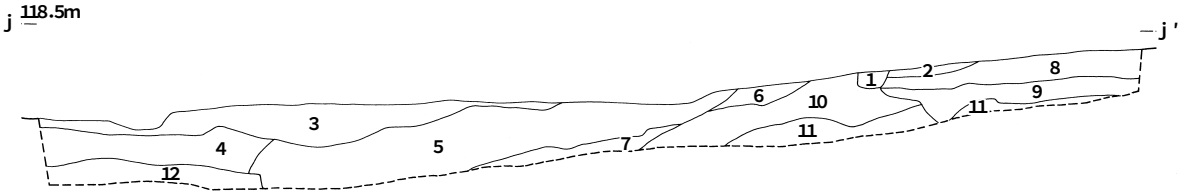
SG1　h－h'

1 礫層
2 10YR2/2 黒褐　砂質土
3 荒砂層
4 10YR2/2 黒褐　砂質土 下層
5 10YR3/1 黒褐　シルト 下層
6 10YR3/1 黒褐　粘質土 炭化物を少し含む
7 荒砂と礫層が交互に堆積
8 10YR5/2 灰黄褐 粘質土
9 10YR5/2 灰黄褐 砂質土
10 10YR4/1　褐灰　粘質土 砂を多く含む
11 10YR5/2　灰黄褐 粘土
12 10YR1.7/1 黒　粘質土
13 2.5Y4/1　黄灰　砂質土 10YR3/1粘質土を含む
14 砂層
15 荒砂と礫層が交互に堆積
16 荒砂と小礫層が交互に堆積
17 2.5Y4/1　黄灰　粘土
18 荒砂層　礫・10YR2/1粘土を少し含む



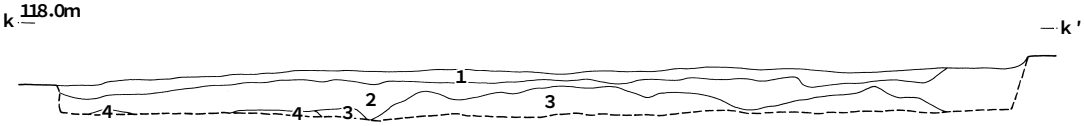
SG1　i－i'

1 10YR1.7/1 黒　砂質土
2 10YR3/1　黒褐 粘質土 遺物を多く含む
3 10YR4/1　褐灰 粘質土
4 10YR4/1　褐灰 砂質土 遺物を含む
5 荒砂と礫層が交互に堆積
6 10YR2/1　黒　粘土
7 荒砂と礫層が交互に堆積
8 10YR4/1 褐灰　砂質土
9 荒砂と礫層が交互に堆積
10 荒砂と礫層が交互に堆積
11 10YR3/1 黒褐　粘質土 砂を多く含む
12 10YR5/2 灰黄褐 砂質土



SG1　j－j'

1 撹乱
2 撹乱
3 10YR2/1　黒　砂質土 遺物を含む
4 10YR1.7/1 黒　粘土　砂を少し含む
5 10YR1.7/1 黒　粘土
6 10YR5/1　褐灰 砂質土
7 10YR3/1 黒褐　粘質土 砂を多く含む
8 10YR5/2 灰黄褐　砂質土
9 10YR4/2 灰黄褐　砂質土
10 荒砂と礫層が交互に堆積
11 荒砂層
12 5Y3/1　オリーブ黒 砂質土

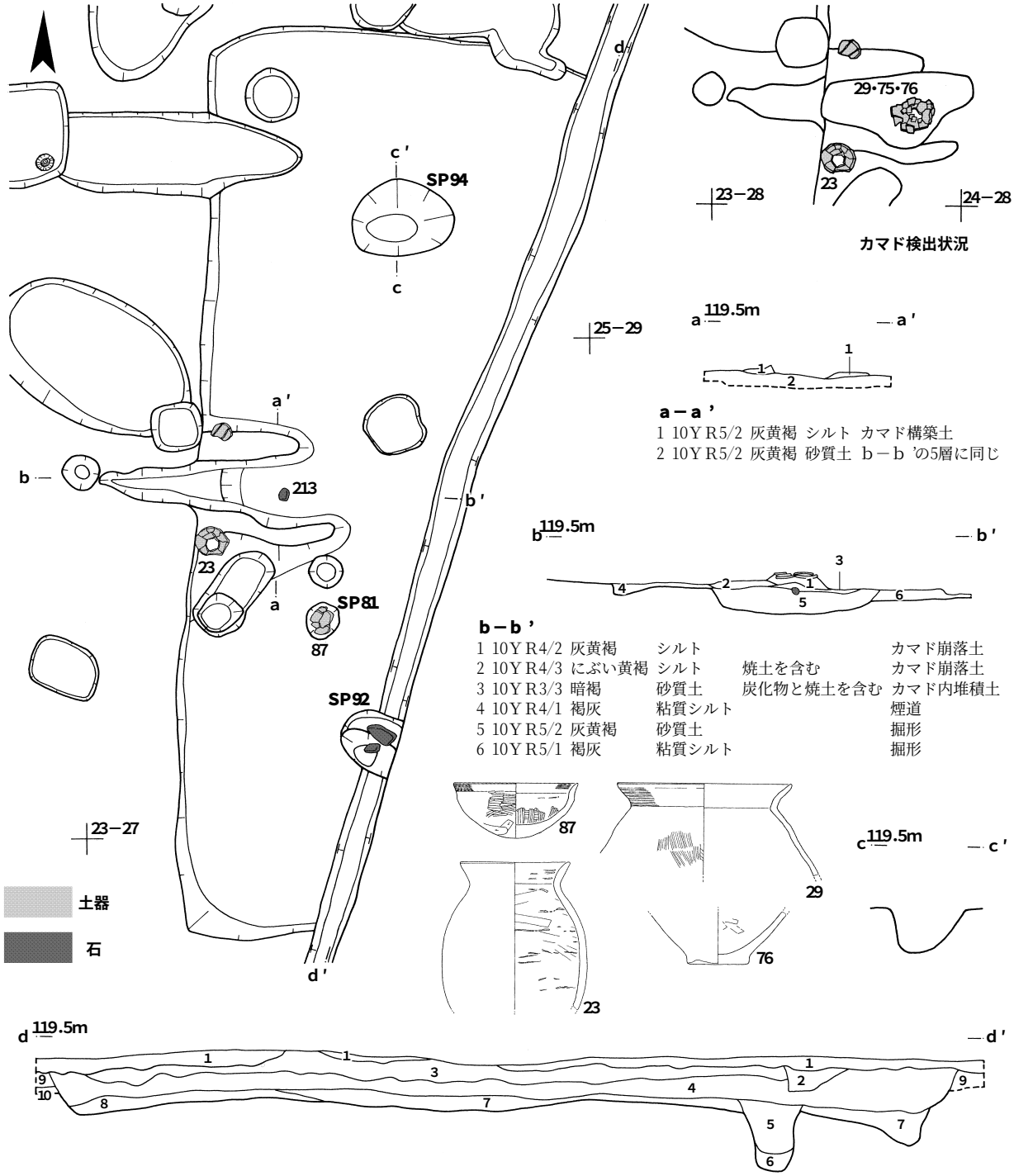


SG1　k－k'

1 10YR2/2　黒褐 シルト
2 10YR2/1　黒　粘質土
3 10YR3/1　黒褐 粘質土
4 2.5YR2/1 赤黒 砂層

0　2m
1：60

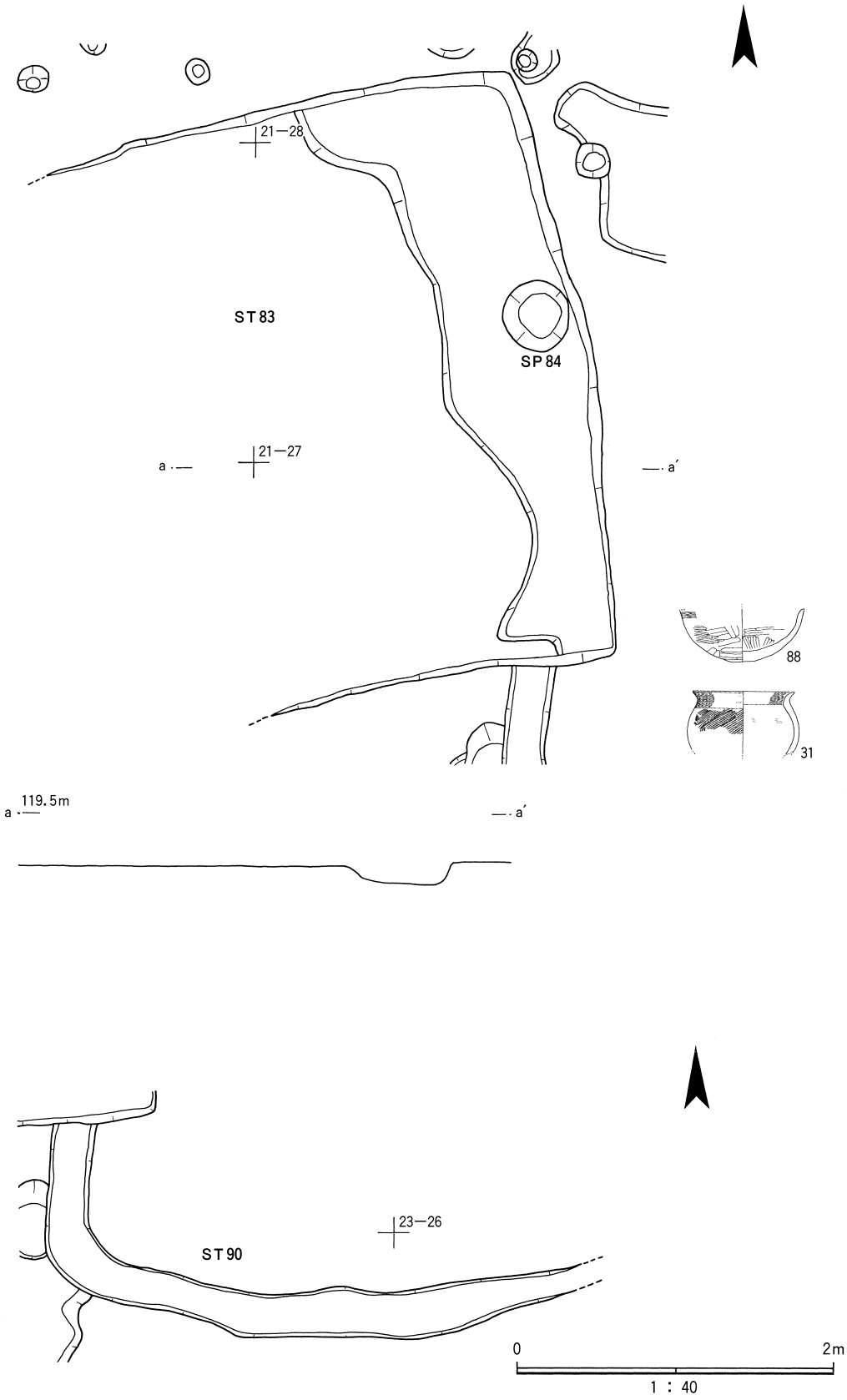
第９図　川跡ＳＧ１土層断面図



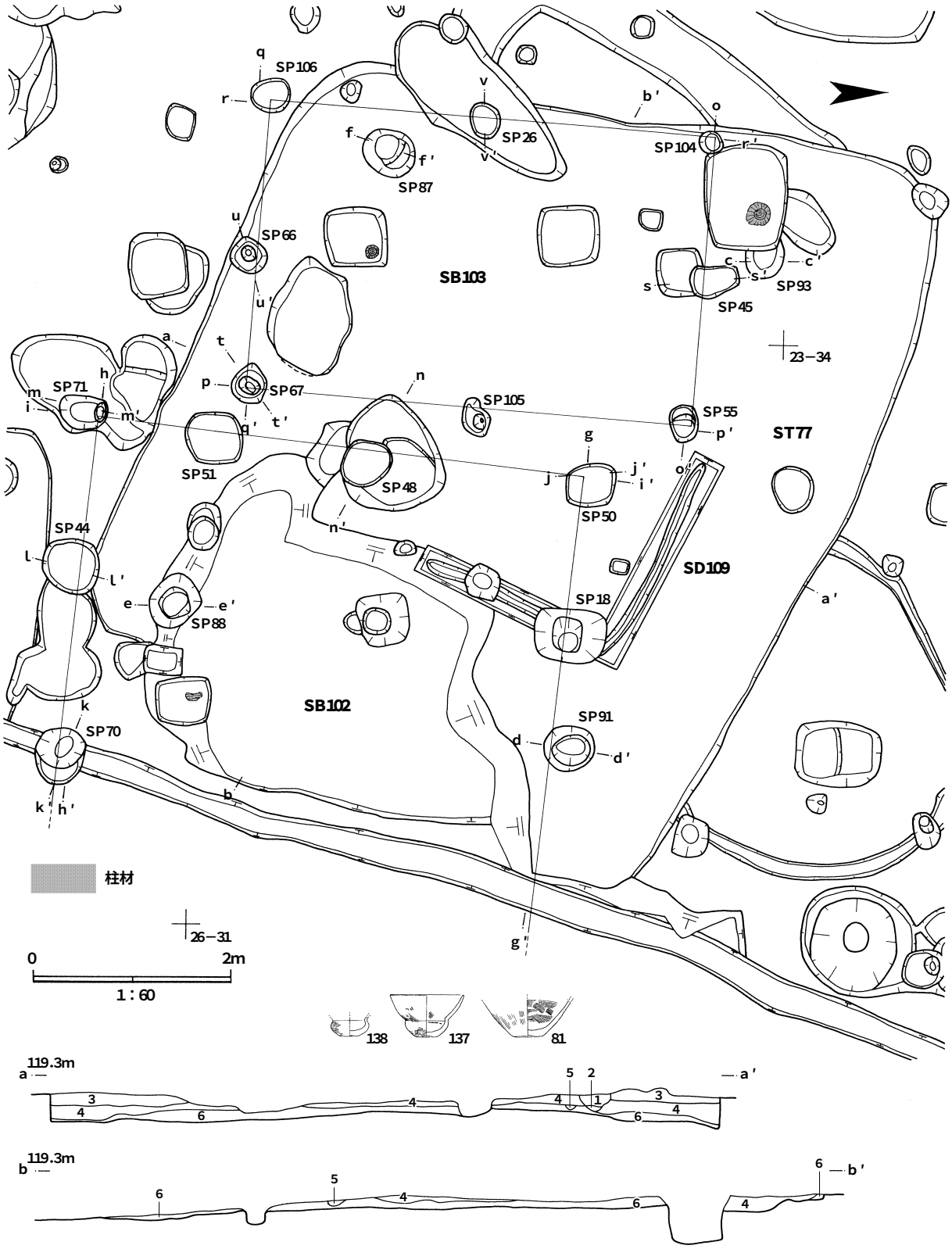
d−d'

1	耕土			
2	10YR1.7/1	黒	シルト	ピット
3	10YR2/1	黒	シルト	落ち込みSX10
4	10YR4/1	褐灰	砂質土	ST69 覆土
5	10YR4/1	褐灰	砂質シルト	SP92 掘形
6	10YR2/1	黒	荒砂 礫を含む	SP92 掘形
7	10YR5/1	褐灰	粘質シルト	ST69 掘形・床面
8	10YR2/1	黒	荒砂 礫を含む	ST69 掘形・床面
9	10YR5/2	灰黄褐	シルト	地山
10	10YR5/2	灰黄褐	砂質土	地山

第10図　竪穴住居ST69



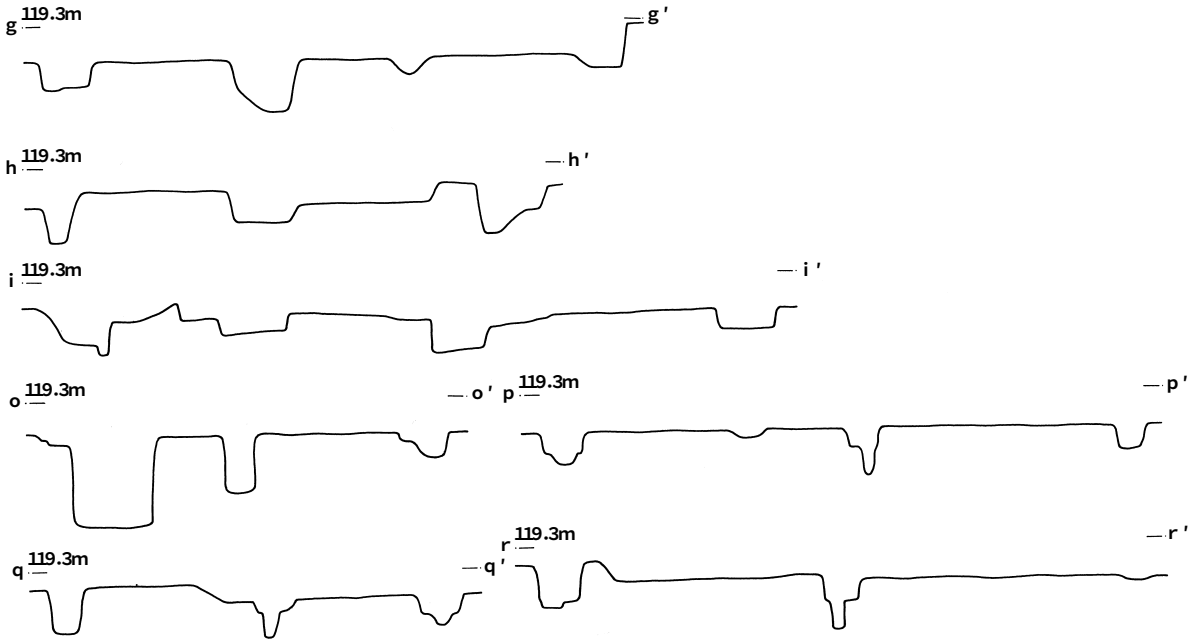
第11図　竪穴住居ＳＴ83・90

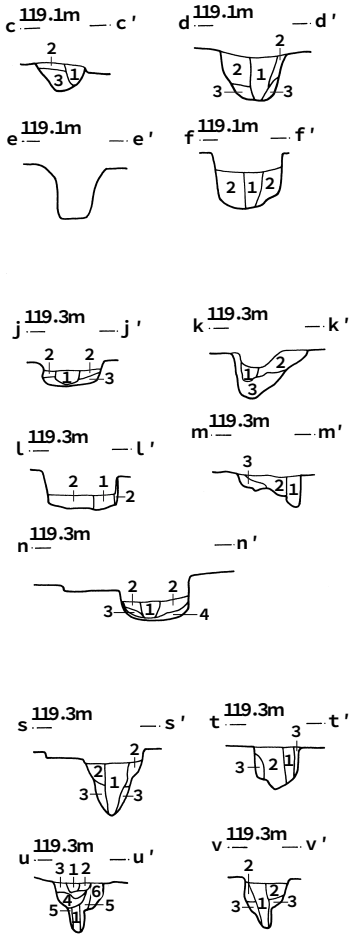


ＳＴ77　ａ−ａ'・ｂ−ｂ'

1	10ＹＲ3/1	黒褐	シルト	ピット	4	10ＹＲ4/1	褐灰	砂質土	床面（掘形上層）
2	10ＹＲ6/3	にぶい黄橙	細砂	ピット	5	10ＹＲ4/4	褐	砂利	溝ＳＤ109
3	10ＹＲ5/2	灰黄褐	シルト	覆土	6	10ＹＲ6/2	灰黄褐	砂	掘形下層

第12図　竪穴住居ＳＴ77、溝ＳＤ109、掘立柱建物ＳＢ102・103





ＳＰ93　ｃ－ｃ’

1	10ＹＲ4/1 褐灰	砂質シルト	柱痕	
2	10ＹＲ3/2 黒褐	砂質シルト	掘形	
3	10ＹＲ5/2 灰黄褐	砂質シルト	〃	

ＳＰ91　ｄ－ｄ’

1	10ＹＲ5/2 灰黄褐	砂質シルト	柱痕	
2	10ＹＲ4/2 灰黄褐	砂質シルト	掘形	
3	10ＹＲ5/2 灰黄褐	シルト	〃	

ＳＰ87　ｆ－ｆ’

1	10ＹＲ5/1 褐灰	砂質シルト	柱痕	
2	10ＹＲ4/1 褐灰	砂質シルト	掘形	

ＳＰ50　ｊ－ｊ’

1	10ＹＲ2/1 黒	シルト	10ＹＲ4/2 シルトを含む	柱痕
2	10ＹＲ2/2 黒褐	シルト	10ＹＲ4/2 粘質シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ5/2 灰黄褐	砂質シルト	10ＹＲ3/2 シルトを含む	〃

ＳＰ70　ｋ－ｋ’

1	10ＹＲ3/1 黒褐	粘質シルト	柱痕	
2	10ＹＲ3/2 黒褐	シルト	掘形	
3	10ＹＲ4/1 褐灰	砂質シルト	〃	

ＳＰ44　ｌ－ｌ’

1	10ＹＲ2/2 黒褐	シルト	10ＹＲ3/2 シルトを含む	柱根
2	10ＹＲ4/2 灰黄褐	シルト	10ＹＲ3/1 シルトを含む	掘形

ＳＰ71　ｍ－ｍ’

1	10ＹＲ3/2 黒褐	粘質シルト	柱根	
2	10ＹＲ4/1 褐灰	砂質シルト	10ＹＲ5/1 砂質シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ5/2 灰黄褐	砂質シルト	10ＹＲ4/1 シルト含む	〃

ＳＰ48　ｎ－ｎ’

1	10ＹＲ3/1 黒褐	シルト	柱痕	
2	10ＹＲ2/2 黒褐	シルト	10ＹＲ4/2 シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ3/2 黒褐	シルト		〃
4	10ＹＲ4/2 灰黄褐	砂質土		〃

ＳＰ45　ｓ－ｓ’

1	10ＹＲ2/2 黒褐	シルト	炭化物･10ＹＲ4/2 灰黄褐シルトを少し含む	柱痕
2	10ＹＲ3/2 黒褐	シルト	10ＹＲ4/2 灰黄褐シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ4/1 褐灰	砂質シルト		〃

ＳＰ67　ｔ－ｔ’

1	10ＹＲ3/1 黒褐	粘質シルト	柱根	
2	10ＹＲ3/1 黒褐	粘質シルト	10ＹＲ3/2 黒褐砂質シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ4/2 灰黄褐	シルト		〃

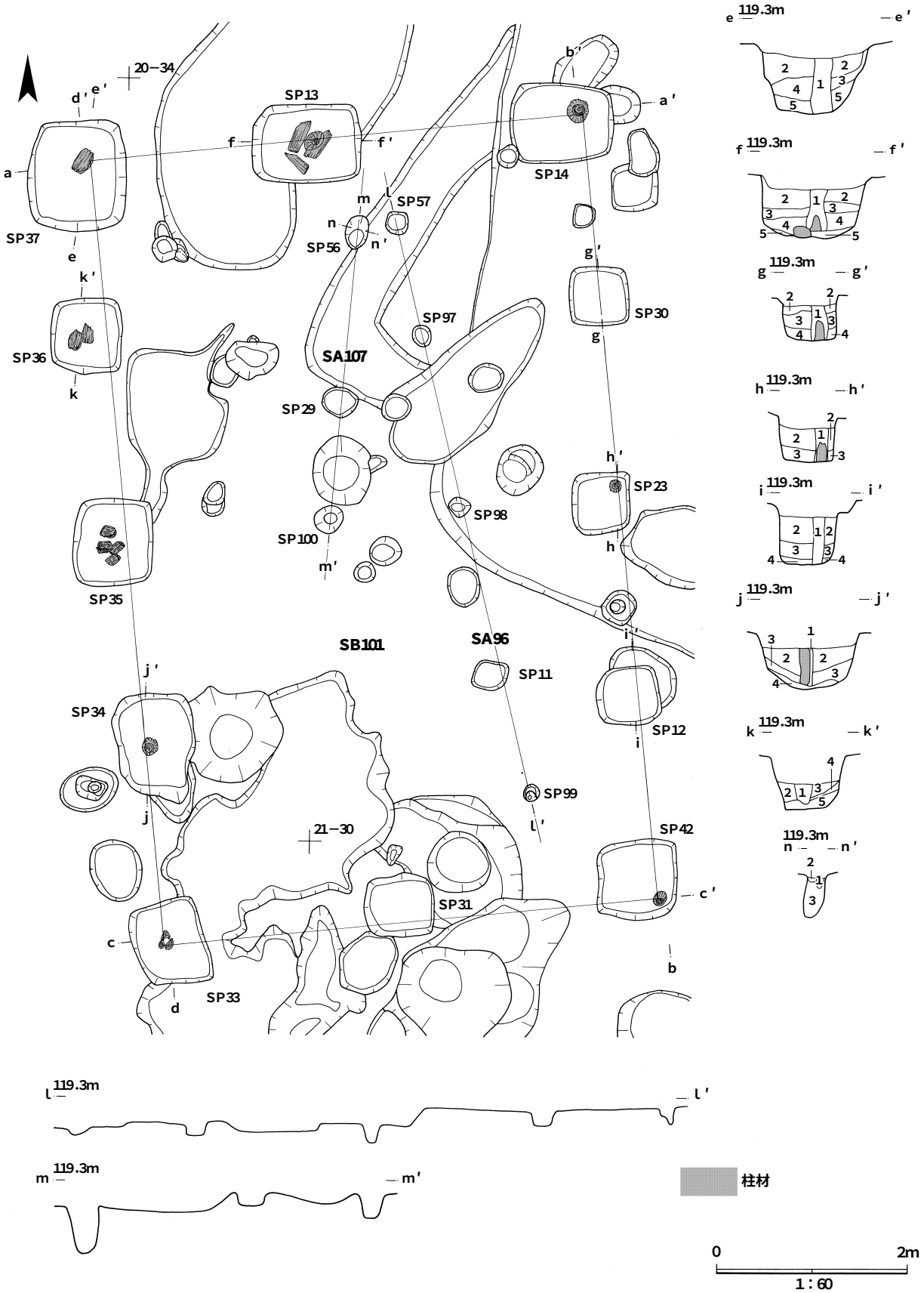
ＳＰ66　ｕ－ｕ’

1	10ＹＲ3/1 黒褐	シルト	柱痕	
2	10ＹＲ3/2 黒褐	シルト		掘形
3	10ＹＲ4/1 褐灰	シルト		〃
4	10ＹＲ4/2 灰黄褐	シルト	10ＹＲ3/1 黒褐シルトを含む	〃
5	10ＹＲ4/2 灰黄褐	砂質シルト	10ＹＲ3/1 黒褐シルトを含む	〃
6	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐	シルト	10ＹＲ4/2 灰黄褐シルトを含む	〃

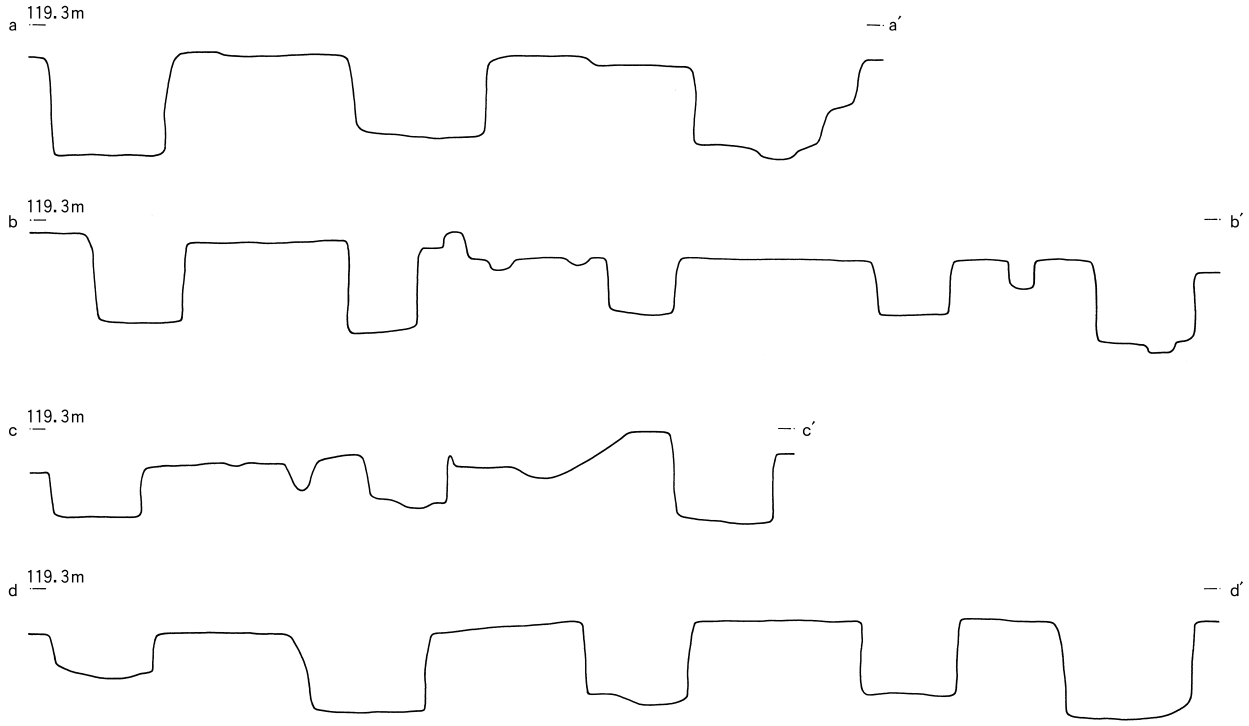
ＳＰ26　ｖ－ｖ’

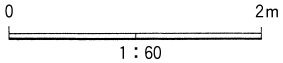
1	10ＹＲ3/2 黒褐	シルト		柱痕
2	10ＹＲ4/2 灰黄褐	砂質シルト	炭化物を少し含む	掘形
3	10ＹＲ5/2 灰黄褐	砂質シルト		〃

第13図　竪穴住居ＳＴ77、掘立柱建物ＳＢ102・103



第14図　掘立柱建物ＳＢ101、柵列ＳＡ96・107





ＳＰ37　ｅ－ｅ’

1	10ＹＲ2/2	黒褐	シルト	柱痕
2	10ＹＲ4/2	灰黄褐	砂質土　10ＹＲ2/1 黒シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ2/1	黒	粘土	〃
4	10ＹＲ4/2	灰黄褐	砂質土	〃
5	10ＹＲ2/1	黒	粘土	〃

ＳＰ13　ｆ－ｆ’

1	10ＹＲ1.7/1	黒	粘質土	柱痕
2	10ＹＲ2/1	黒	シルト　10ＹＲ4/2 灰黄褐シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ3/2	黒褐	砂質土	〃
4	10ＹＲ1.7/1	黒	シルト　10ＹＲ3/2 黒褐砂質土を含む	〃
5	10ＹＲ4/2	灰黄褐	砂	〃

ＳＰ30　ｇ－ｇ’

1	10ＹＲ2/1	黒	粘土	柱痕
2	10ＹＲ3/1	黒褐	シルト	掘形
3	10ＹＲ3/2	黒褐	砂質土	〃
4	10ＹＲ4/2	灰黄褐	砂質土	〃

ＳＰ23　ｈ－ｈ’

1	10ＹＲ3/1	黒褐	粘土	柱痕
2	10ＹＲ2/1	黒	シルト　10ＹＲ4/2 灰黄褐シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ3/2	黒褐	砂質土　10ＹＲ2/2 黒褐シルトを含む	〃

ＳＰ12　ｉ－ｉ’

1	10ＹＲ3/1	黒褐	粘質土	柱痕
2	10ＹＲ3/1	黒褐	シルト　10ＹＲ5/2 灰黄褐シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ4/2	灰黄褐	砂質土　10ＹＲ3/1 黒褐シルトを含む	〃
4	10ＹＲ5/2	灰黄褐	粘質土	〃

ＳＰ34　ｊ－ｊ’

1	10ＹＲ4/2	灰黄褐	シルト　木片を含む	柱痕
2	10ＹＲ5/2	灰黄褐	シルト　10ＹＲ2/1 黒粘質シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ4/2	灰黄褐	シルト	〃
4	10ＹＲ5/4	にぶい黄褐	砂	〃

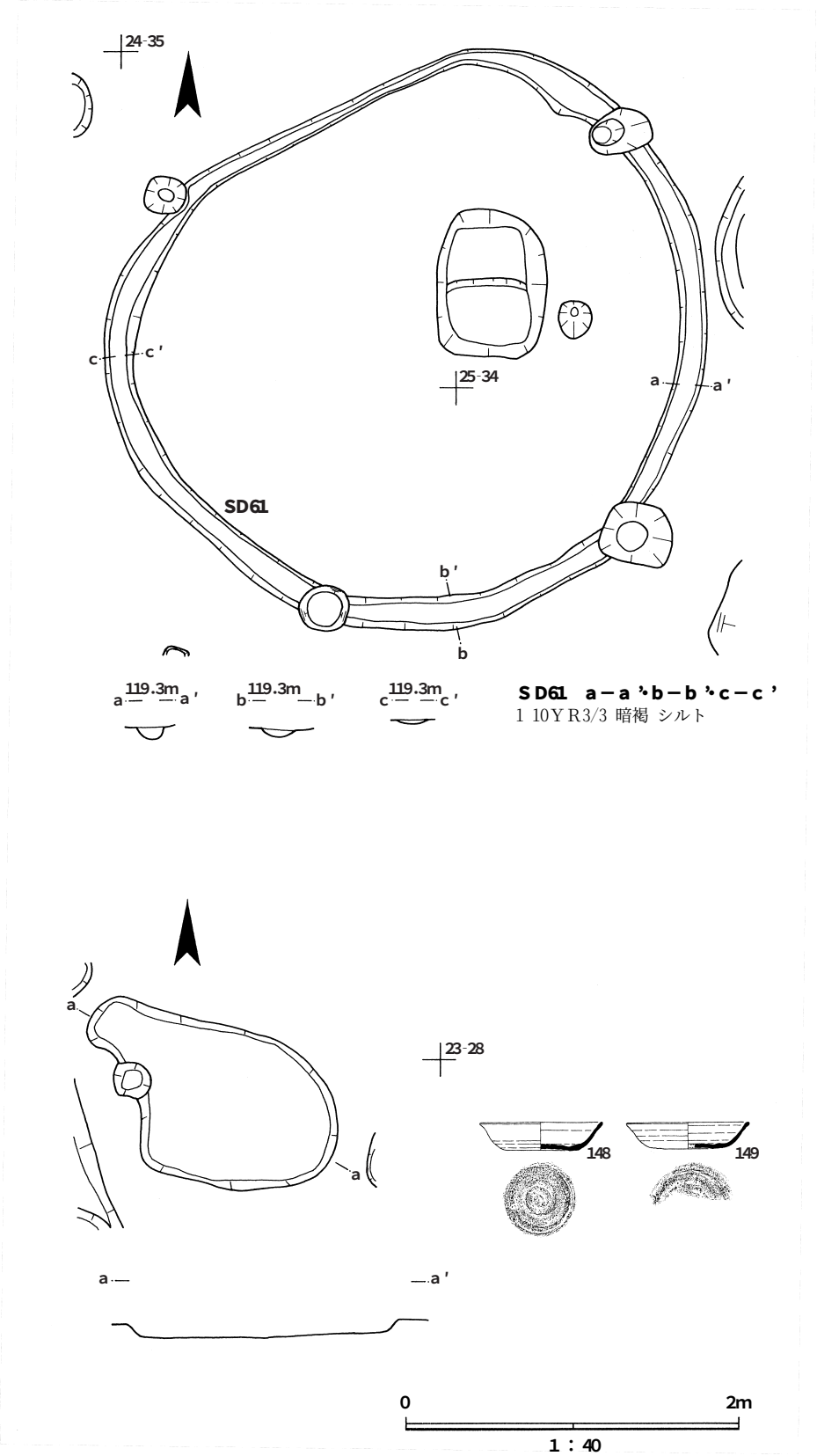
ＳＰ36　ｋ－ｋ’

1	10ＹＲ2/2	黒褐	シルト	柱痕
2	10ＹＲ4/2	灰黄褐	砂質土　10ＹＲ3/2 黒褐シルトを含む	掘形
3	10ＹＲ3/1	黒褐	砂質シルト　10ＹＲ2/1 黒シルトを含む	〃
4	10ＹＲ2/1	黒	シルト	〃
5	10ＹＲ5/2	灰黄褐	砂質土	〃

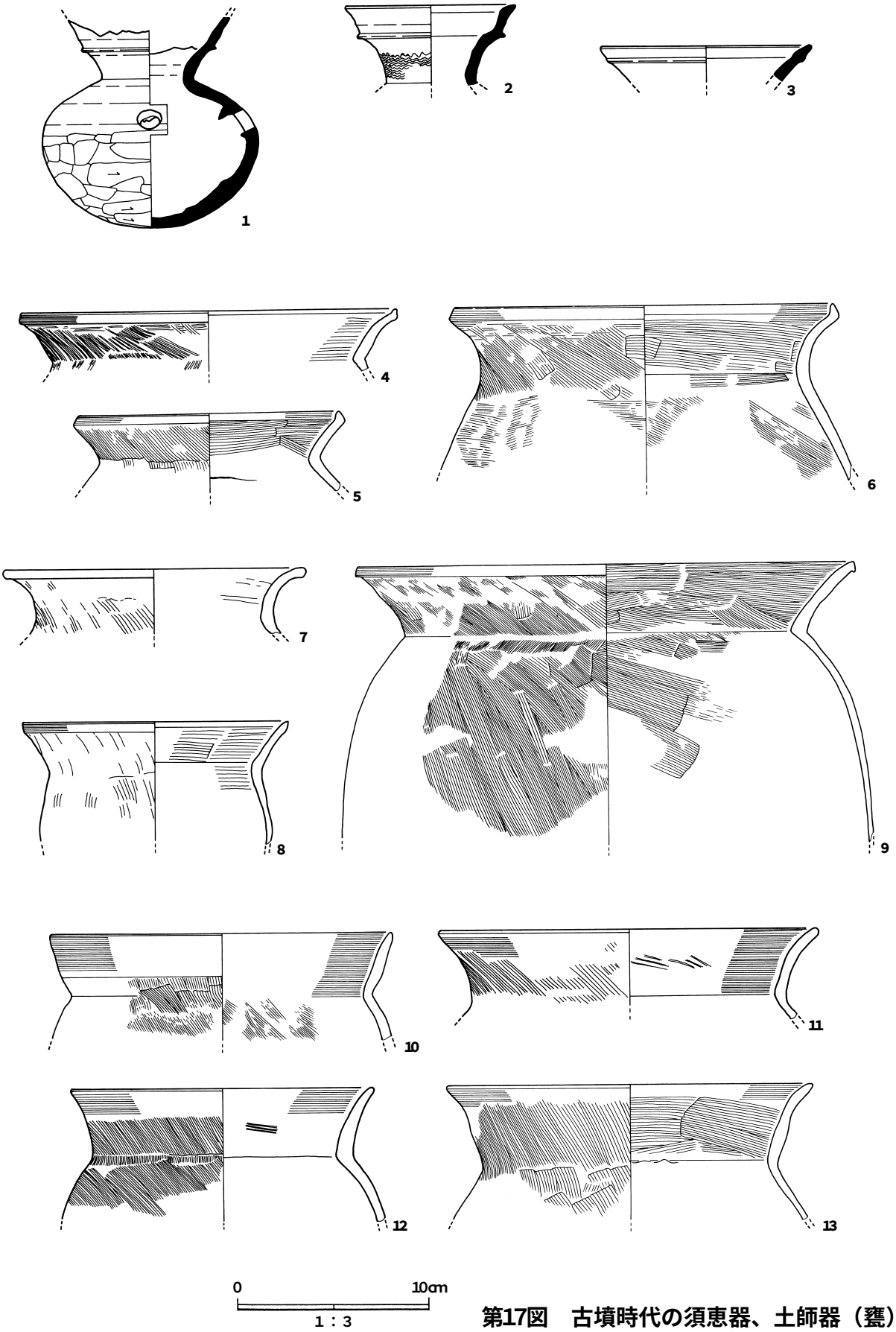
ＳＰ56　ｎ－ｎ’

1	10ＹＲ1.7/1	黒	シルト	柱痕
2	10ＹＲ2/2	黒褐	シルト	掘形
3	10ＹＲ3/2	黒褐	砂質シルト　10ＹＲ2/1 黒シルトを含む	〃

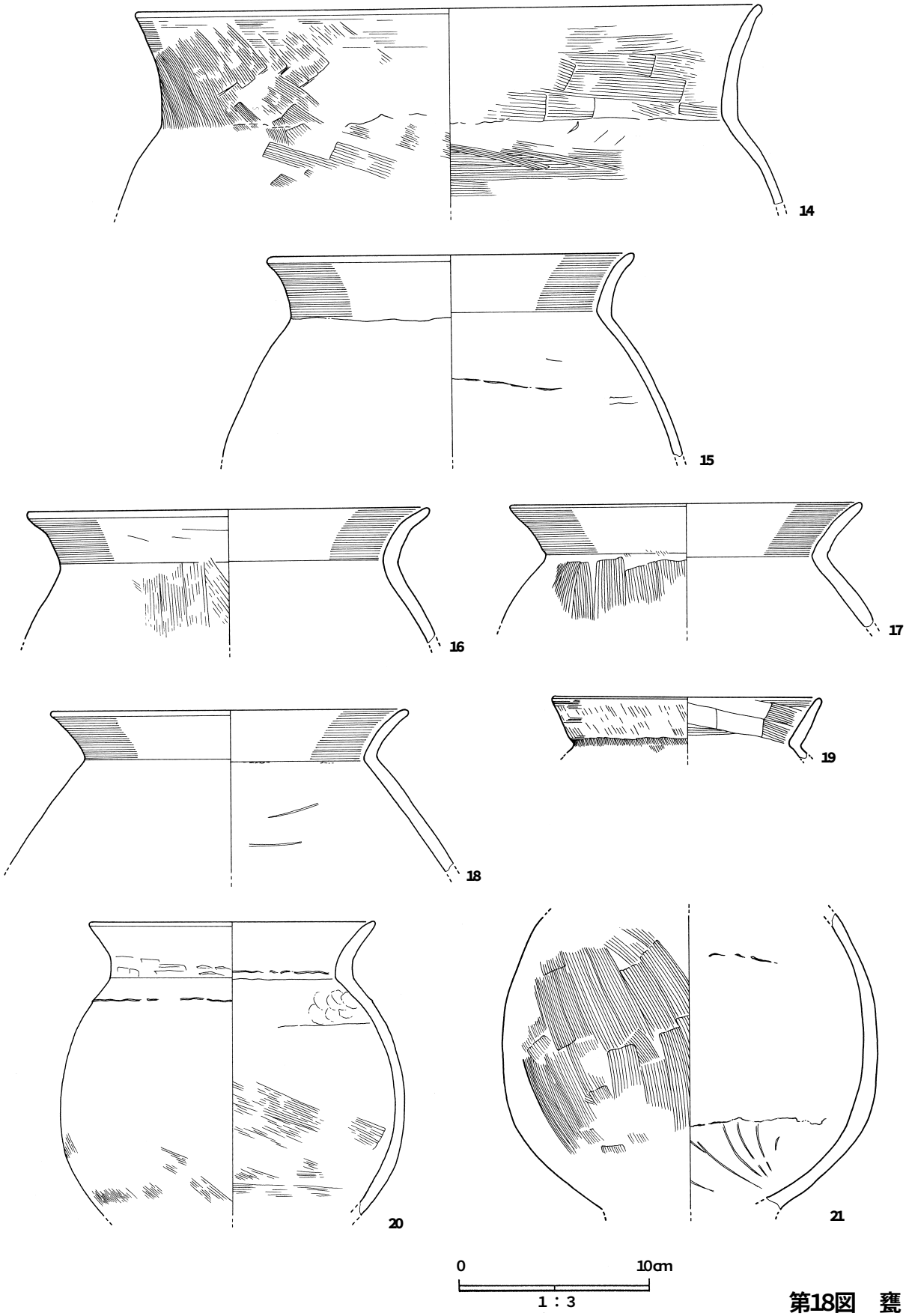
第15図　掘立柱建物ＳＢ101



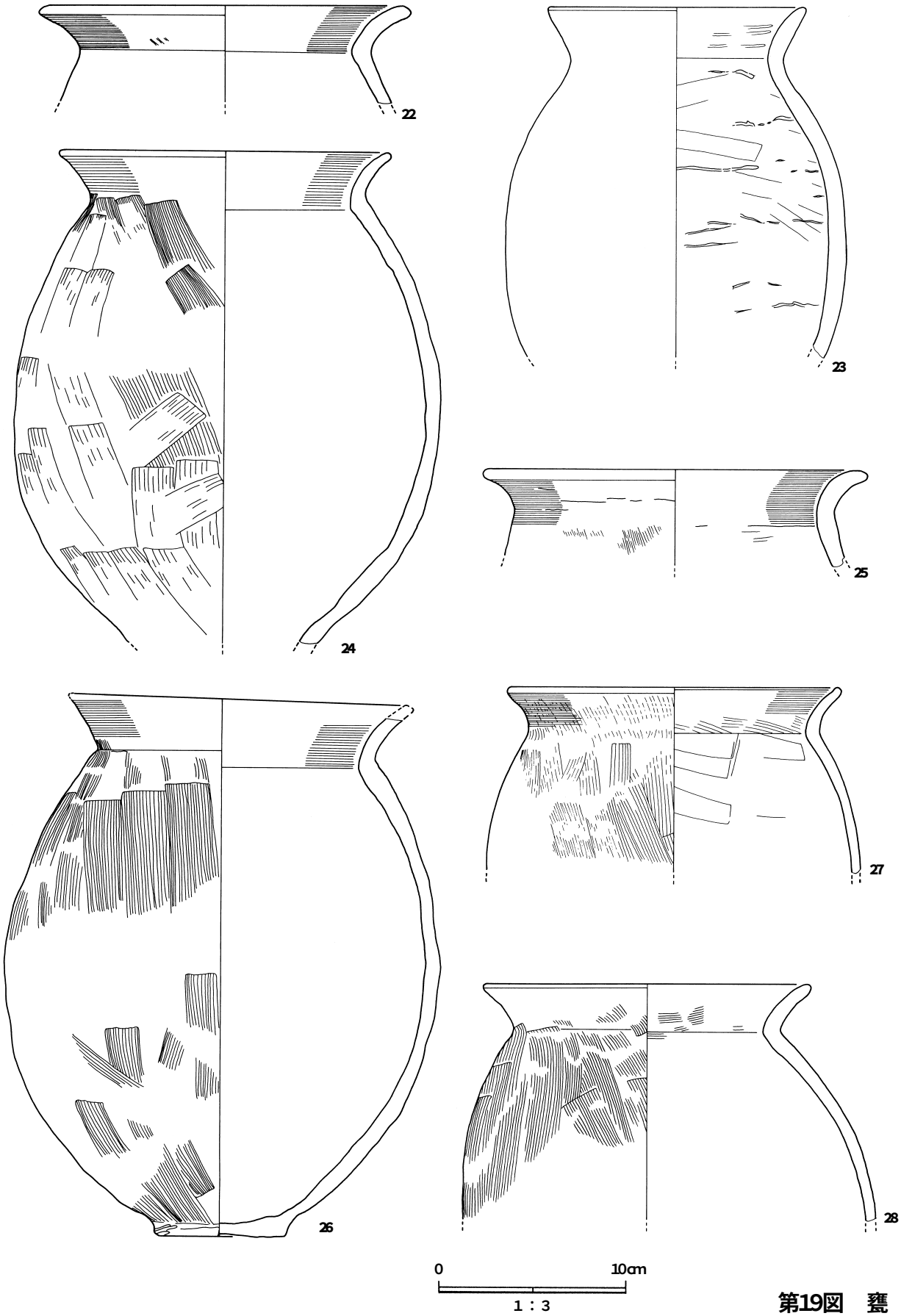
第16図　溝ＳＤ61、土坑ＳＫ７



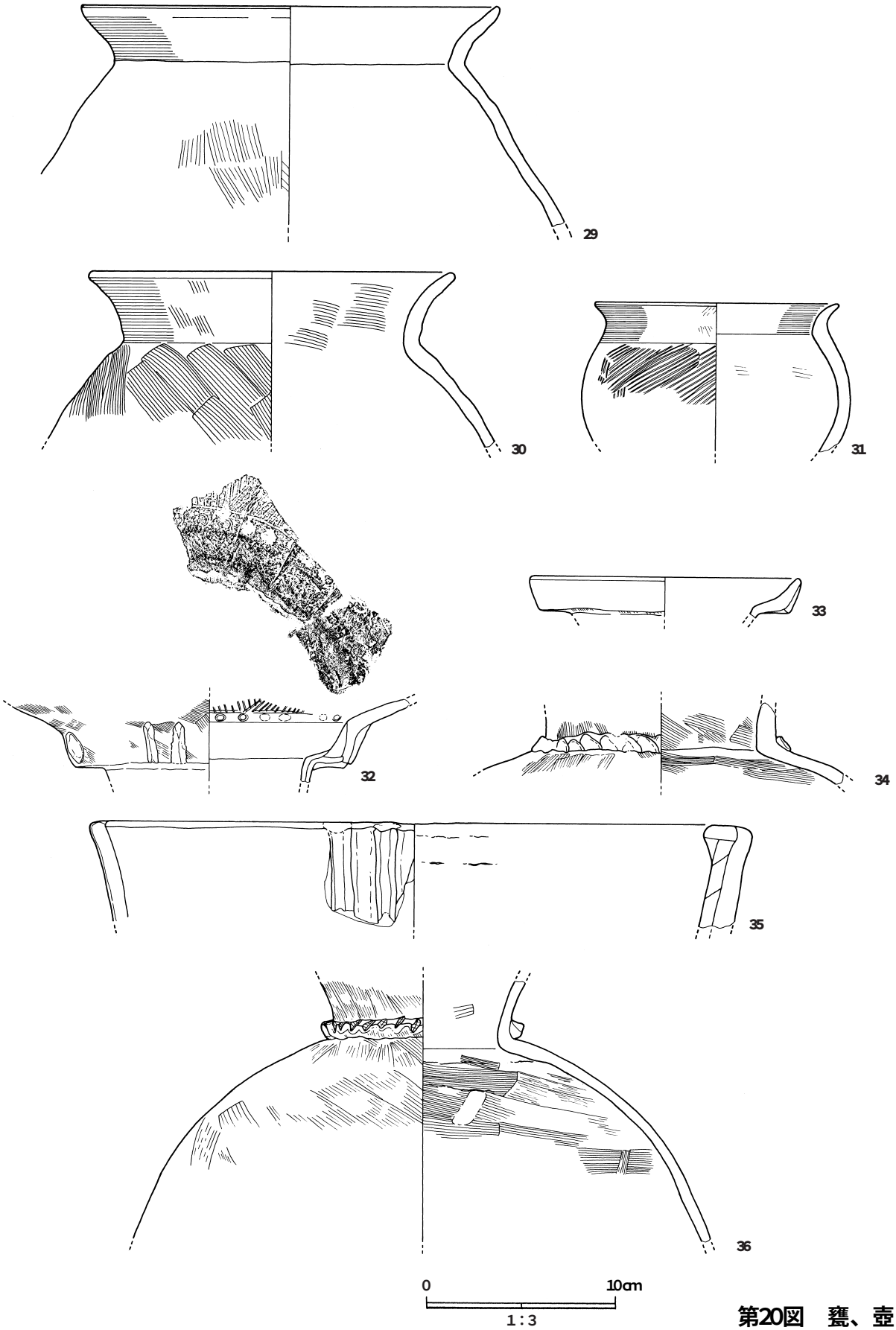
第17図　古墳時代の須恵器、土師器（甕）



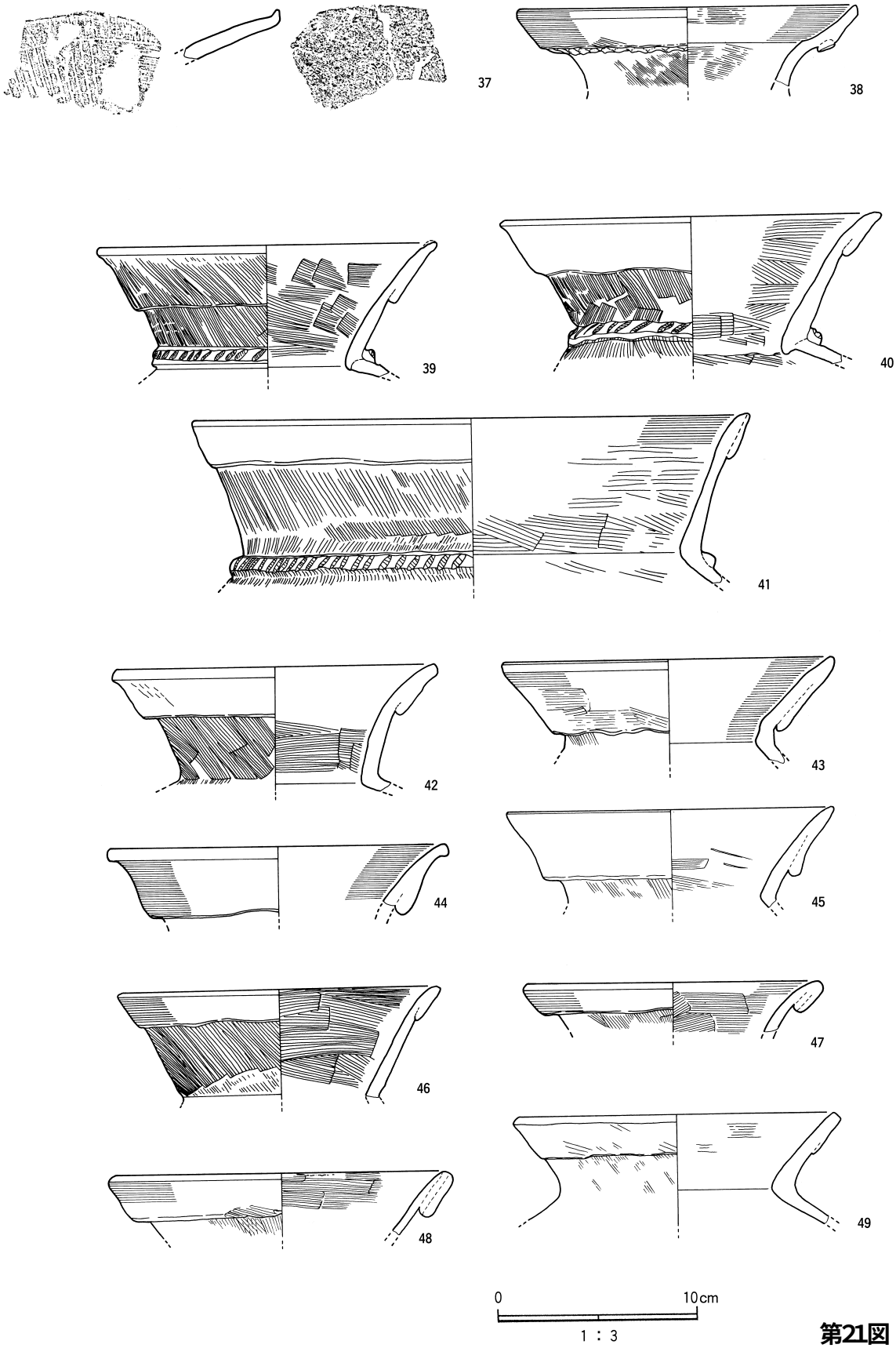
第18図　甕



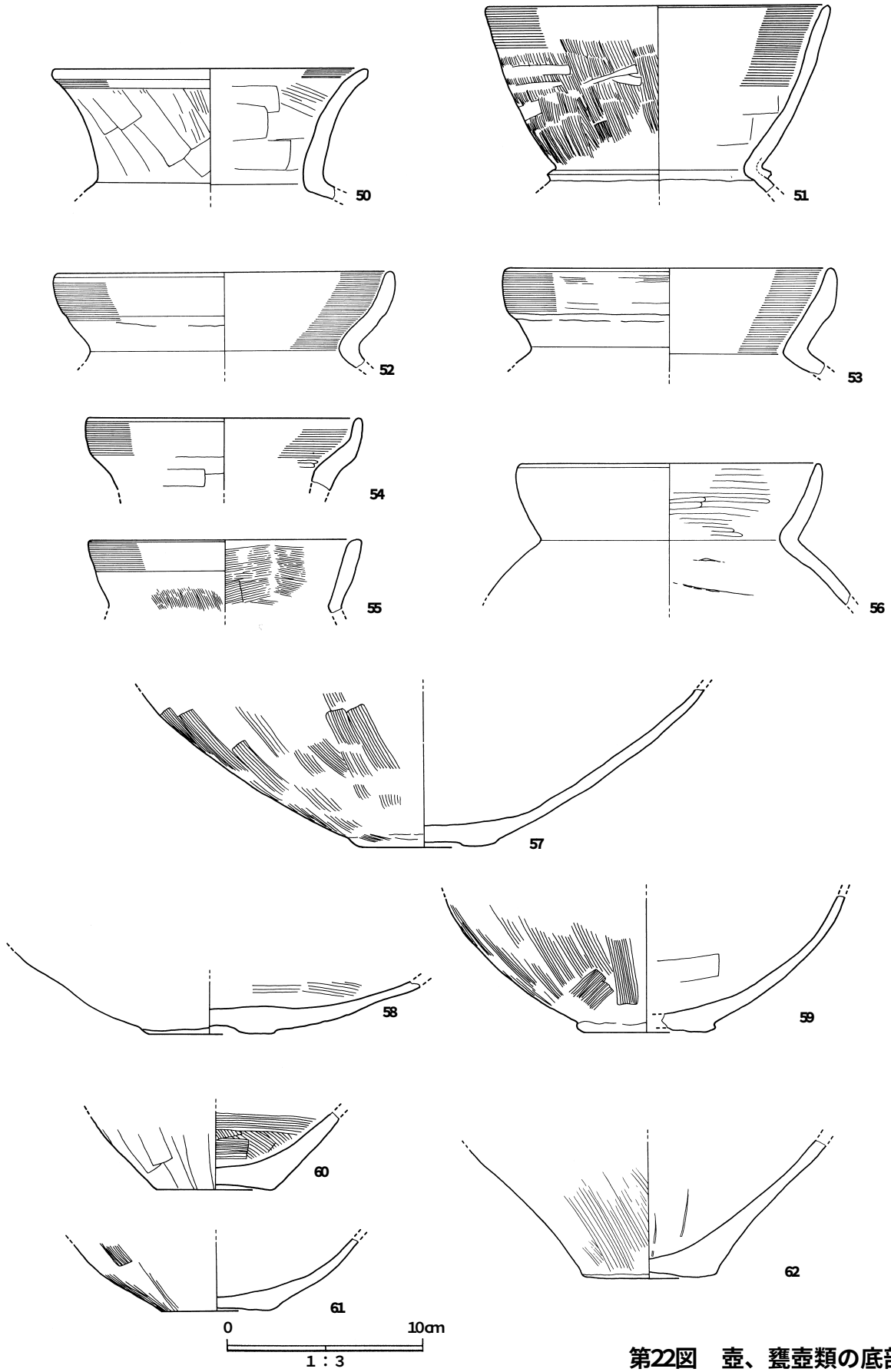
第19図　甕



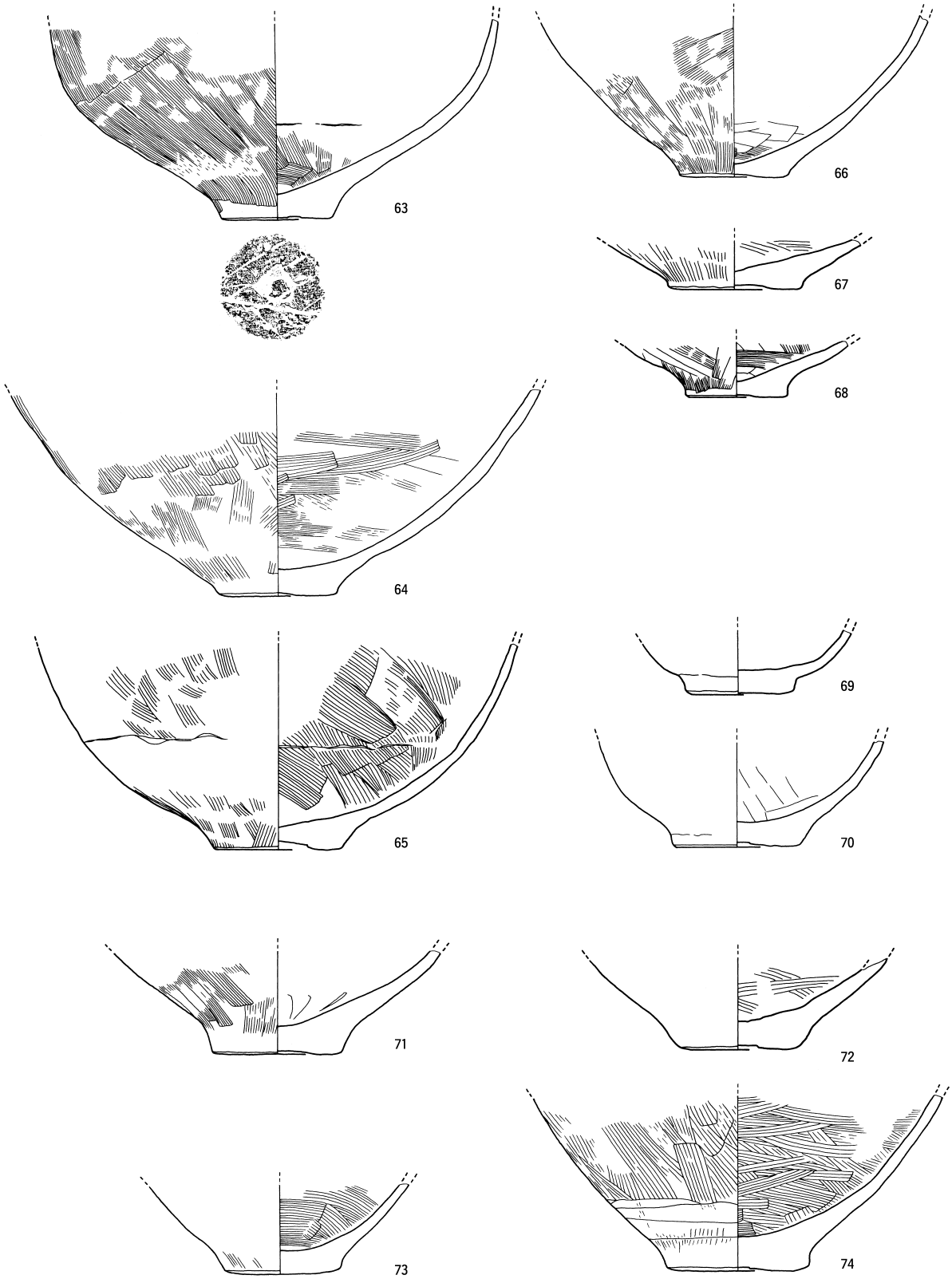
第20図　甕、壺



第21図　壺

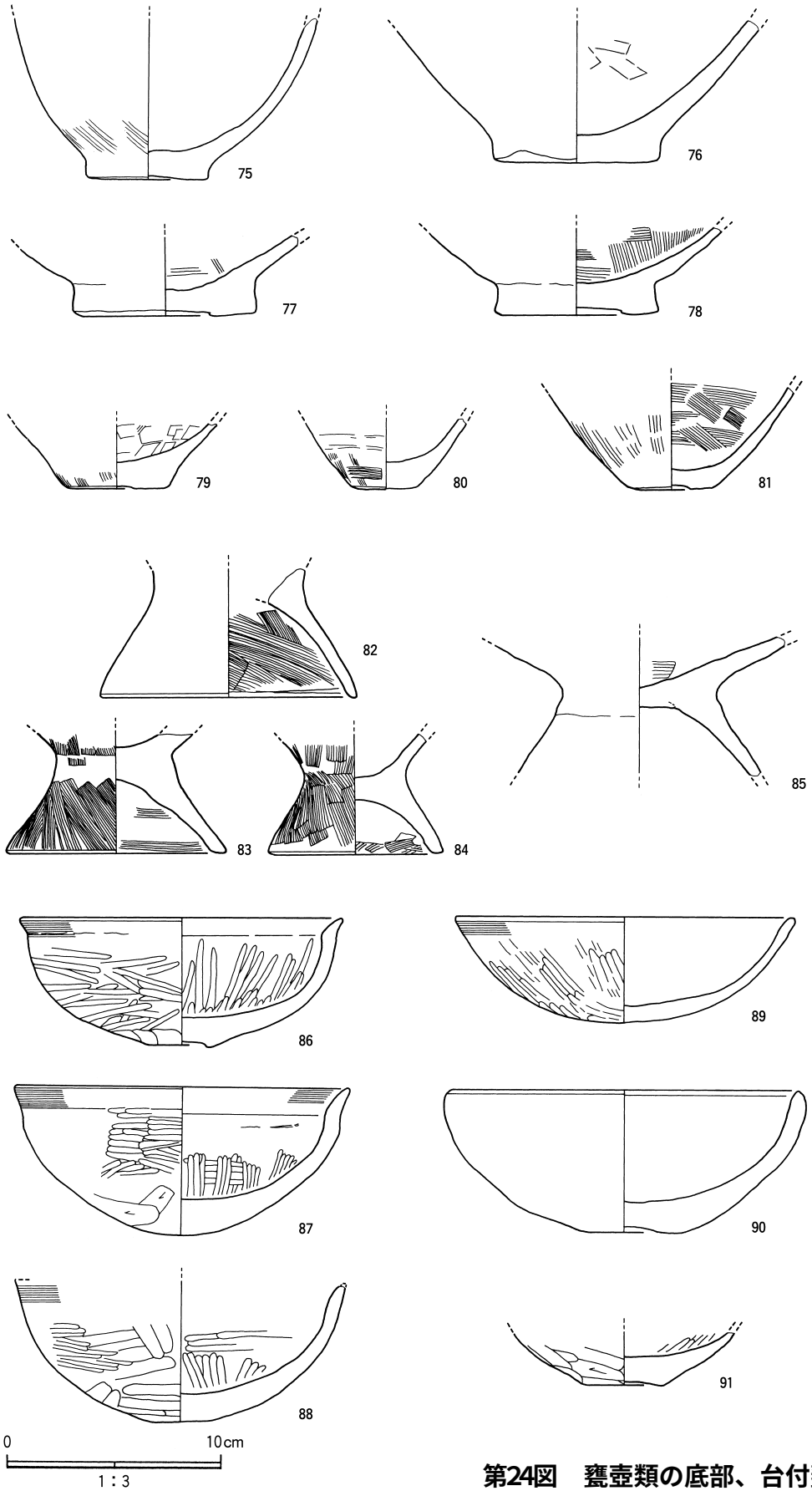


第22図　壺、甕壺類の底部

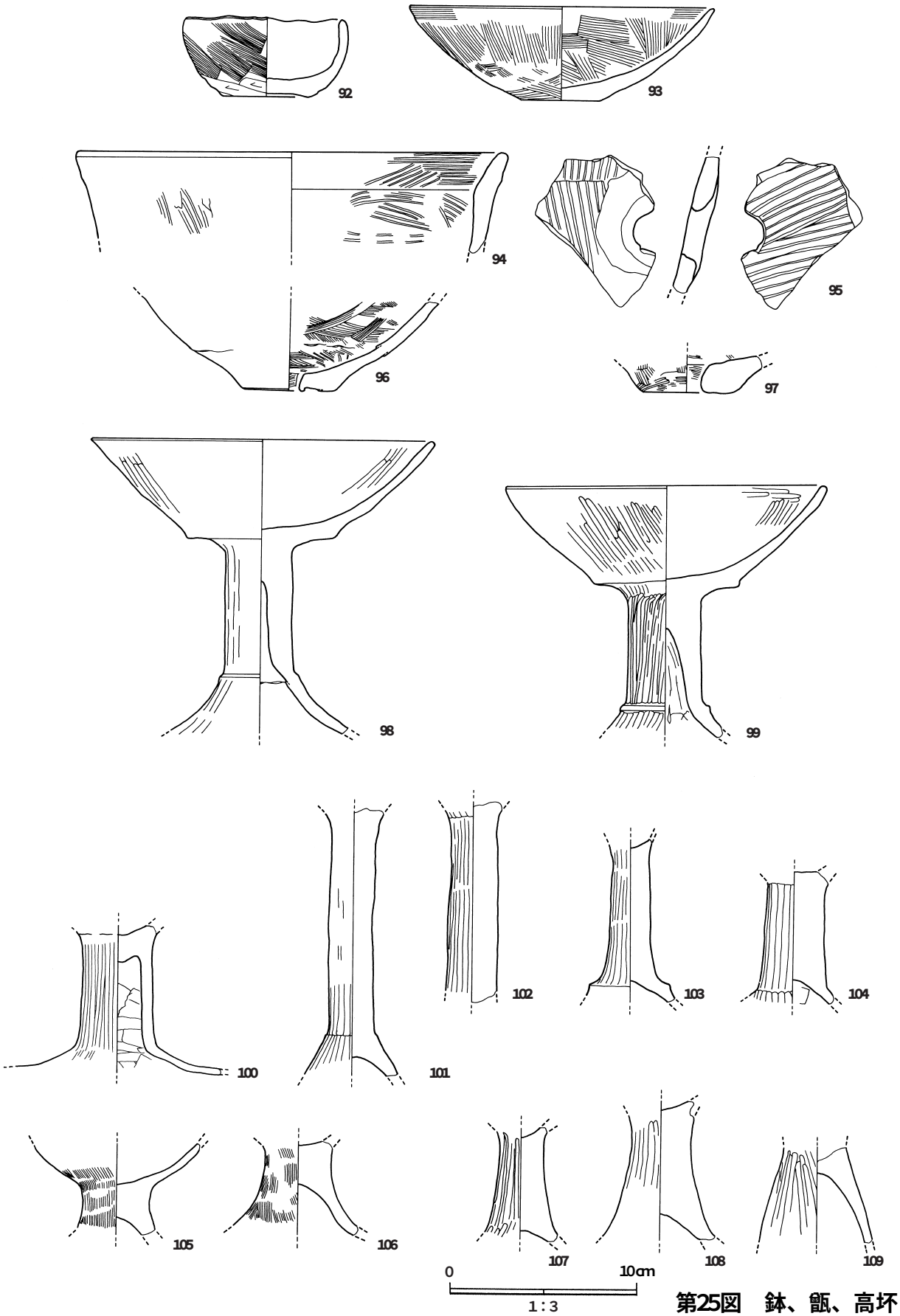


0　10cm
1：3

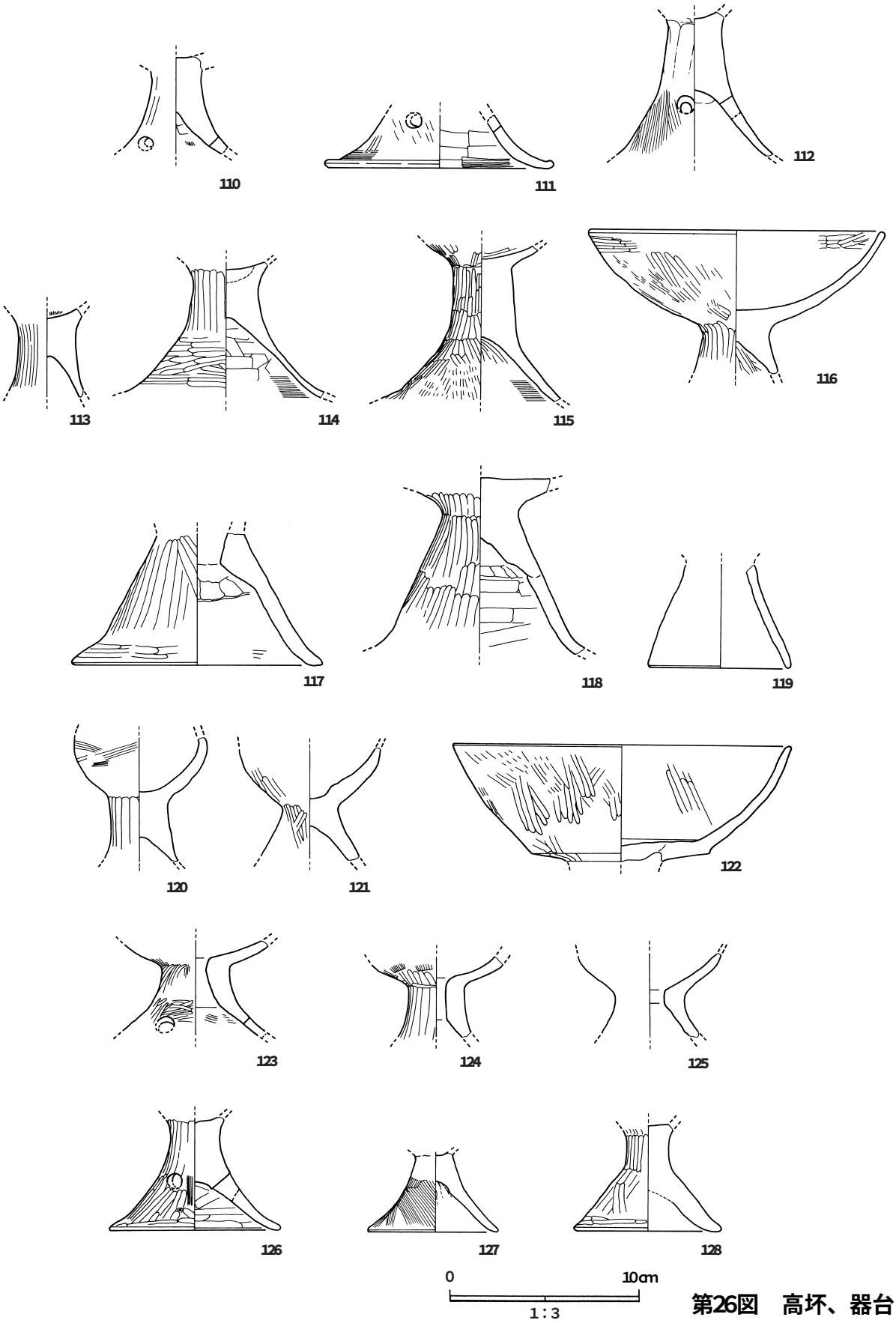
第23図　甕壺類の底部



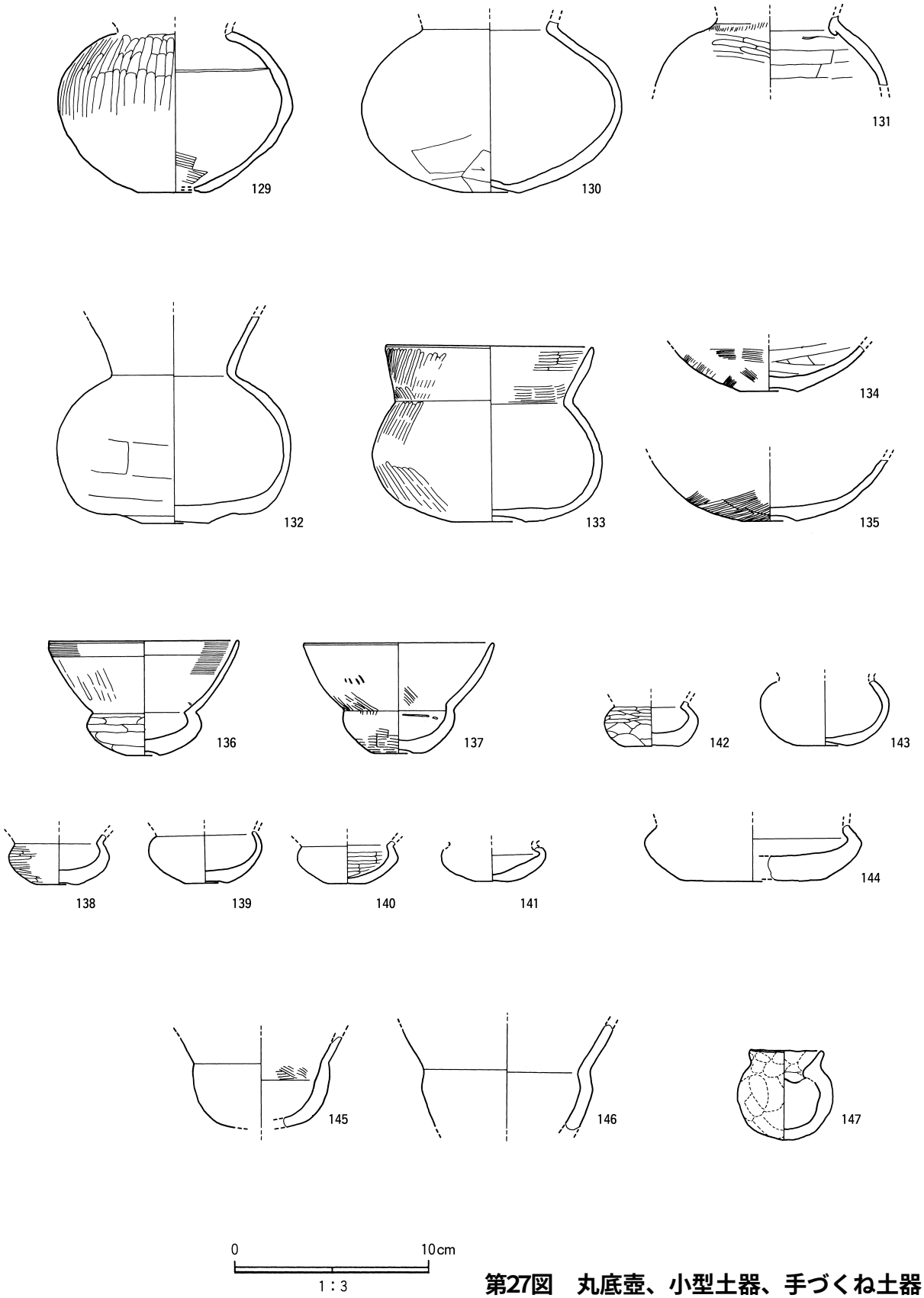
第24図　甕壺類の底部、台付甕、坏


92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
0
10cm
1:3

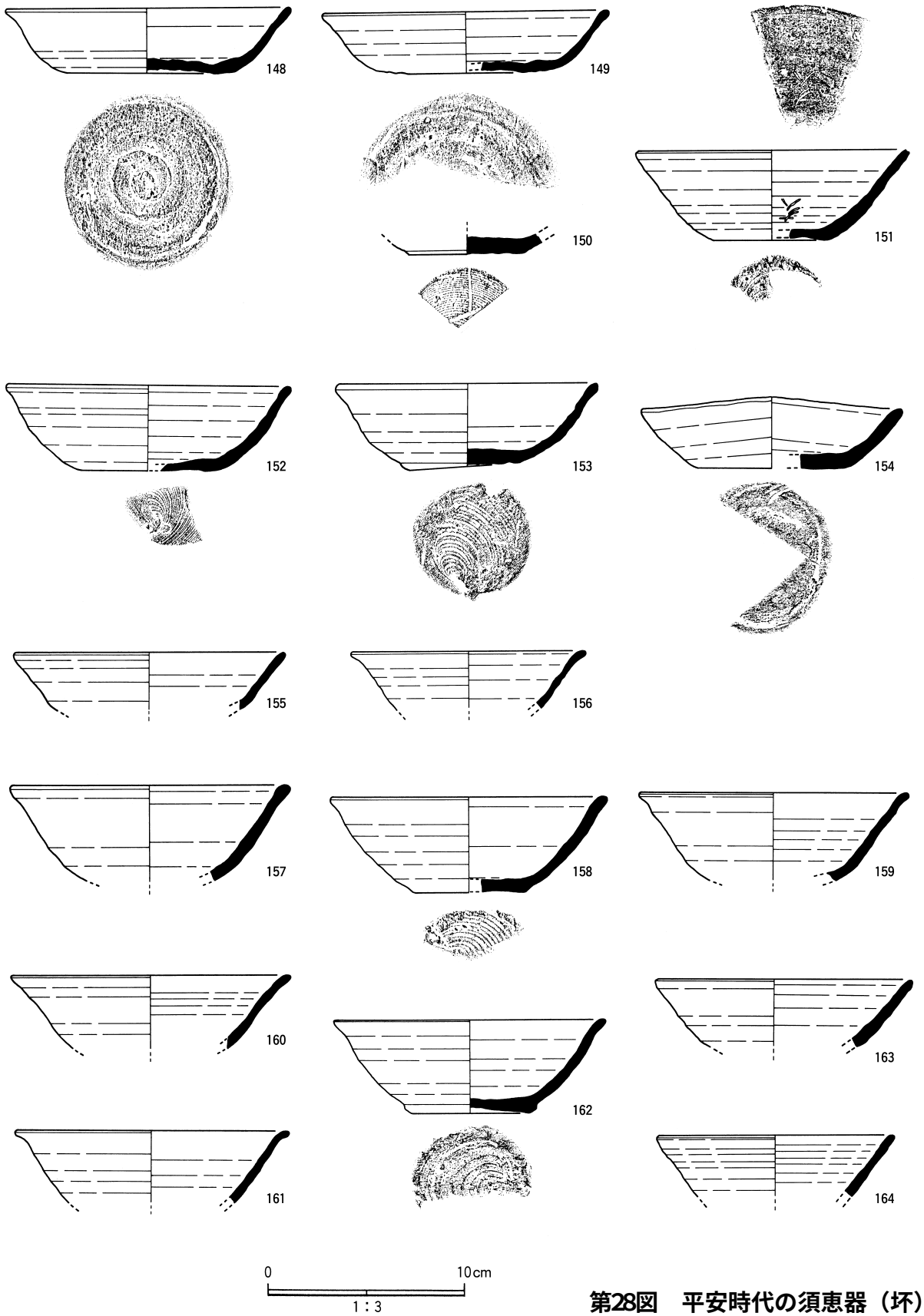
第25図　鉢、甑、高坏


110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
0
10cm
1:3

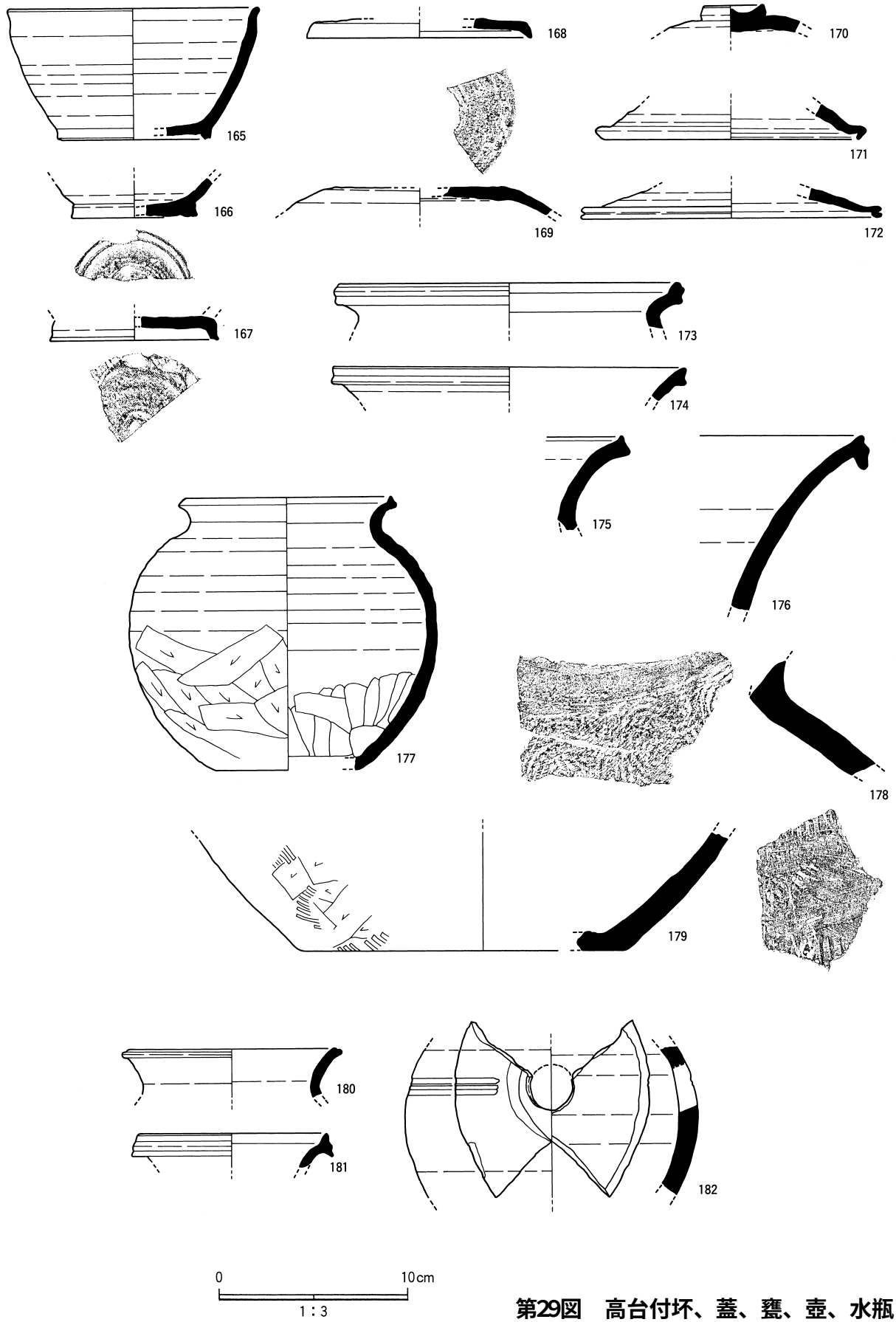
第26図　高坏、器台



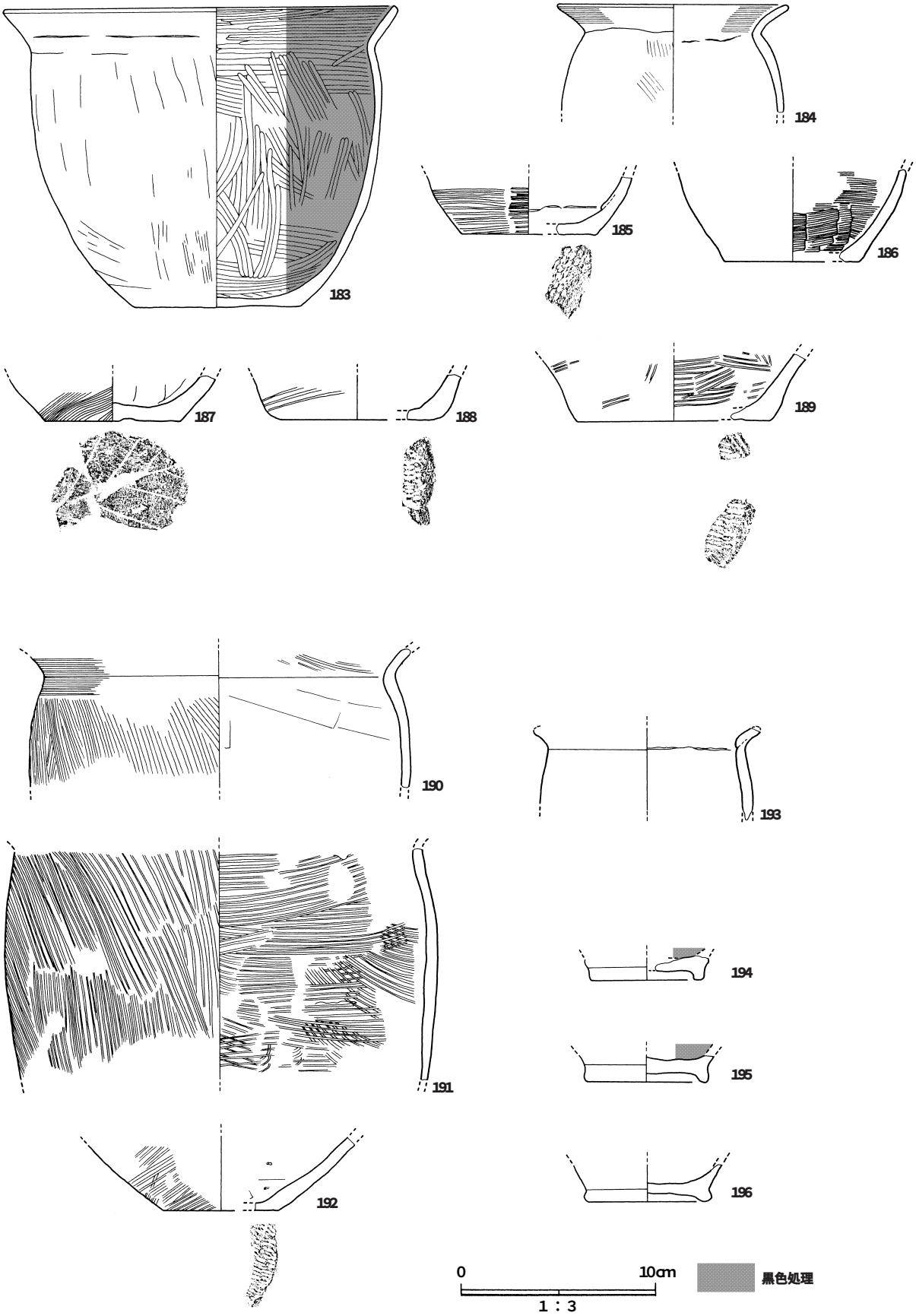
第27図　丸底壺、小型土器、手づくね土器



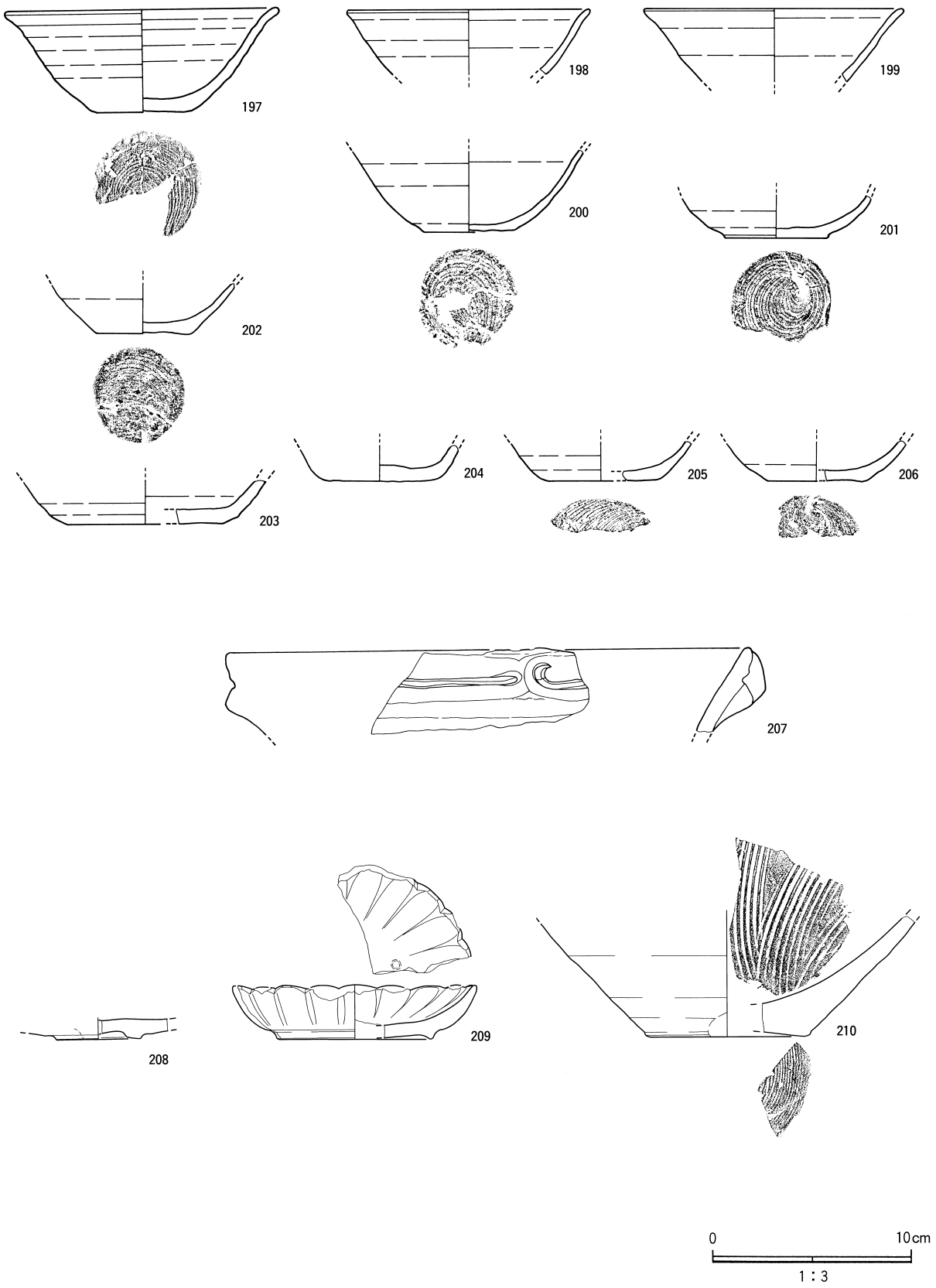
第28図　平安時代の須恵器（坏）



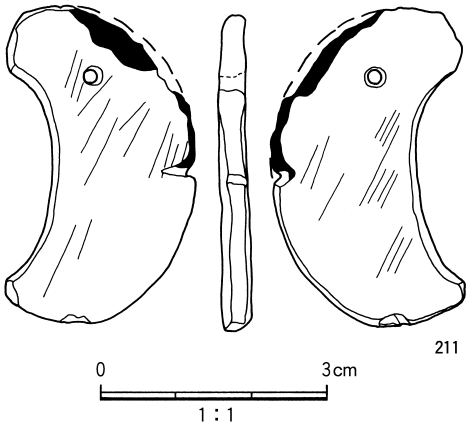
第29図　高台付坏、蓋、甕、壺、水瓶

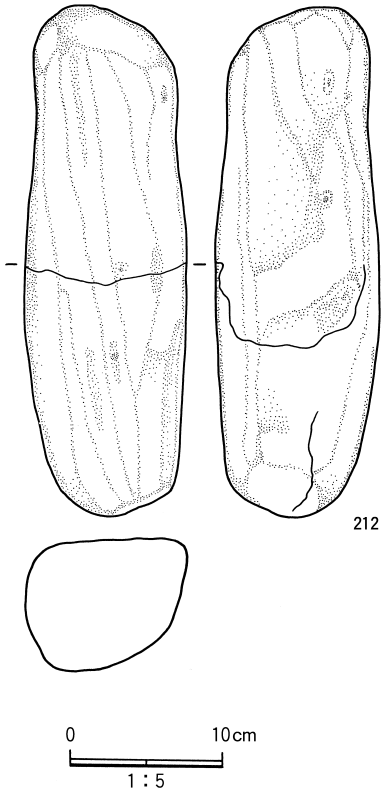


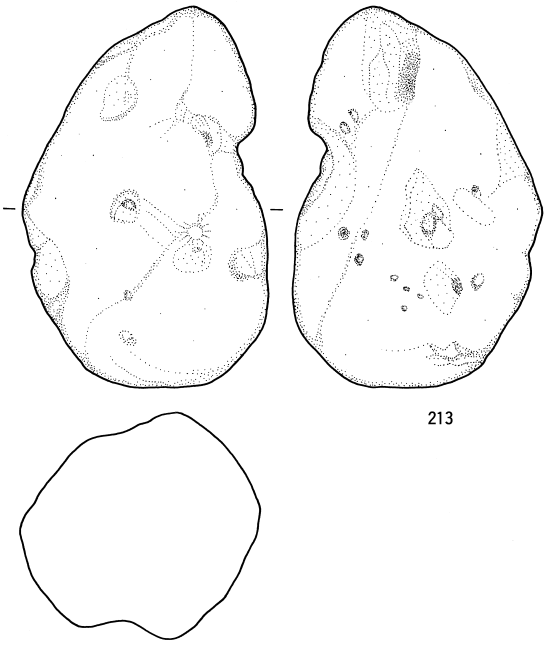
第30図　平安時代の土師器（甕）、赤焼土器（高台付坏）

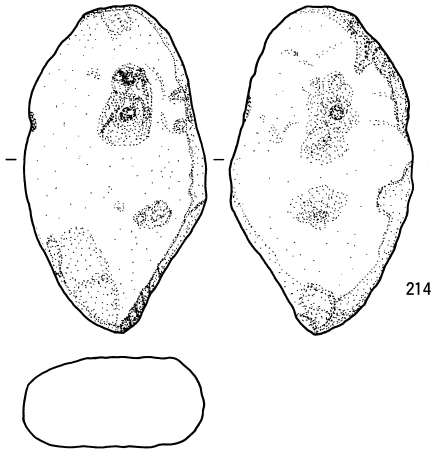


第31図　赤焼土器（坏）、縄文土器、陶器

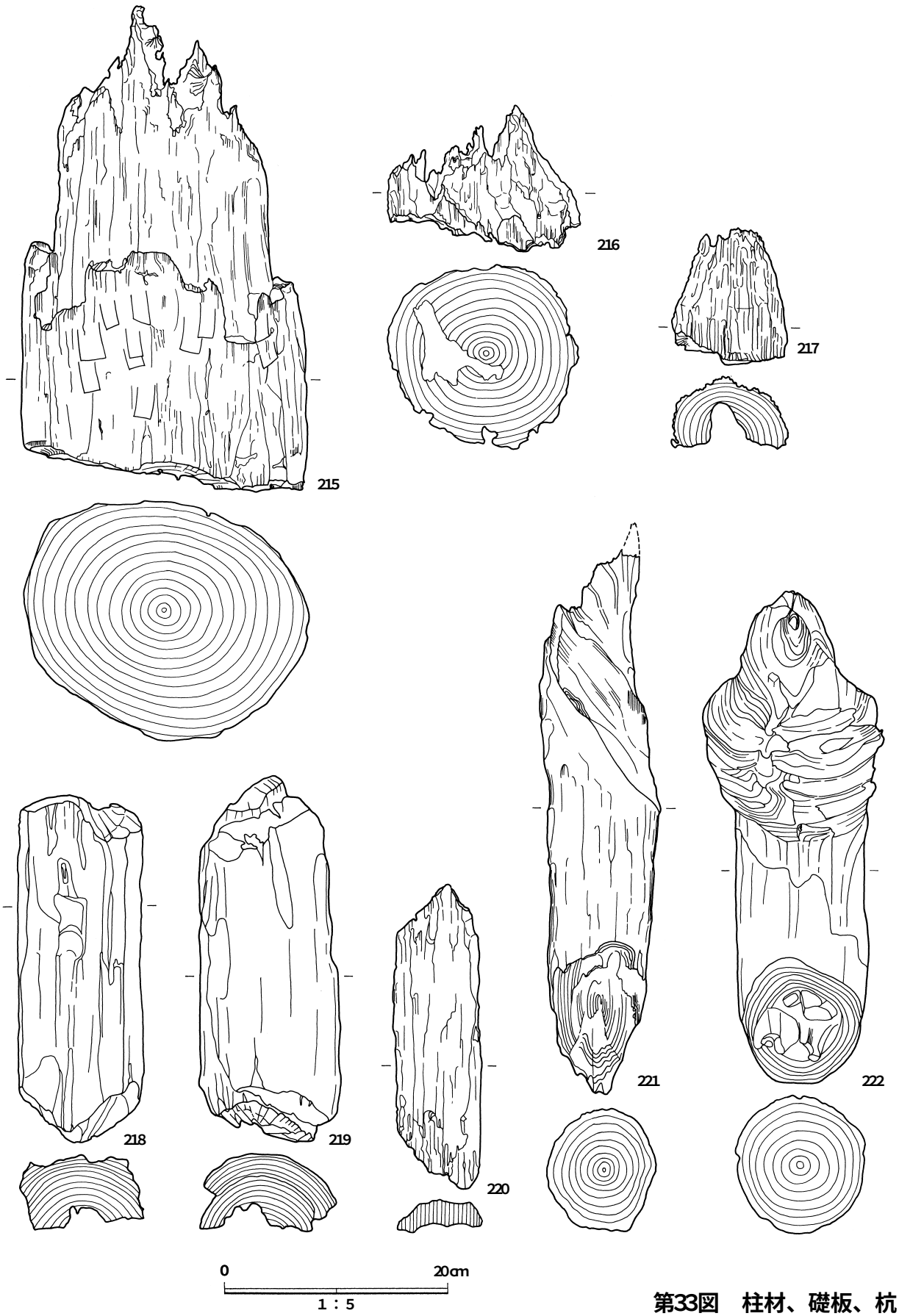








第32図　勾玉形石製模造品、石器、礫



第33図　柱材、礎板、杭

報告書抄録

ふりがな	やまがたもとやしきいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	山形元屋敷遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第109集
編著者名	水戸部秀樹　渋谷純子
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL　023‐672‐5301
発行年月日	2002年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やまがたもとやしきいせき 山形元屋敷遺跡	やまがたけん 山形県 やまがたし 山形市 おおあざかたやち 大字片谷地 あざもとやしき 字元屋敷	6201	平成12年度 新規登録	38度 12分 40秒	140度 18分 ７秒	20010611 ～ 20010824	2,000	花川住宅宅地関連河川整備促進事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	古墳時代	竪穴住居 川跡	土師器 須恵器	古墳時代初頭の土師器が出土。ほかにも川跡から中期までの土器が多く出土した。梁間２間、桁行４間の掘立柱建物などを検出。 （総出土箱数：52箱）
	平安時代	掘立柱建物 川跡	土師器 須恵器 （赤焼土器）	

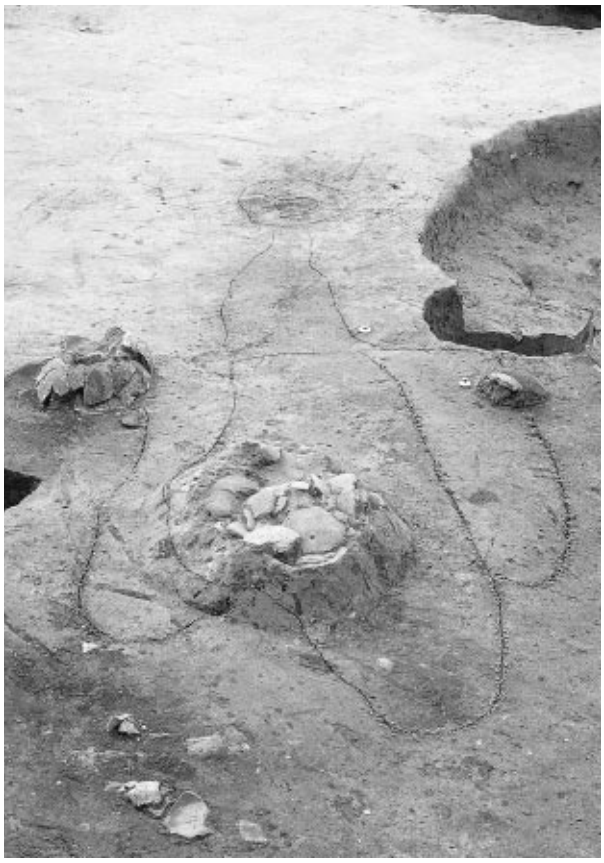
図　　版

調査区全景（北から）

図版２

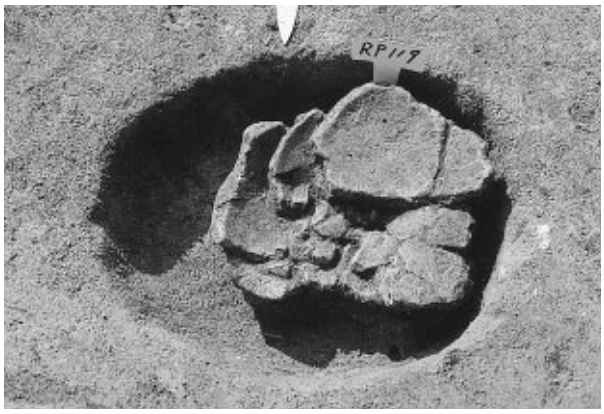
竪穴住居、掘立柱建物など（右が北）

竪穴住居ＳＴ69（北から）

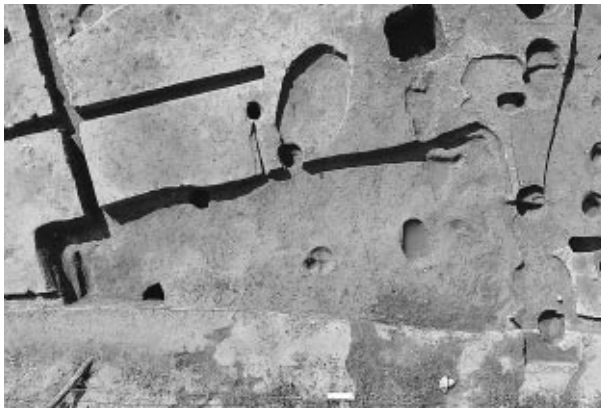


カマド検出（ＳＴ69）・東から

カマド断面（ＳＴ69・北東から）



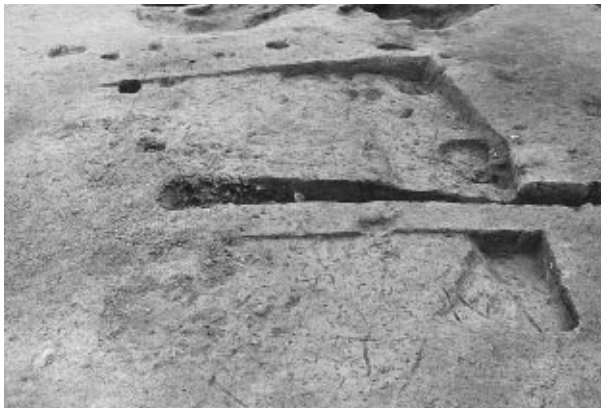
杯87（ＳＰ81）



掘形完掘（ＳＴ69・右が北）

断面（ＳＴ69・南西から）

柱穴ＳＰ92（西から）



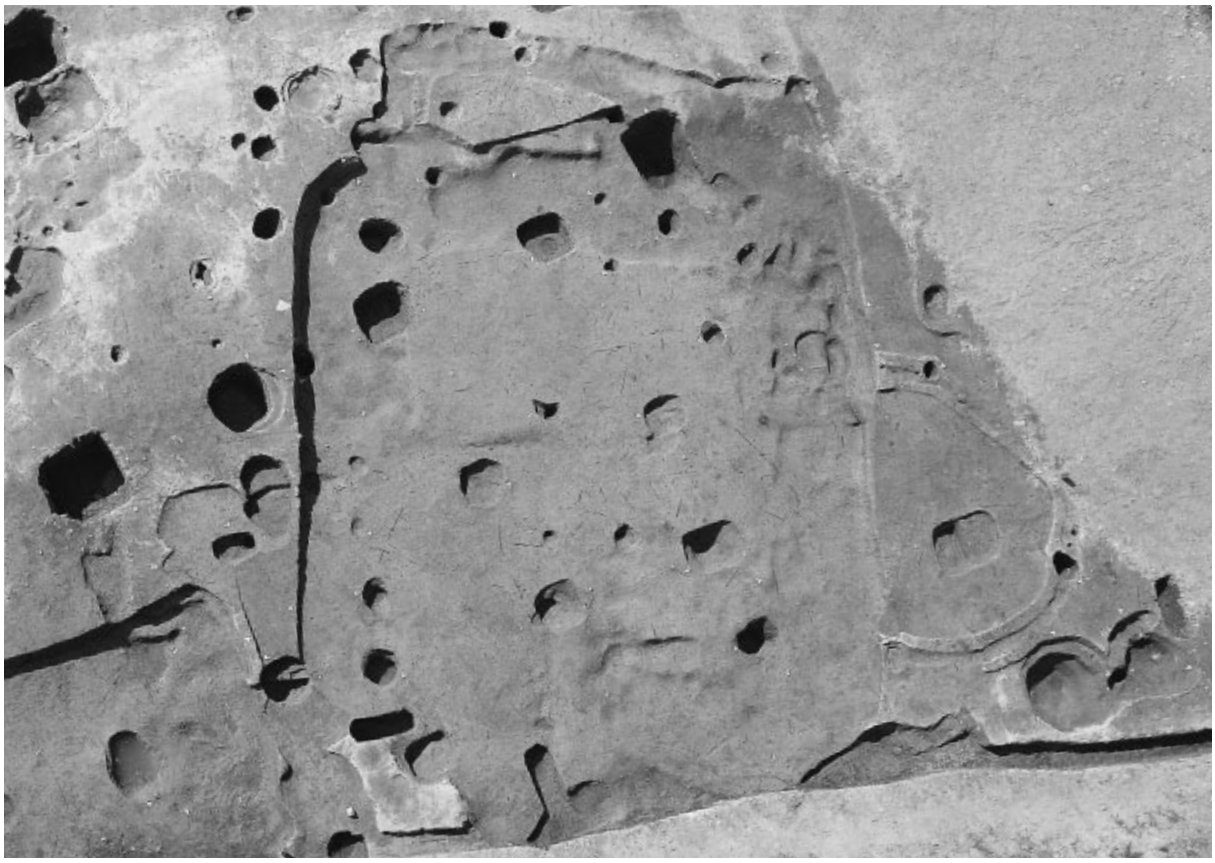
竪穴住居ＳＴ83（南から）

図版４

竪穴住居ＳＴ77（北から）

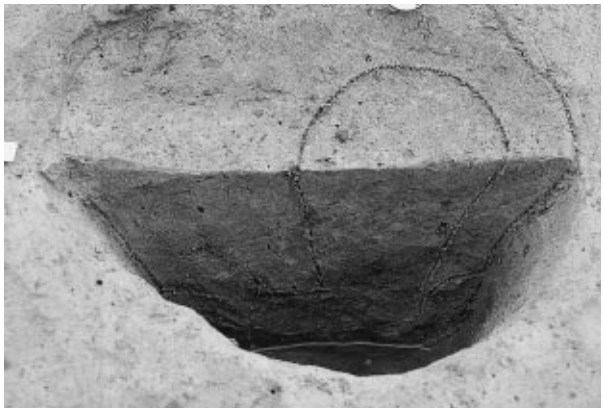
溝ＳＤ109（北から）

ＳＴ77断面ａ－ａ’(北東から）



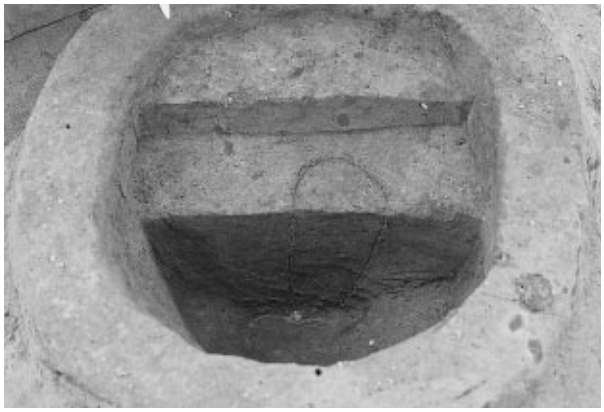
掘形完掘（ＳＴ77・右が北）

柱穴ＳＰ93（西から）



柱穴ＳＰ91（東から）

小型土器137（柱穴ＳＰ88・北から）



柱穴ＳＰ87（東から）

図版６

掘立柱建物ＳＢ101（南から）

柱穴ＳＰ37（南西から）

柱穴ＳＰ14（西から）

柱穴ＳＰ30（南西から）

柱穴ＳＰ23（西から）

柱穴ＳＰ42（西から）

柱穴ＳＰ34（東から）

柱穴ＳＰ35（東から）

柱穴ＳＰ36（東から）

柱穴ＳＰ13（北東から）

図版８

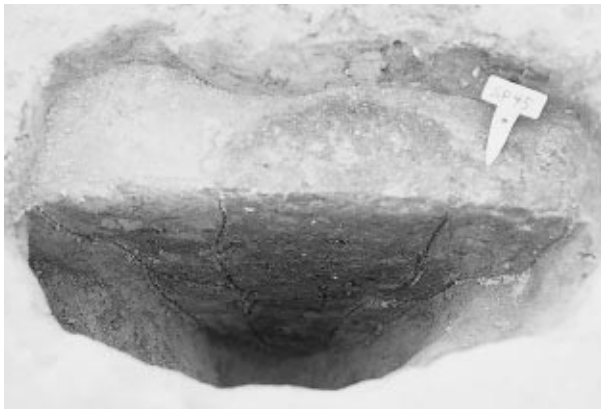
掘立柱建物ＳＢ102、溝ＳＤ61（北から）

柱穴ＳＰ18（西から）

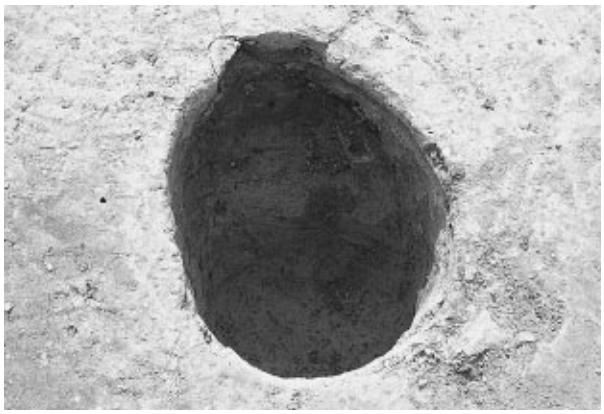
柱穴ＳＰ44（東から）

柱穴ＳＰ71（東から）

柱穴ＳＰ48（東から）

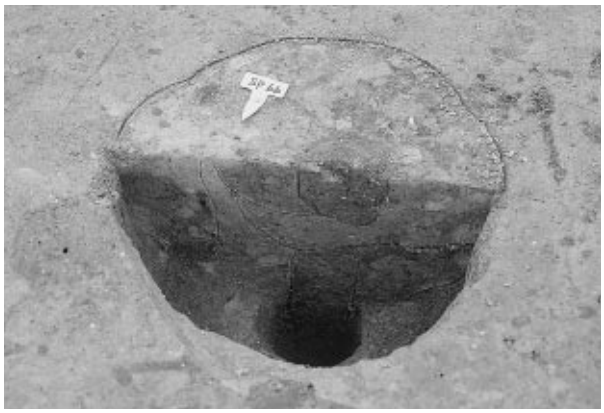


柱穴ＳＰ45（東から）



柱穴ＳＰ55（東から）

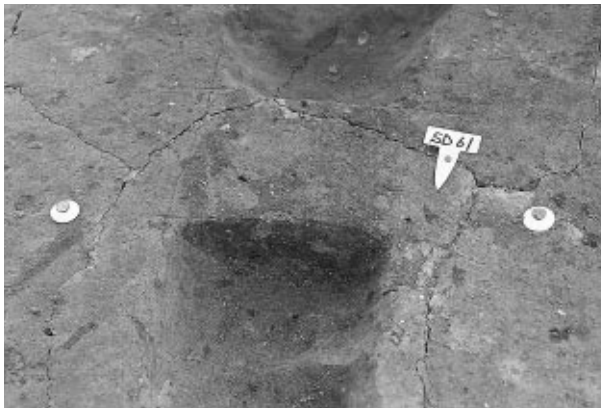
柱穴ＳＰ67（北西から）



柱穴ＳＰ66（北から）

柱穴ＳＰ26（南から）

柱穴ＳＰ56（南から）



溝ＳＤ61（断面ｂ－ｂ’・東から）

左ページは掘立柱建物ＳＢ102の完掘状況とその柱穴。
右ページのＳＰ45・55・67・66・26は、ＳＢ103の柱穴。
ＳＰ56は柵列ＳＡ107の柱穴。
左の写真は溝ＳＤ61の断面写真、完掘状況は左ページ上段の写真の円形に巡る溝。

図版10

川跡ＳＧ１遺物出土状況
（断面ｃ－ｃ’付近・南西から）

川跡ＳＧ１遺物出土状況
（断面ｃ－ｃ’北側・西から）

川跡ＳＧ１遺物出土状況
（20‐37グリッド付近・南から）

川跡ＳＧ１

断面ｃ－ｃ’
（川跡ＳＧ１・南東から）

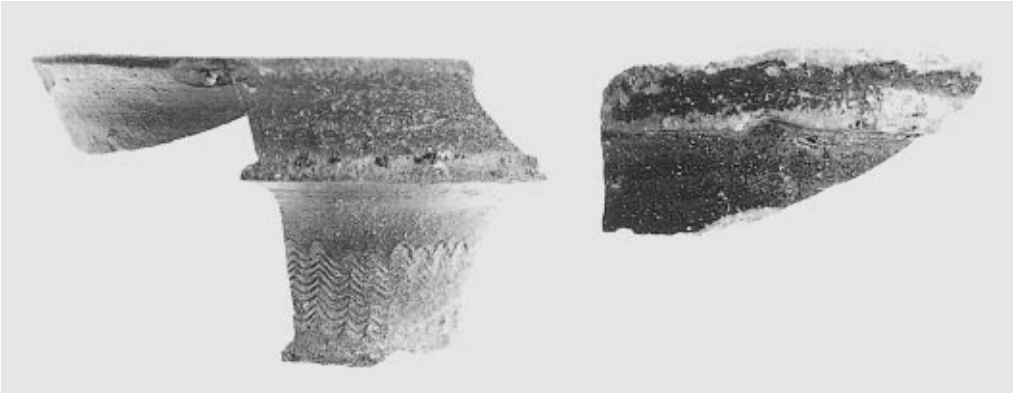
図版12

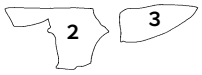
断面ｄ－ｄ’
（川跡ＳＧ１・南東から）

断面ｅ－ｅ’
（川跡ＳＧ１・南東から）

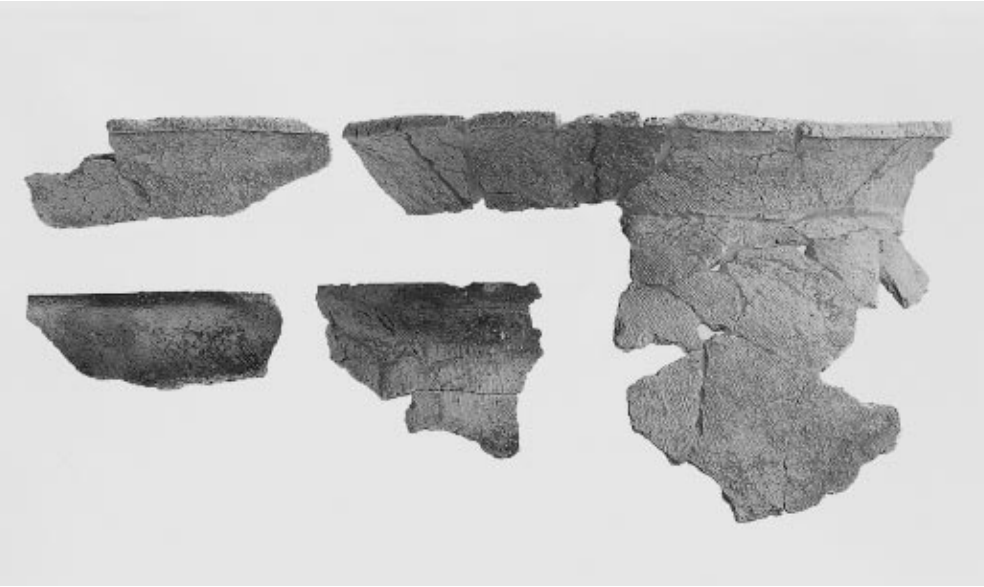
断面ｋ－ｋ’
（川跡ＳＧ１・東から）

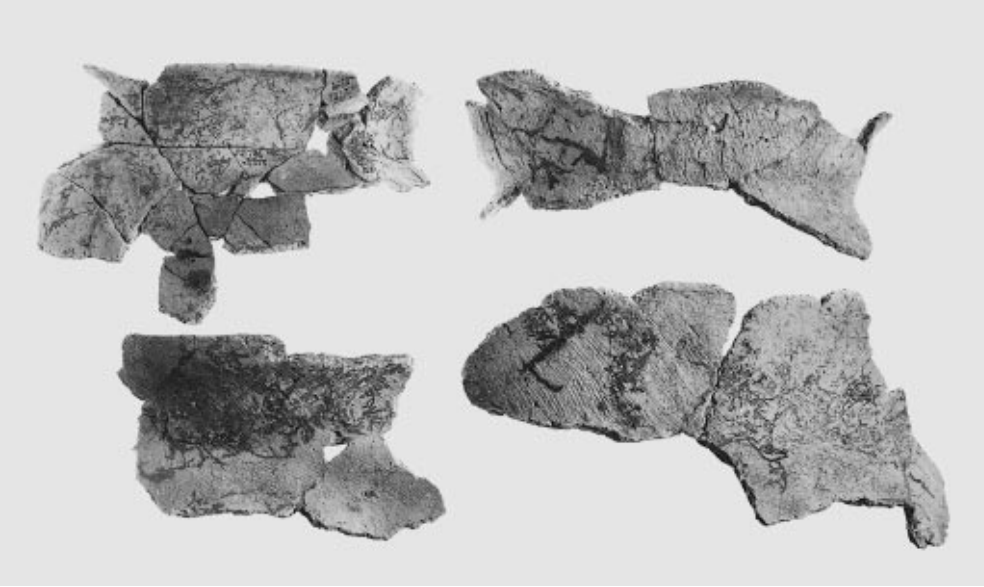
1



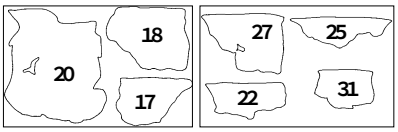


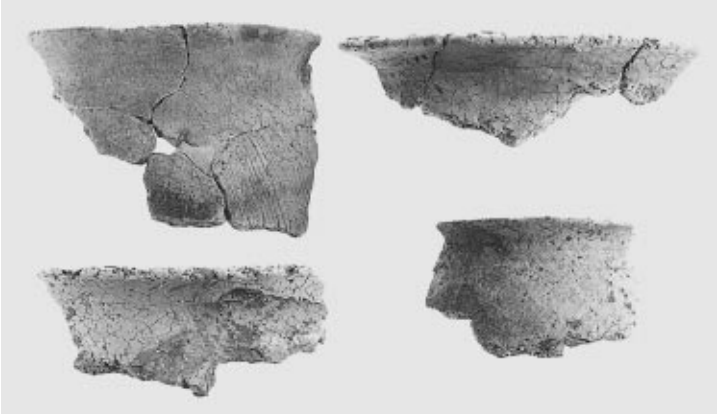
図版14





甕





21

23

26

24

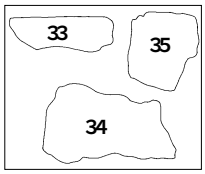
甕

図版16

32

32

37



38

36

壺

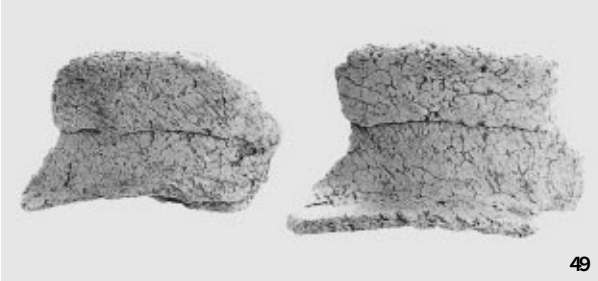
39

40

41

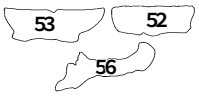
42

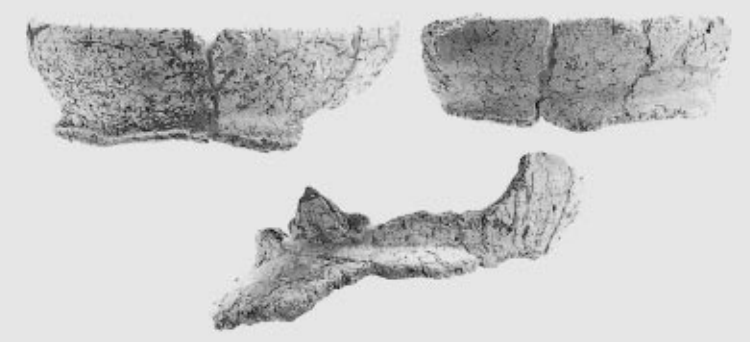
46


49

50

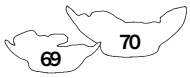
51



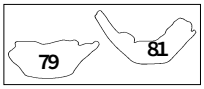


壺

図版18

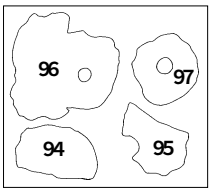


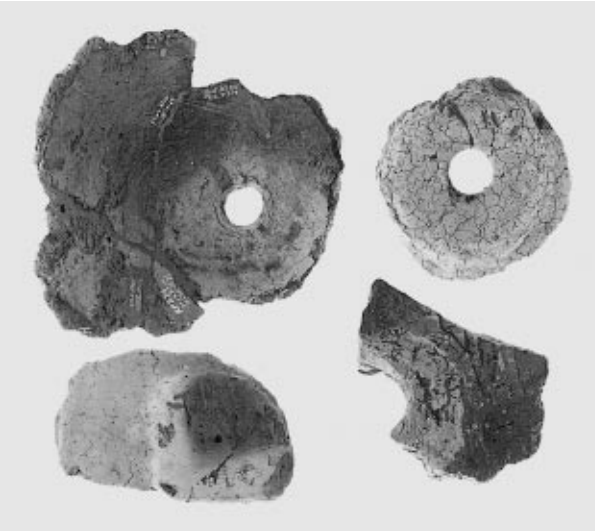
甕壺類の底部



甕壺類の底部、台付甕、杯

図版20





鉢、甑、高坏

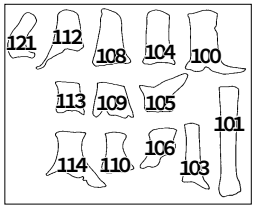
117

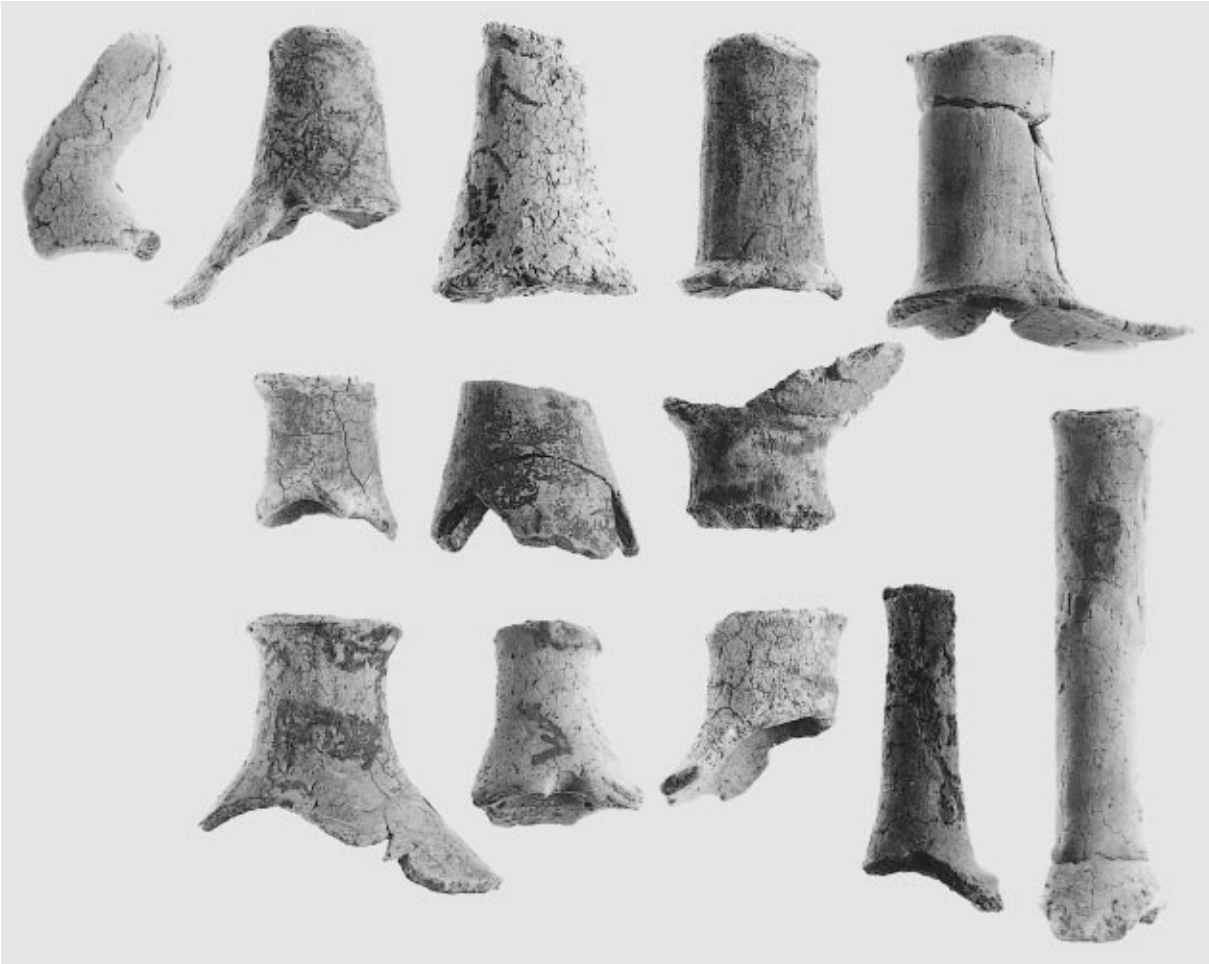
118

119

120

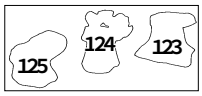
122

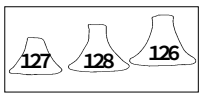




高坏

図版22

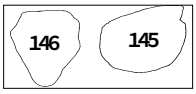


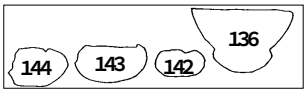


器台、丸底壺

136

137





147

小型土器、手づくね土器

図版24

奈良・平安時代の土器

148

149

151

151

坏・ヘラ書き

152

153

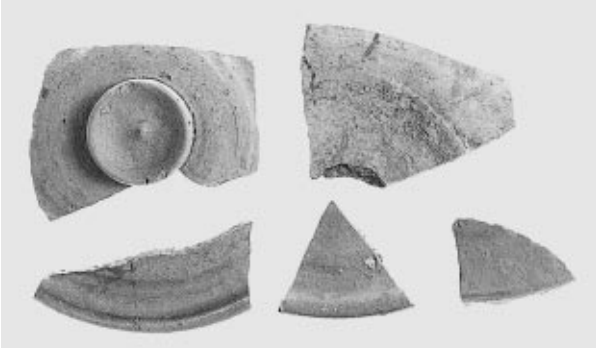
154

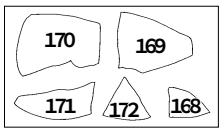
158

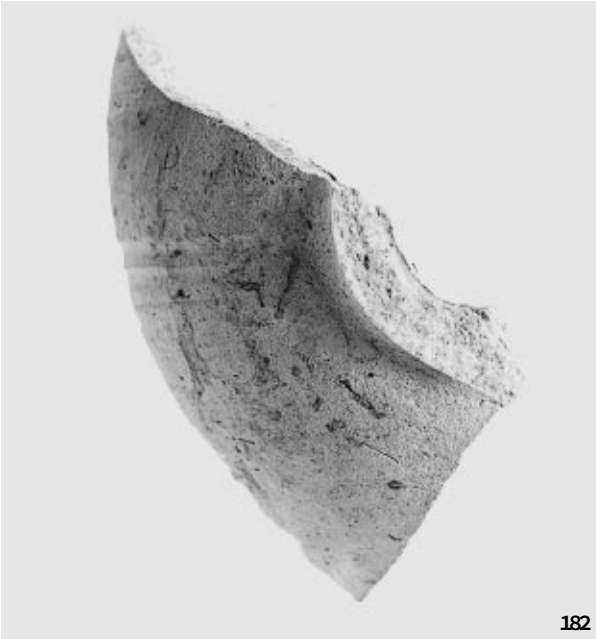
162

165

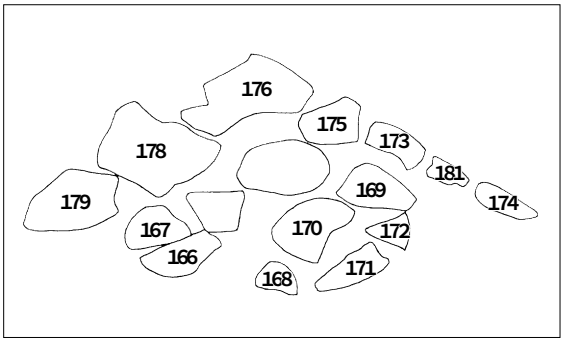
177

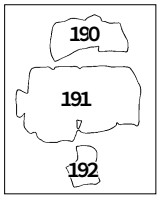


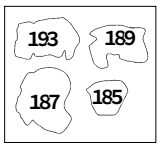


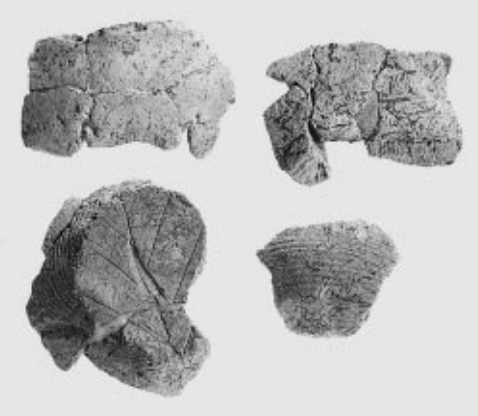

182

坏、高台付坏、壶、蓋、水瓶

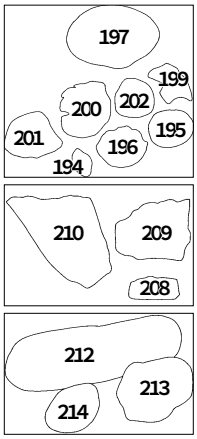








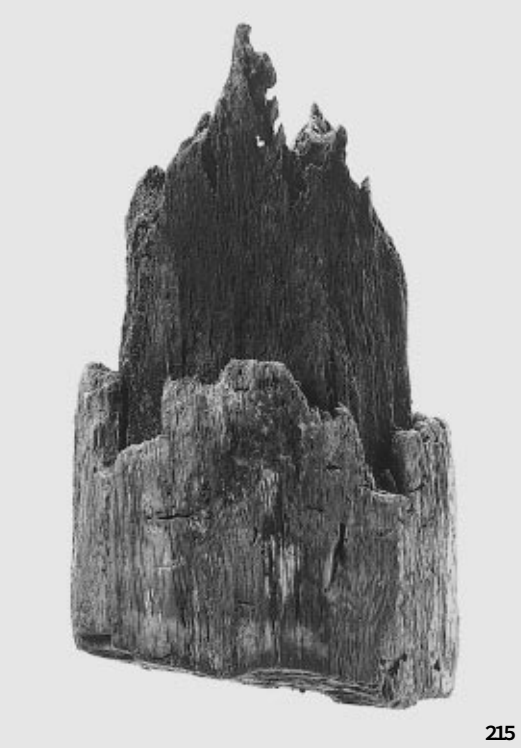
その他の須恵器、土師器（甕）

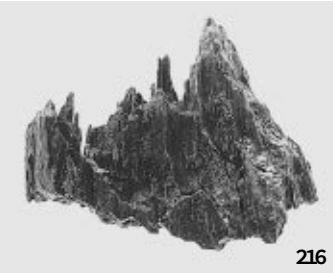


赤焼き土器、縄文土器、石器、礫

図版28

211


215


216

217

218

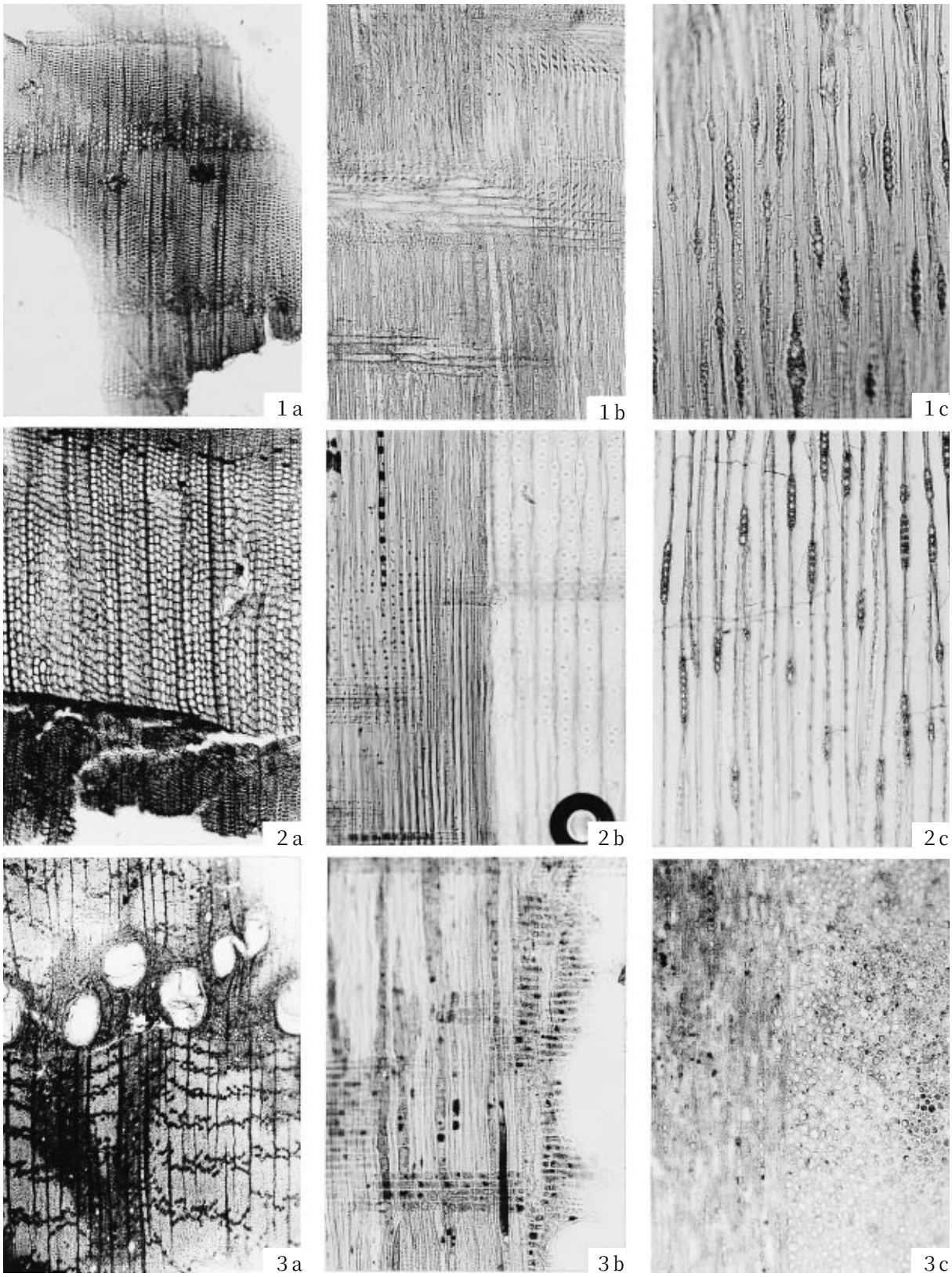
219

220

221

222

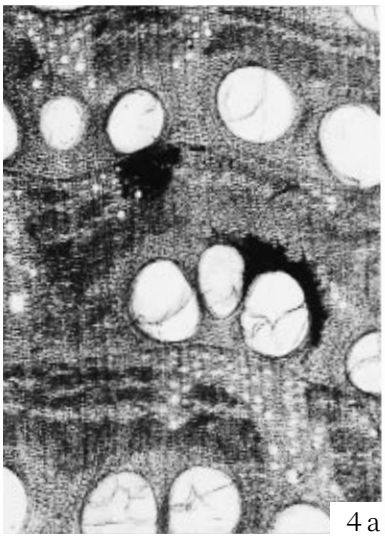
勾玉形石製模造品、柱材、礎板、杭

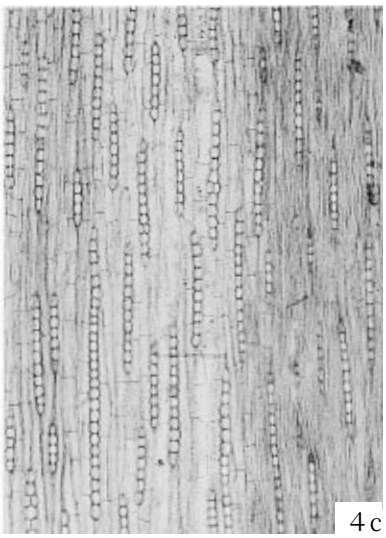


1　マツ属複維管束亜属（221）
2　スギ（RW165）
3　コナラ属コナラ亜属コナラ節（218）
a：木口　　b：柾目　　c：板目

200μm：a
200μm：b・C

図版30





1　クリ（RW84）
a：木口　　b：柾目　　c：板目

200μm：a
200μm：b・C

木材２

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第109集

山形元屋敷（やまがたもとやしき）遺跡発掘調査報告書

2002年３月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023-672-5301
印刷　大場印刷株式会社